

**ブラック・ヘーゲル入門
隠蔽された哲学者の恋
ベルリン大学の栄光 第4部
ドイツ アカデミック街道を歩く 丹野義彦（東京大学名誉教授）**

大学散歩の面白さを伝えるために、私はアカデミックツアーとして、ロンドン編、アメリカ編、イギリス編、イタリア編の4部作を刊行してきた（星和書店および有斐閣）。これからドイツ編をお届けしたい。私はこれを「ドイツ・アカデミック街道」と名前をつけた。ハイデルベルクとライプツィヒ、ミュンヘンの次は、ベルリンをとりあげる。ベルリンほど奥が深く面白い都市はない。

まず、ベルリン大学の歴史について5つに分けて述べる。本論はその第4部にあたる。

◆ベルリン大学の栄光
第1部 創立の謎 フンボルト理念のウソとシュライアマハー
第2部 フィヒテ 初代公選学長
第3部 シェリング ドイツ観念論哲学の要
第4部 ブラック・ヘーゲル入門 隠蔽された哲学者の恋
第5部 プロレスとしてのドイツ観念論哲学 ー哲学史上最も面白い人間ドラマの心理学ー

第4部 ブラック・ヘーゲル入門 隠蔽された哲学者の恋

ベルリン大学哲学科で、フィヒテの後を継いだのがヘーゲルである。1829～30年には、ベルリン大学第18代学長をつとめた。

ヘーゲルが大哲学者であることは誰も否定できないだろう。ヘーゲルの影響力はきわめて強かった。もしヘーゲル哲学が存在しなかったら、マルクス主義も、実存主義哲学も、分析哲学も生まれてこなかっただろうという人もいるくらいである。

大学生ヘーゲルのあだ名は「老人」

若きヘーゲル



http://biographyworldweb.blogspot.jp/2013/05/friedrich-hegel-biography-profile.html

ヘーゲルをからかった戯画



http://hegel.net/en/hegelbio.htm

ヘーゲルはホワイト？ ブラック？

ヘーゲルは、カントと並んで、「まじめな堅物な大学教授」という先入観がある。次のように言う人もいる。「ヘーゲルは、学問においても生活においても、良く言えば朴訥実直であり、悪く言えば鈍重で不器用

だった。学生時代に恋愛で成功しなかったのも、この不器用さのせいである。学問する場合にも、いつも正面からぶつかることしか知らなかった」（中埜, 1968, 10頁）。

いわばホワイト・ヘーゲルである。

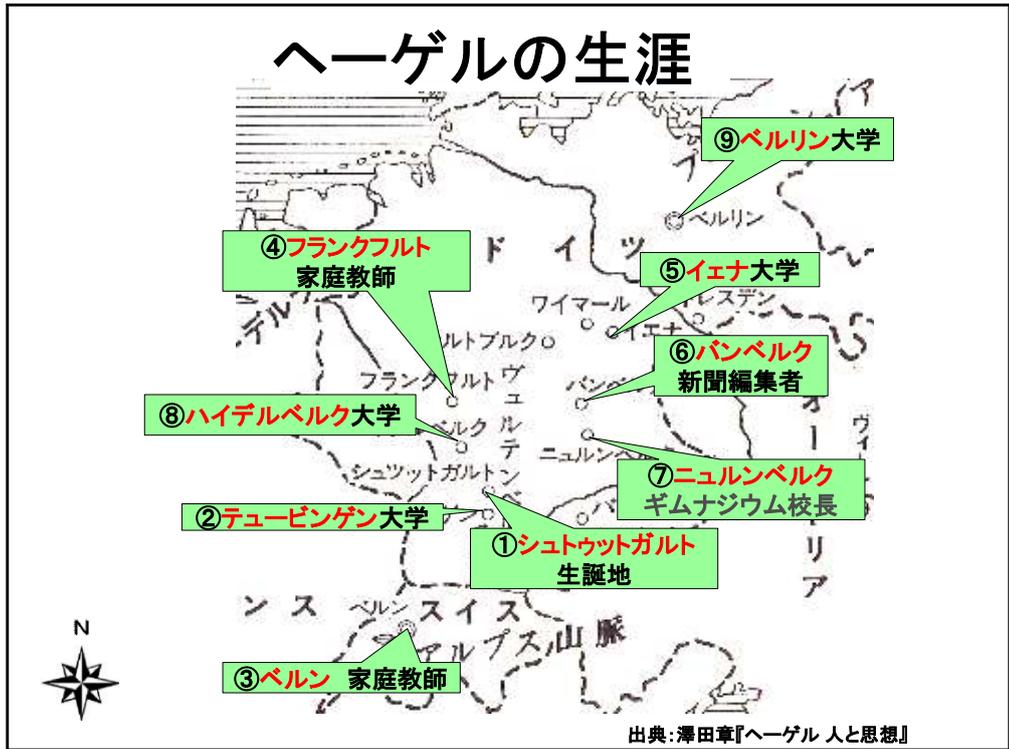
私もはじめはこういう先入観にとらわれていた。これではあまり興味はわからない。本論を書こうとしているいろいろな本を読んでいったが、はじめのうちは、確かにつまらなかつた。

伝記論的転回を迫る事実

ところが、大ドンデン返しが待っていた。調べていくうちに、イエナ時代（ヘーゲルの31～37歳）あたりから、ブラックなヘーゲルがいることに気がついた。伝記にはあまり触れられていないし、一般にもあまり知られていない。Wikipediaにも載っていない。親友を見捨てる。恩人でもある友人を裏切って罵倒する。貧乏な愛人に結婚するからと偽って妊娠・出産させ、母子を危険な街に見捨てて逃げ出す。婚約不履行のまま、ほとぼりが冷めるのを待って、若い金持ちの娘と結婚する。私生児を引き取るが大事にせず、早死にさせてしまう。まじめどころではない。ヘーゲルこそ、ドイツ哲学で最大の「ワル」な人格だと思うようになった。ヘーゲルのブラックな側面を知って、がぜん面白くなった。私はこれを「ブラック・ヘーゲル」と呼ぶことにした。伝記論的転回を迫る事実が待っていた。

ワルの人格はヘーゲル哲学にどのように反映しているのだろうか。こうしてヘーゲル哲学そのものにも興味がわいてきた。

ヘーゲルの生涯



出典: 澤田章『ヘーゲル 人と思想』

彼の人生をまとめると、下の表のようになる。ヘーゲルはドイツ国内のあちこちを転々とした。

◆ヘーゲルの生涯

	年	年齢		場所
①	1770	0	シュトゥットガルトに生まれる	シュトゥットガルト
	1777	7	地元のギムナジウムに入学	
②	1788	18	テュービンゲン大学神学部	テュービンゲン
③	1793	23	ベルンで家庭教師	ベルン (スイス)
④	1797	27	フランクフルトで家庭教師	フランクフルト
⑤	1801	31	イェナ大学講師	イェナ
	1807	37	イェナの街を出る	
⑥	1807	37	バンベルク新聞編集者	バンベルク
⑦	1808	38	ギムナジウム校長	ニュルンベルク
⑧	1816	46	ハイデルベルク教授	ハイデルベルク
⑨	1818	48	ベルリン大学教授	ベルリン
	1829	59	ベルリン大学学長に選ばれる	
	1831	61	コレラで死亡	

丸数字は地図の番号と対応する

①シュトゥットガルト時代

ゲオルグ・フリードリヒ・ヘーゲル（Georg Wilhelm Friedrich Hegel）は、シュトゥットガルトに生まれた。父はヴュルテンベルク公国の財務官であり、プロテスタントの真面目な家庭であった。母マリアは、ヘーゲルにラテン語を教えるほど教養ある婦人であったが、ヘーゲルが13歳の時に病死した。

ヘーゲルは3人兄弟の長男である。弟は軍人となったが、ナポレオンのロシア遠征に従軍し、若くして戦死した。

妹クリスティーネをヘーゲルはかわいがっていた。彼女も兄を溺愛していた。のちにヘーゲルが41歳で結婚すると、彼女は精神のバランスを崩して、精神科に入院した。ヘーゲルが亡くなると、3ヶ月もしないうちに、彼女は入水自殺を遂げてしまった。

ギムナジウムで古典語の教育を受けた

1777年、7歳のヘーゲルは、地元シュトゥットガルトのギムナジウムに入学し、ギリシャ語とラテン語を徹底的にたたきこまれた。ギムナジウムとは、ドイツにおける大学進学のための中等教育の学校であり、イギリスのグラマースクールや、フランスのリセに当たる。ギリシャ語とラテン語という古典語の学習を中心としている18歳でギムナジウムを卒業した。つまり、7歳から18歳までの11年間をこのギムナジウムですごしたことになる。

ギムナジウムでは、教師のレフラーを敬愛したが、ヘーゲルが14歳の時に、亡くなってしまった。

抄録製造機ヘーゲル

ヘーゲルは小さい頃から多読で、「抄録製造機」であった（スペンサー, 1996）。つまり、彼は学んだことを残らず記録し、その抄録を作った。彼は、「抜粋し、要約する手法」を開発し、文章や要旨をノートに記録した。「私はすべてを吸収したかったのだ」と言っている。そうした抄録にタイトルをつけて、アルファベット順に並べ、机の引き出しに入れて、いつでも利用できるようにしていた。こうして膨大な知識を貯めていた。いかにもヘーゲルらしい強迫性である。

②テュービンゲン大学時代

テュービンゲン大学の前期課程

18歳でギムナジウムを卒業したヘーゲルは、テュービンゲン大学の神学校に進んだ。父の希望にしたがって、牧師になるつもりであった。

官費奨学生であり、国からすべての学資が出ていて、黒いマントと白いカラーの制服を着て、教師から厳しい監視を受けながら生活した。

大学では、最初の2年は哲学を中心とする一般教育を学び、後半の3年は神学を学んだ。

最初の2年の哲学では、ベック、アーベル、シュヌーラーといった教官の講義を受けた。シュヌーラーから旧約・新約聖書の講義を受けた。そして、マギステルの学位（教師になるための学位）を得た。

テュービンゲン大学の後期課程

ヘーゲルは、20歳で後期の神学部に進んだ。教官は、フラット、ル・プレ、シュトールといった教授であった。ヘーゲルはこのうちシュトールから大きな影響を受けた（澤田, 1970）。当時のテュービンゲン大学神学部は、ルター派の正統的な教義を守り、テュービンゲン学派と呼ばれていた。しかし、学生たちは、当時の最先端であるフランス革命とカント哲学の啓蒙主義への関心が強かった。このため、学生には神学部の教授たちは古ぼけた保守的な権威としか映らなかった。ヘーゲルも同じであり、伝統的なキリスト教には批判的であったが、教授シュトールの講義をすべて受けて、キリスト教の基本的な知識を身につけた。

「老人」と呼ばれたヘーゲルの恋

大学生ヘーゲルのあだ名は「老人」

若きヘーゲル



ヘーゲルをからかった戯画



<http://biographyworldweb.blogspot.jp/2013/05/friedrich-hegel-biography-profile.html>

<http://hegel.net/en/hegelbio.htm>

ヘーゲルは、話し下手でまじめだったので、「老人」というあだ名がつけられた。ヘーゲルの成績表には、「無気力」という評価もあったというから、活発な学生ではなかったようである。

上の絵は、ヘーゲルのサイン帳に、ファロットという友人が描いたヘーゲル像である。ハゲ頭で長いヒゲをはやし、背中を曲げて、杖にすがってよろよろ歩いている。ヘーゲルをからかって描いた戯画である。親しい友人だから許されるのだろう。

ヘーゲルは、大学生あこがれのマドンナに恋をした。亡くなった神学教授の娘で、学生たちのあこがれだアウグステという女性に恋をした。友人のサイン帳に、ヘーゲルはこう書いた。「去年のモットーは酒、今年のモットーは恋！ 1791年10月7日、アウグステ万歳！」

しかし、彼は女性にはたいした幸運を持たなかった。

ディルタイによると、「ヘーゲルはかつて青春を経験しなかった。だが、彼は老人になるまで胸に火を燃やし続ける人間であった」。

とはいえ、大哲学者ヘーゲルも無気力になったり、恋をしたり、青春はふつうの人間であるのは少し安心する。

テュービンゲンの神学校（エヴァンゲーリッシュ・シュティフト）



ヘーゲルが学んだ神学校は今もテュービンゲンに残っている。テュービンゲンは有名な大学町であり、私のこのシリーズで後で取り上げる予定である。

左上の写真に示すように、テュービンゲンの街の真ん中をネッカー川が流れる。道を少し登ると、この神学校エヴァンゲーリッシュ・シュティフト Evangelisches Stift Tübingenがある。右下の写真がこの学校のマークである。

中世の時代に、ここにアウグスティン派の修道院が建てられた。宗教改革の後、1536年に、ヴュルテンベルク公国のウルリヒ公が、プロテスタントの神学校として作り変えた。1589年には天文学者となるケプラーがこの学校に入学した。

左下の写真のイラストのように、この建物は、いくつかの棟からなっている。入口を入ると石畳の中庭がある（右上の写真）。その周囲が回廊になっている。中を自由に見学できる（入場無料）。回廊は2階に登れる。2階にヘーゲルとヘルダリンとシェリングがいっしょに住んだ部屋がある。

ヘルダリンとシェリングと同室

一人は最も不幸な星のもとに、他の一人は最も幸福な星の下に



1790年から翌年にかけての半年間、ヘーゲルは、ヘルダーリンとシェリングと同室になった。

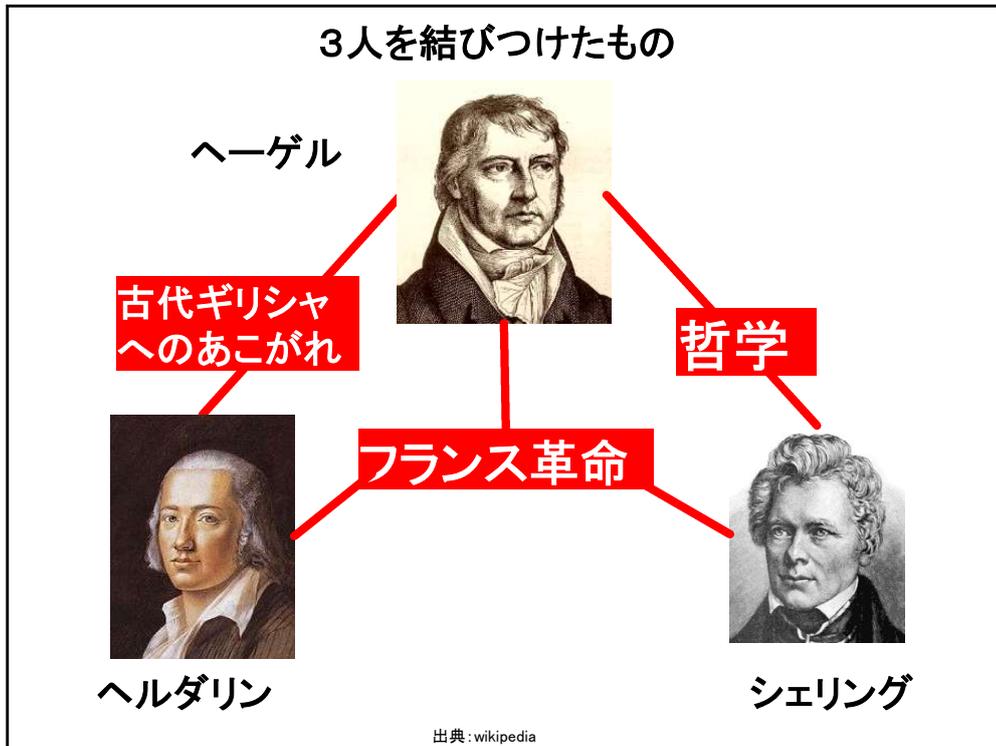
世界の哲学と文学に大きな影響を与えることになる3人が、同時期に同じ部屋で勉強したというのは、世界史的な事件であったと言える。ある意味で奇跡のような話である。

ヨハン・ヘルダーリン (Johann Hölderlin; 1770~1843年) は、ヘーゲルと同じ年齢であり、同じ年にここに入学した。ヘーゲルは、同級のヘルダーリンと親交を結ぶようになった。

一方、フリードリヒ・シェリング (Friedrich von Schelling; 1775~1854年) は、ヘーゲルより5歳も年下だが、15歳で大学入学を認められ、ヘーゲルより2年遅れて入学した。

ふたりについて、フィッシャー (1901) は次のようにいう。「その一人は最も不幸な星のもとに、他の一人は最も幸福な星の下に生まれ合わせていた」。これは、後述のように、人生半ばで精神の病に冒されたヘルダーリンと、一方で23歳で教授となりドイツ哲学を牽引し続けたシェリングとを対比させたものである。

3人を結びつけたもの



ヘーゲルとヘルダーリンを結んだものは、古代ギリシャへのあこがれであった。ヘルダーリンは、「ギリシャ人」とあだ名をつけられるほど、古代ギリシャへのあこがれが強い学生だった。一方のヘーゲルもギムナジウム時代に古代ギリシャの作品に親しんでいた。

ヘルダーリンとの交友は、ヘーゲルの思想にも大きな影響を与えた。

つまり、ヘーゲルは、古代ギリシャのような民族宗教（広く民衆の心の中から生まれた宗教）を理想と考えるようになった。これに対して、当時のキリスト教は、絶対君主政治のもとで、上から決められた宗教になってしまっており、民族宗教とは呼べない。ヘーゲルは、こうしてキリスト教に批判的になっていった。ここには、ヘルダーリンによる古代ギリシャ崇拝の影響が見られる。また、後述のようなフランス革命からの影響もみてとれる。

ヘーゲルは、のちにヘルダーリンに寄せた詩『エロイジス』を書いたりしている。ただし、ヘルダーリンが大学の詩人たちとの交友を深めたのに対し、ヘーゲルはそれ以上詩への関心を深めることはなかった。

一方のシェリングとヘーゲルを結んだものは、哲学だった。シェリングは早熟で大学時代から哲学への関心が強かった。ヘーゲルも、神学への興味が薄れてきて、哲学に深く関心をもつようになった。こうして、シェリングとの交流はどんどん深まり、後のイェナ大学へと続いていくことになる。

こうしてみると、テュービンゲン時代のヘルダーリンとシェリングとの交流が、後のヘーゲルの哲学にいか

に大きな影響を与えたかということがわかる。
ヘルダーリンとシェリングの関係は、それほど打ち解けたものではなかった。
もうひとつ、3人を結びつけたのは、フランス革命への関心である。

フランス革命とヘーゲル

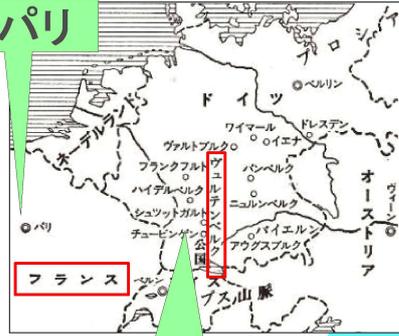
1789年バスチーユ襲撃



革命に祝杯



パリ



フランス

恐怖政治



出典: wikipedia

自由の樹の周りで踊る
ヘーゲル、ヘルダリン、シェリング



スペンサー『FOR BEGINNERS ヘーゲル』

1789年7月14日バスチーユ監獄への襲撃からフランス革命が始まった。ヘーゲルが18歳の時である。地図に示すように、ヴュルテンベルク公国は、ライン河をはさんでフランスと接していた。チュービンゲン大学の学生はフランス革命への関心を強め、神学校には政治クラブができた。ある日、学生たちはチュービンゲン郊外の野原に出かけ、「自由の樹」を植えた（右下の絵）。そして、樹の周りを踊って歌いながら、フランスにならって革命を祝った。この学生たちの中に、ヘーゲル、ヘルダリン、シェリングの3人がいたのである。ヘーゲルもフランス革命に熱狂した。その後、ヘーゲルは、バスチーユ襲撃を記念して、一生、7月14日には祝杯をあげたといわれる（右上のモンタージュ写真）。しかし、革命はその後、ロベスピエールらのテロ政治へと移行した。こうした動きに対してはヘーゲルは批判的になった。また、この中からナポレオンがあらわれ、ドイツを侵略し、前述のように、ドイツの大学教授の職を奪うことになった。ヘーゲルも被害者のひとりである。

3人が住んでいた部屋

3人が住んでいた部屋

シェリング



ヘーゲル



ヘルダリン



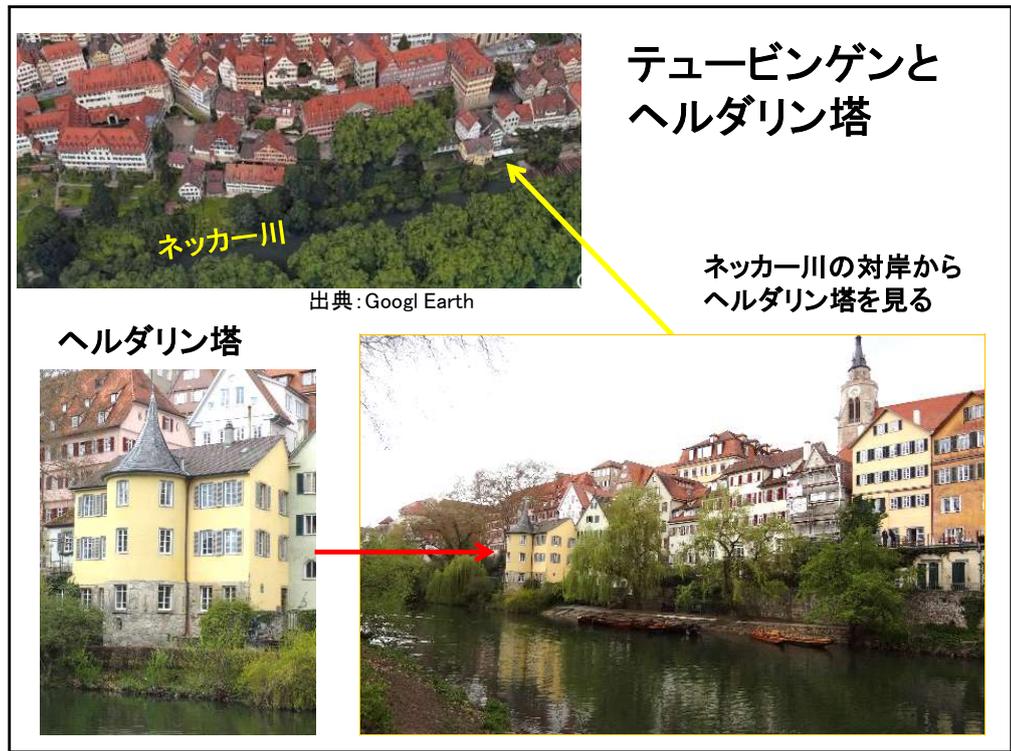


チュービンゲンの神学校エバンゲーリッシュェ・シュティフトの2階の回廊のすみに、ヘーゲルとヘルダリンとシェリングがいっしょに住んだ部屋がある。

この部屋の前には、ヘーゲル、シェリング、ヘルダーリンの3人のレリーフがある。この部屋の中は、今は図書室になっているようだ。部屋の中には入ることはできない。

この建物は、全体が博物館のようになっていて、いろいろな展示がある。3人の部屋の反対側には、出身者のケプラーやモリケのレリーフがある。その奥の部屋にも展示がある。

チュービンゲンとヘルダーリン塔



神学校のすぐ近くに有名な「ヘルダーリン塔」がある。黄色の建物と灰色のトンガリ屋根の塔が、ネッカー川に突き出している（左下の写真）。対岸から見ると美しい風景である（右下の写真）。

ヨハン・ヘルダーリン（1770～1843年）は、ネッカー川に沿ったラウフェンの出身で、早くから父を亡くし、母の手ひとつで育てられた。チュービンゲン大学で神学と哲学を学んだ。

前述のように、古代ギリシャへのあこがれを強めて、「ギリシャ人」とあだ名をつけられたほどである。大学では詩人たちと仲間になった。

ヘーゲルと同室になってからは、2人は古代ギリシャへのあこがれを共通のものとして仲良くなった。ヘーゲルもギムナジウム時代に古代ギリシャの古典に精通していたからである。

大学卒業後、ヘルダーリンは、詩人としての道を歩み、古代世界を主題とした詩を発表して有名になった。各地で家庭教師をしながら詩を作り、小説『ヒュペーリオン』や詩を書いた（後述）。

しかし、ヘルダーリンは、30代で統合失調症を発症した。チュービンゲン大学精神科に入院し、退院後は知人の家で独居した。そこが「ヘルダーリン塔」と呼ばれる。

ヘルダーリン塔の内部

ヘルダーリン塔の内部



ヘルダーリン

出典: wikipedia



出典: wikipedia



ヘルダーリン塔は、ネッカー川のほとりに建っている。ヘルダーリンは、1807年から、1843年の死に至るまでの36年間で、この建物で暮らした。とくに幽閉されていたというわけではなく、自由に外出もしたようだ。静かにのんびりと暮らしたようだ。

この塔は、もともとはツヴィンゲルという13世紀以来の市の城壁の跡である。

内部は見学することができる（10～12時と15～17時、料金2.5ユーロ）。

建物の中はきれいで、清潔である。ヘルダーリンの本や原稿やヘルダーリンの描いた絵（？）が飾ってある。ピアノも置いてある。

ヘルダーリンの碑 テュービンゲン旧植物園

ヘルダーリンの碑 テュービンゲン旧植物園

「ヘルダーリンの思想に」
1881年除幕





1881年には右腕があった



出典: wikipedia

もうひとつヘルダーリンとヘーゲルに関係した碑がテュービンゲンにある。

ヘルダーリン塔の近くに、テュービンゲン旧植物園がある。今はふつうの公園であるが、この中に、白いギリシャ彫刻が立っており、その裏側に、「1881年除幕式 ヘルダーリンの思想に」と書いてある。ヘルダーリンは古代ギリシャの崇拜者であり、それを記念して建てられた。ヘーゲルは、ヘルダーリンの古代ギリシャ崇拜の影響を受け、またそれがキリスト教批判という思想的な影響を受けたことは前述のとおりである。

この像は、1881年に作られた時は右手もあったのだが、後に折られてしまい、今のような姿になった。

なお、ハイデルベルクにも、ヘルダリン広場とヘルダリンの詩碑がある（私のハイデルベルク編を参照いただきたい）。

<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/tanno/>

最も幸福な星のもとに生まれ合わせたシェリング

シェリングは、レオンベルクで生まれ、恵まれた家庭に育った。15歳で大学に入った早熟の子であった。

前述のようにフィッシャー（1901）が「最も幸福な星のもとに生まれ合わせた」というのも無理はない。「16歳ですでに大学生であり院生であるような人で、プロモーティオン（進学）のときは一番、ヘブライ語知識は抜群、ベーベンハウゼンの牧師にして教授であった父が一七九〇年一〇月にこの息子をテュービンゲン神学院に送り届けたとき、自分で特色づけているように、まさに「早熟の天才」であった」（フィッシャー、1901）。

フランス革命への関心から、ヘーゲルと仲良くなり、2人は哲学への関心を強めた。

大学卒業後は、若くして自分の哲学体系をきづき、ヘーゲルよりも先に哲学者として世に出た。

テュービンゲン時代のヘーゲルの思想

ヘーゲルの思想はしだいに変わっていく。岩崎（1967）などを参考にして、その変遷を時代ごとに追ってみよう。

テュービンゲン時代のヘーゲルの研究は、キリスト教の歴史である。「民族宗教とキリスト教」という論文を書いた。

下の表に示すように、彼はキリスト教に対して否定的であった。というのは、彼にとって理想的な宗教はギリシャ宗教であった。ギリシャ宗教は、国民全部が共通して持つ生活に密着した宗教であり、これを彼は「民族宗教」と呼んで、高く評価した。こうしたギリシャ崇拜にはヘルダリンの影響が見て取れる。

これに対して、キリスト教は、当時は専制政治によって上から押しつけられた宗教であり、望ましいものではない。ここにはフランス革命の影響がみられる。

◆テュービンゲン時代のヘーゲルの思想

	「いいね」○  善玉	「だめだね」×  悪玉
テュービンゲン時代	ギリシャ宗教 民族宗教 (国民全部が共通して持つ生活に密着した宗教) ↑ ↓ 矛盾	キリスト教 (専制政治によって上から押しつけられた宗教)

岩崎（1967）にもとづく

③ベルン家庭教師時代

ベルンのシュタイガー家で家庭教師

ベルンのシュタイガー家で家庭教師



シュタイガー家の夏の別荘



<https://www.stadtwanderer.net/?p=2131>

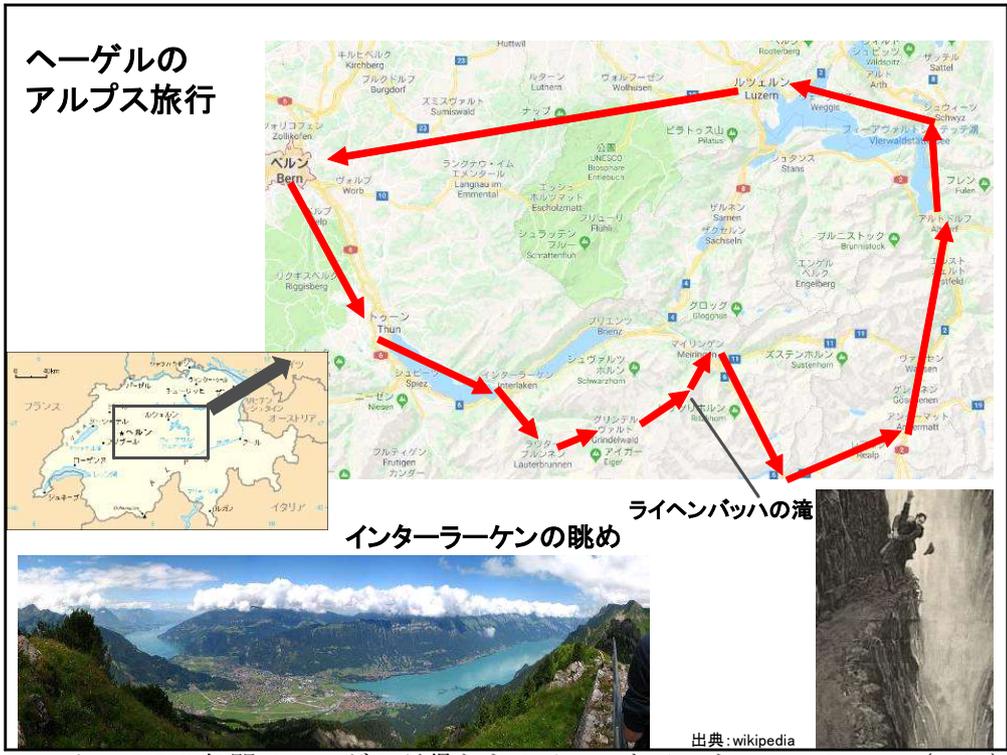
1893年、23歳のヘーゲルはチュービンゲン大学神学部を卒業して、牧師試補の資格を得た。しかし、彼は、牧師の道を進むことには自信がなく、哲学の教授になりたいと考えた。このため、家庭教師となることにした。当時は、大学の教員になろうとする者は、貴族の家庭教師をしながら、研究をして、大学から招聘されるのを待つという進路をとるのが普通だった。カントは9年間、フィヒテは8年間、シェリングは3年間、そしてヘーゲルは7年間、家庭教師をした。

ヘーゲルは、スイスのベルンの貴族シュタイガー家の家庭教師となった。ここでシュタイガー家の2人の娘と1人の息子に勉強を教えて、3年をすごした。

ベルンの家庭教師先は、ユングケルンガッセ51番地 junkerngasse 51 で、この建物は今も残っている（写真左）。

ベルン時代はヘーゲルにとってゆううつな時期だった。周りはフランス語を話す外国人で、ドイツ人のヘーゲルは孤独を味わった。また、思想的にも行き詰まっていたという。彼は、ヘルダリンやシェリングに不満を手紙に書いた。

アルプスの絶景に感動しないヘーゲル



スイスでの3年間でヘーゲルが得たものは4つある、とフィッシャー（1901）はいう。

- ① フランス語の知識がついて、フランス革命の情報に接することができたこと。
- ② ベルン貴族の風習や見解を見聞きできたこと。
- ③ 貴族の政治的な独占の様子を目の当たりにして、政治的な関心をもったこと。
- ④ スイスの美しい壮大な自然に親しむ機会を得たこと。

③についていうと、スイスの貴族支配を批判したカルの著書を翻訳し、1798年に匿名で出版した。これがヘーゲルの最初の出版であった。ただし、哲学の業績とはなっていない。

④についていうと、1796年、26歳のヘーゲルは、家庭教師の仲間3人とともに、7日間のアルプス旅行をおこなった。

左下の地図に示すように、スイスの中央部を回る代表的な旅行コースである。

コースは、地図に示すように、ベルンを出発し、トゥーンに出て、インターラーケンに行き、ラウターブルンネン、グリンデルヴァルトに行き、そこでライヘンバッハの滝を見た。マイリンゲンに出て、グリムゼル峠、フルカ峠、ゴットアルト峠を越えて、アンデルマットへ向かう。そこから北へ向かい、フィアヴァルトシュテッテ湖に出て、この湖の周りを回って、ルツェルンへ出る。ここからベルンへ戻る。

今ではこのコースは、ほとんど列車や自動車で行くことができる観光ルートだが、当時はそうした交通の便もなく、ほとんど徒歩旅行だった。しまいには傷だらけの足を引きずって歩かなければならない苦行となった。

そのせいもあるのかもしれないが、ヘーゲルのアルプス印象記は驚くべきものである。

上の写真のインターラーケンからの眺めには、誰しも自然の雄大さを感じるだろう。ところがヘーゲルは全く逆だった。彼のアルプス印象記には、感動の表現がどこにもないという。巨大な山や氷河に対して、ヘーゲルは反発を感じるだけで、気味の悪い不安なものという印象しかもたなかった。「その眺めはそれだけのもので、少しも興味のあるものを与えてくれない。精神には決してそれ以上の課題を与えない」。ヘーゲルの自然観は驚くべきものである。

こうした無感動は、ヘーゲルがうつ状態だったことをあらわすのかもしれない。あるいはいっしょに旅行した家庭教師仲間への見栄もあったかもしれない。

ただひとつライヘンバッハの滝だけには、ヘーゲルは少し哲学的な興味を持ったようだ。なお、その95年後の1891年に、この滝にシャーロック・ホームズとモリアーティ教授が落ちて、有名になる（右下の写真）。

ベルン時代のヘーゲルの思想

家庭教師をしながら、ヘーゲルは哲学者に向けて研究を始めた。シュタイガー一家の図書室を利用できたのは幸いであった。

この時代には「イエスの生涯」と「キリスト教の実定性」という2つの論文を書いた。

カントの宗教哲学にはまる

この時代に、ヘーゲルはカントの著作を研究した。また、この時期から、シェリングの諸論文からしだいに影響を受けはじめたと言われる。

カントは、1781年に『純粋理性批判』を発表して、形而上学を批判した。つまり「神は存在するか」といった神学などの形而上学は、答えの出ない問題であり、学問としては成立しないことを明らかにした。

カントはこうした神学批判を学問として厳密に考えたのだが、こんなことは当たり前のことである。「神は存在するか」とか「神とはどのようなものか」といった問いは、ちょうどSFとかファンタジー小説のようなものであり、その人の胸三寸で恣意的にどうとでも結論がつけられる。どちらが正しいか論争に決着がつかない。人によって考え方も違うし、ああでもないここでもないという決着のつかない言葉遊び（スペキュレーション）をずっと続けることになる。神学者にとっては飯のタネなのかもしれないが、それ以外の人にとっては、実生活が変わるわけではない。このような結論に達するのに、哲学は何千年もかかったことになる。

さらに、カントは、1788年の『実践理性批判』において、理性にもとづいた普遍的な道徳があり、この道徳を実現することが人間の義務であるとした。つまり、「善」とは、理性によって考えれば結論が出せるものだとした。

続いて、カントは、1793年に宗教論『単なる理性の限界内における宗教』を発表した。ここでカントは、宗教の理性的な側面に注目した。宗教の諸側面から、非合理的なもの（例えば、奇蹟や予言）を取り除いて、理性的な側面だけを考え、これを「理性宗教」とした。カントによると、宗教から非合理的・神学的（形而上学的）な側面を取り除いて、理性的な側面だけを考えると、「道徳」が残る。理性宗教は、単に「道徳」から要請される実践的・社会的なものにすぎない。つまり、宗教は道徳に従属するものにすぎないことになる。こうした考え方は、少し極端な感じもするが、当時の「啓蒙主義」と呼ばれるものであり、ヘーゲルやフィヒテに影響を与えた。

これに反発したのが、前述のシュライアマハーであり、カントのように宗教から非合理的なもの（例えば、奇蹟など）を取り除いたら、それは宗教ではない。宗教とは神との神秘的一体化の聖なる瞬間である。つまり、宗教は「理性」にあるわけではなく、「感情」にある。こう述べるシュライアマハーと、理性宗教の立場にたつカントやヘーゲルは正反対である。

ベルン時代のヘーゲルは、カントの理性宗教の立場に賛成し、ここからキリスト教を批判するようになった。この時代には「キリスト教の実定性」と「イエスの生涯」という2つの論文を書いた。まず「キリスト教の実定性」についてみてみよう。

◆ベルン時代のヘーゲルの思想

	「いいね」○  善玉	「だめだね」×  悪玉
チュービンゲン時代	ギリシャ宗教 民族宗教 (国民全部が共通して持つ生活に密着した宗教)	キリスト教 (専制政治によって上から押しつけられた宗教)
	↑ 矛盾 ↓	
ベルン時代	カントの理性宗教 (非合理的なものを否定した理性的な宗教) イエスは理性宗教 ← ソクラテスの弟子たち	キリスト教 非合理性 (奇蹟・予言) 実定宗教 (内心の自由にもとづく信仰ではなく、 外的な権威にもとづく信仰) ユダヤ教 律法宗教 → イエスの弟子の イエスへの愛 教団が 実定宗教化

岩崎 (1967) にもとづく

この表に示すように、チュービンゲン時代のヘーゲルは、「ギリシャ宗教・民族宗教」を理想として、キリスト教を批判した。これに対して、ベルン時代になると、カントの理性宗教の立場から、キリスト教を批判するようになった（直観的なチュービンゲン時代よりも理論的な批判となった）。そして、これからはカントのような理性宗教をめざすべきとした。

ヘーゲルによると、キリスト教は、決して理性宗教ではなく、「実定宗教」である。実定宗教とは、内心の自由にもとづく信仰ではなく、外的な権威にもとづく信仰のことである。

キリスト教が「実定宗教」に成り下がったのは、もともとユダヤ教がそうだったように、「律法」という

外的な権威を重視しているからである。ユダヤ教の律法や権威は、理性宗教からみると望ましくない。

また、「イエスの生涯」という論文において、ヘーゲルはイエスの時代にさかのぼってこの問題を考えた。表に示すように、イエスがキリスト教をはじめた時は「理性宗教」だった。イエスは理性的な道徳を重んじ、内心の理性に従って生きることを教えた。奇蹟や予言などの非合理的なものは排除した。

ではなぜキリスト教が「実定宗教」になり下がったかという点、それはイエスの弟子たちのせいである。このことは、ギリシャ時代のソクラテスの弟子と較べるとよくわかる。ソクラテスの弟子は、まずソクラテスの説いた真理を愛し、そこからソクラテスを尊敬した。これは理性的である。これに対し、イエスの弟子たちは、まずイエスその人を愛し、そこから信仰が始まる。これは理性的なものではない。だから、イエスの奇蹟や予言を信じるといった非合理的な要素が入り込んでくる。ここから「教義」にもとづく「教団」ができて、「実定宗教」に成り下がってしまったという。イエスは理性的だったのに、弟子たちが理性的ではなかった。イエスは悪くない。悪いのは弟子たちである。

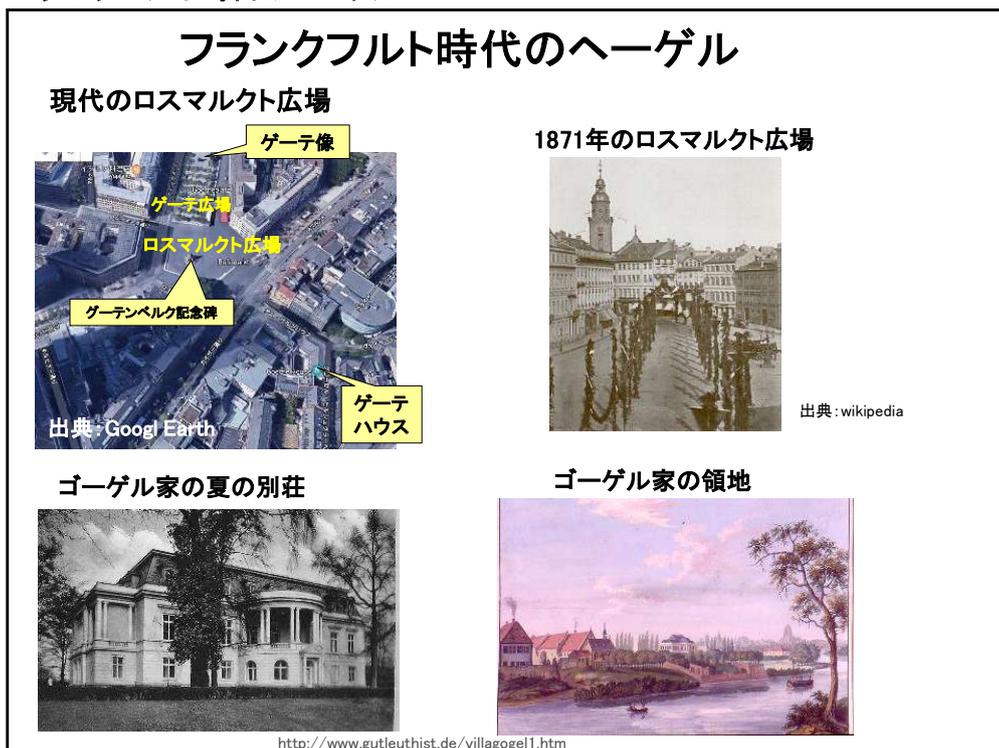
以上のように、ベルン時代までのヘーゲルにとって、悪玉はキリスト教である。善玉は、テュービンゲン時代は「ギリシャ宗教・民族宗教」であり、ベルン時代は「理性宗教」であり、時代によって異なる。

しかし、ここで同じ善玉である「ギリシャ宗教・民族宗教」と「理性宗教」を較べてみると、これらは決して同じものではない。よく考えれば両者には違いがある。ここに「矛盾」が生じた。どちらが正しいのだろうか。どちらを信じればよいのだろうか。

このギャップにヘーゲルは悩んだ。この矛盾を弁証法的に「止揚」したのがフランクフルト時代である。

④フランクフルト家庭教師時代

フランクフルト時代のヘーゲル



ベルンでうつ状態となったヘーゲルは、そのことをヘルダリンやシェリングに手紙で訴えた。そこで、彼らは新しい職場を探してくれた。ヘルダリンは、その時フランクフルトで家庭教師をしており、同じフランクフルトの商人ゲーゲル (Johann Noe Gogel; 1758～1825年) の家庭教師をあっせんした。

ヘーゲルはこの話に飛びつき、ベルンを去った。一度故郷に戻った後、1897年、27歳で、フランクフルトへ行き、ゲーゲル家で4年間家庭教師をした。

ゲーゲルの家は、フランクフルトのロスマルクト広場にあった。左上の写真のように、ロスマルクト広場は、フランクフルトの中心部にある観光スポットである。現在、ロスマルクト広場には、ゲーテンベルク記念碑が建っており、北側にはゲーテ広場があり、ゲーテ像が建っている。また、ロスマルクト広場少し南には、ゲーテの生家 (ゲーテハウス) があるので、観光客も多く訪れる。

今から約200年前のヘーゲル当時も、ロスマルクト広場は、右上の写真のように、ビルが並ぶ商業地であった。当時の町並みは空襲のためにすでにない。

ゲーゲル家はワインの販売で成功した商人であり、フランクフルト近郊に土地をもっていた (右下と左下の写真)。

フランクフルト時代には、ナネット・エンゲル (1775～1840年) という5歳年下の女性と文通をした。

ヘルダリンに寄せた詩『エロイジス』

フランクフルト時代のヘーゲルは、ベルンと違って、時間的余裕もあり、愉快的生活を送ったようだ。

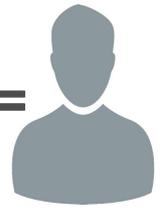
ヘーゲルは、勤め口を紹介してくれたヘルダリンに感謝した。ヘルダリンの家庭教師先ゴンタルト家とヘーゲルのゲーゲル家は近くにあり (両家は親戚であった)、ふたりは友情を深めた。

ヘーゲルは、1796年に、『エロイジス：ヘルダリンに寄せて』という詩を書いた。エロイジス (エレスウス) とは、古代ギリシャのアテネの西北にあった都市で、豊作の女神を祭った神殿があった。この場所での靈感をあらわしたのがヘーゲルの詩である。ヘルダリンとヘーゲルはつねに古代ギリシャで結びついていた。ただし、これはヘルダリンに送ったのではなく、ヘーゲルの別の友人に送ったものである。

ヘルダリンの恋と『ヒュペーリオン』

ヘルダリンの悲恋と発狂

ヘルダリン ズゼッテ ゴンタルド(夫)



<https://writerpictures.photoshelter.com/gallery>

ディオティマから
愛の哲学を教えらる
ソクラテス
(プラトンの『饗宴』)



出典: Youtube

ヘルダリンにとっても、親友のヘーゲルが近くにいるのはとても心強いことであった。なぜなら、当時のヘルダリンは、心理的な危機状況にあったからである。

ヘルダリンは、テュービンゲン大学の神学校を出た後、イェナへ移った。そこで、古代ギリシャ崇拝者であるシラーと親交を結んだ。ヘルダリンは、1794年（24歳）に、シラーが主催する雑誌に小説『ヒュペーリオン』第1部を発表し、高揚した時期だった。1796年（26歳）にフランクフルトの銀行家ゴンタルトの家庭教師として住み込み、4人の子どもを教えた。そこで、ヘルダリンは、ゴンタルトの妻のズゼッテに恋をした。この恋愛は『ヒュペーリオン』に描かれた。

『ヒュペーリオン』第2部には、「ディオティーマ」というヒロインが登場する。この名前は、プラトンの『饗宴』の中で、ソクラテスが「愛の哲学」を教えられた女性哲学者・祈祷師の名前である（左下の絵）。彼女の愛の哲学がのちに「プラトニック・ラブ」の起源となった。

ヘルダリンは、『ヒュペーリオン』の中で、ディオティーマに重ねて、ズゼッテへの愛を表現した。

ヘルダリンの悲恋と発狂

しかし、ヘルダリンの恋は悲劇に終わった。ズゼッテとの関係を知った夫は激怒し、1798年、28歳のヘルダリンをこの家を追い出した。その後、ヘルダリンはズゼッテと文通を続けたが、ヘーゲルがその仲介をしたこともある。しかし、4年後の1802年にズゼッテは亡くなってしまった。

このような不幸な事件がヘルダリンの心を傷つけた。1790年代の終わり頃からヘルダリンには統合失調症の症状があらわれるようになった。ヘルダリンは、各地を転々とさまよい歩いた。ホンブルク、シュトゥットガルト、ザンクト・ガレン、ボルドーなどで家庭教師を転々とし、フランスを放浪してパリに着く。ズゼッテの亡くなった1802年には、ボロを着て病み疲れた姿をニュルティンゲルの家族のもとに現した。

そして、彼はテュービンゲンに行き、テュービンゲン大学精神科に入院し、退院後、1807年（37歳）から、1843年（73歳）の死に至るまでの36年間を、ネッカー川の「ヘルダリン塔」で暮らした。73歳まで生きたのだから夭折というわけではない。しかし、ヘルダリン塔での36年間は、外出が禁じられていたわけではないが、来客が来ても通常の会話をするのができず、内にこもっていた。宗教的な詩や支離滅裂な詩を作ったが、発表できる作品を作ることはなかった。

ヘルダリンの文学的影響

ヘルダリンは、生前は文学の名声は得られなかったが、死後に、ニーチェやハイデッガーなどの実存主義の哲学者から高く評価された。

小説『ヒュペーリオン』は、後の文学に大きな影響を与えた。ニーチェは青年時代にこの作品を愛読し、その影響は『ツァラトゥストラかく語りき』にも及んでいるという。

また、日本の三島由紀夫が愛読者だったことも有名で、小説『潮騒』（右下の写真）は、『ヒュペーリオン』を下敷きにして書かれた。

この作品は、岩波文庫では『ヒュペーリオン ^{ギリシャ}—希臘の世捨人』というタイトルで出版され（右上の写真）、ちくま文庫では『ヒュペーリオン ^{ギリシア}—ギリシアの隠者』というタイトルで出版された。副題が違っており、「世捨て人」はネガティブな印象、「隠者」はポジティブである。

シュライアマハーらロマン主義の恋愛観との違い

才能に恵まれながら、人生の後半を無為に過ごさざるを得なかったヘルダリンの人生を、前述のように、フィッシャー（1901）は「最も不幸な星のもとに生まれ合わせた」と表現したのである。

ヘルダリンの悲劇的人生をみると、前述のシュライアマハーとの違いが際立つ。シュライアマハーやシュレーゲルなどロマン主義の文学者たちは、人妻に恋をするのが流行であり、愛のない夫から妻を奪ってしまうことは当然と考えていた。シュライアマハーも人妻との間に多くの失恋を体験したが、しかし、それによって精神病になることはなかった。一方のヘルダリンは、同じように人妻と恋をしたのだが、彼は夫から追い出され、精神病を発症してしまった。

ヘルダリンへのヘーゲルの対応

1797～98年のヘルダリンの悲恋の時期にそばにいたヘーゲルは、唯一の友人としてヘルダリンとともに体験し、ともに悩んだ。

1798年に、ヘルダリンはフランクフルトを追い出され、ヘルダリンはズゼッテと文通を続けたが、ヘーゲルがその仲介をしたこともあるという。しかし、ヘルダリンは、その後ドイツ、スイス、フランスを転々とし、1807年にはヘルダリン塔にこもってしまった。

ヘルダリンがフランクフルトを去った後は、ヘーゲルにはフランクフルトに友がいなくなってしまった。フランクフルトはヘーゲルにとって忌まわしい場所が変わってしまった。そして彼はイェナへと移ることになる。

実は、ヘーゲルがイェナに移った1803年に、シェリングはヘーゲルに手紙を書いて、気の毒なヘルダリンを預かってくれないかと頼んだ。しかし、ヘーゲルはそれを断り、その後二度とヘルダリンのことを話題にしなかったという。一見すると、あれだけ仲が良かったヘルダリンに冷たい仕打ちである。スペンサー（1996）によると、これは彼がヘルダリンの事件に傷つき、彼自身が統合失調症の（発狂）を恐れていたためではないかという。ヘーゲルの妹も後に統合失調症を発症した。また、ヘーゲルの哲学の中に自己否定や自己矛盾といった統合失調症の原理が織り込まれていることを自覚していた。

また、もうひとつは、ヘルダリンの人妻への不倫によって身を滅ぼしたことに對する倫理的な非難も含まれていたのかもしれない。シュライアマハーなどロマン主義の文学者たちは、不倫は当然とすら考えていたが、これはベルリンという爛熟した大都会でのことであった。フランクフルトという当時の地方都市において、まして神学校を出て牧師補の資格をとったばかりの神学研究者ヘーゲルにとって、このような事は許せることではなかったのかもしれない。フィッシャー（1901）は、ヘルダリンの苦悩はゲーテの『ウェルテルの悩み』と類似していると述べているが、しかし、ヘルダリンの事件がウェルテルと最も大きく違う点は、不倫でありそれによって傷つく家族がいる点である。（この部分を書いた後に、ヘーゲル自身の不倫問題のことを知った。つまりヘーゲルはこんな倫理的にまじめな人間ではないことが明らかになる。この部分は削除すべきだが、あえて残しておくことにしたい）

とはいえ、ヘルダリンの事件はヘーゲルの思想にも影響を与えている。後述のように、この時期のヘーゲルの宗教論には、唐突に「愛」とか「運命」といった用語が出てきて、「愛による運命の和解」といったことを主張しだして驚く。ここには、ヘルダリンの悲劇を通して彼が得た実存的な思索体験が反映しているのだという。

フランクフルト時代の思想的変化

フランクフルトでヘーゲルは、再び大学時代の研究意欲が戻ってきた。ヘーゲルは独自の思想を確立した。フランクフルト時代のヘーゲルの思想は、ヘーゲル『キリスト教の精神とその運命』にまとめられている。

◆フランクフルト時代のヘーゲルの思想

	「いいね」○  善玉	「だめだね」×  悪玉
テュービンゲン時代	ギリシャ宗教 民族宗教 (国民全部が共通して持つ生活に密着した宗教) ↑ 矛盾 ↓	キリスト教 (専制政治によって上から押しつけられた宗教)
ベルン時代	カントの理性宗教 (非合理的なものを否定した理性的な宗教) 啓蒙主義 イエスは理性宗教 ← ソクラテスの弟子たち	キリスト教 非合理性 (奇蹟・予言) 実定宗教 (内心の自由にもとづく信仰ではなく、外的な権威にもとづく信仰) ユダヤ教 律法宗教 → イエスの弟子のイエスへの愛 教団が実定宗教化

フランクフルト時代①	民族宗教 自由な政治 そのため「 国家 」の成立が必要	ドイツの小国分立と不統一
フランクフルト時代②	キリスト教 イエス=愛による運命の融和	ユダヤ教の律法 カントの理性宗教 の法則性
フランクフルト時代③	歴史の法則性 (歴史には人間の力でどうすることもできない法則があるので、理想の実現に走ってもムダ) 歴史の目的論的解釈 (歴史とは神という絶対者がその本質をしだいに実現する過程である) キリスト教 君主制	啓蒙主義 (歴史を無視して、理性で考えた理想を実現していくべきだ) フィヒテの絶対自我説 シュリングの同一哲学 ギリシャ宗教 共和制

岩崎 (1967) にもとづく

テュービンゲン時代とベルン時代の矛盾

前述のように、以上のように、ベルン時代までのヘーゲルにとって、悪玉はキリスト教である。善玉は、テュービンゲン時代は「ギリシャ宗教・民族宗教」であり、ベルン時代は「理性宗教」であり、時代によって異なる。ところが、フランクフルト時代になると、こうした図式に驚くべき大逆転がおこる。

そのきっかけは矛盾である。ここで同じ善玉である「ギリシャ宗教・民族宗教」と「理性宗教」を較べてみると、これらは決して同じものではない。よく考えれば両者には違いがある。つまり、ギリシャ宗教は、国民の感情によって生まれたものであり、決して国民の理性から生まれたものではない。

ここに「矛盾」が生じた。どちらが正しいのだろうか。この矛盾にヘーゲルは悩んだ。この矛盾を弁証法的に「止揚」したのがフランクフルト時代である。

国家が善玉に (フランクフルト時代①)

ヘーゲルは民族宗教にこだわり、ギリシャ時代やフランス革命のような自由な政治が理想だと考えた。そのためには「国家」の成立こそ必要だと考えるようになる。これはヘーゲルが単純な国家主義者になったということではない。当時のドイツは小国に別れて対立しており、こうした「国家」としてまとまっていない分裂状況では「自由」は実現できない。ドイツが統一されて「国家」という形ができてはじめて「自由」が実現されるだろう。ヘーゲルはフランス革命のような自由な政治を理想としたが、ドイツはフランスのような統一国家をなしておらず、自由な政治をめざすためには、まず「国家」を設立させることが必要だとした。国家を離れて自由は存在しない。

愛が復活してキリスト教が善玉に (フランクフルト時代②)

キリスト教の歴史を見ても、イエスの宗教は国家によって潰された。キリスト教が生き延びたのは、これが国家に認められて、教会と国家が統一されたからである。こうしてヘーゲルはキリスト教を肯定するようになる。

ヘーゲルは、イエスの宗教を「愛による運命との融和」と考えるようになった。つまり、イエスの宗教は「愛」の宗教である。これが民族宗教の特徴であり、ユダヤ教の律法の世界と対立するものである。

ここで「愛」という感情を重視するようになったヘーゲルは、カントの理性宗教をかなぐり捨ててしまう。むしろカントの理性宗教は、「道德律」とか「法則性」とか、人間の自由な信仰を奪うものである。ちょうどユダヤ教の律法がイエスと対立し、自由を奪ったように。いつのまにか、カントの理性宗教が悪玉となっているのである。このことをして「ヘーゲルはカントを乗り越えた」という。

ベルン時代はカントの「理性宗教」の立場から、「愛」は悪玉だった。ソクラテスの弟子は、まずソクラテスの説いた真理を愛し、そこからソクラテスを尊敬したので理性的である。これに対し、イエスの弟子たちは、まずイエスその人を愛し、そこから不合理な要素が入ってくる。これは理性的なものではなく、ここからキリスト教の実定宗教への堕落が始まったと言っていた。この意味では「愛」は悪玉だった。ところが、いつのまにか、宗教は「愛が基本」となり、「愛」はいつのまにか善玉となり、カントの理性宗教が悪玉になっていた。

大逆転というべきだろう。それまでのヘーゲルの理性重視の立場から、この逆転はいかにも唐突で不自然である。こうした変化は、ヘルダリンの悲劇がヘーゲルに与えたショックによるとする人もいる。

弁証法による止揚か、単なる保守化か

チュービンゲン時代とベルン時代には悪玉であったキリスト教が、フランクフルト時代には、いつのまにか善玉に変わってしまっている。思想的な大逆転がおこった。ここにはヘーゲルの「弁証法」の過程が見られるという人もいる。

◆若きヘーゲルの弁証法



つまり、チュービンゲン時代の善玉である「ギリシャ宗教・民族宗教」と、ベルン時代の善玉である「理性宗教」は、矛盾するものであった。この矛盾を「止揚」しようとして、ヘーゲルはドイツ的な新しい民族宗教が大切だと考え、そのために「国家」の重要性を説くようになった。ここには、矛盾を解決するための「正-反-合」という弁証法が見られるというのである。

といえどこよいが、弁証法などを考えなくても、単に若い理想主義から現実を見つめるようになった（大人になって保守化した）だけかもしれない。ここにはヘルダリンの悲劇によるショックが働いたのかもしれない。あるいは単に「民族宗教」にこだわっただけということかもしれない。

歴史の目的論的解釈（フランクフルト時代③）

ヘーゲルの思想はさらに進んでいく。表に示すように、ヘーゲルは、「啓蒙主義」を捨てて、「歴史の法則性」を明確にするようになる。「啓蒙主義」とは、歴史を無視して、理性で考えた理想を実現していくべきだというカントのような立場である。ヘーゲルはカントを乗り越えて、「歴史の法則性」に行き着く。これは、歴史には人間の力でどうすることもできない法則があるという考え方である。だから、啓蒙主義のように、やみくもに理想の実現に走ってもムダである。歴史の法則にのっとった動きでないと実現しない。ドイツの場合、国家が安定しないと、自由は実現しない。

現代からみると、歴史の法則とは、都合のよすぎる奇妙な考えであり、単なる思い込みであることが多い。そのことが正しいかどうかを確かめるすべがない。自分の考えこそ正しいという我田引水となりやすい。しかし、当時の神学的世界観では当然のことであり、ヘーゲルのこうした考えが後のマルクス主義に影響を与えた（後述）。

歴史というブラックボックスの中に、「神の意図」を想定するのは、「陰謀史観」と同じようなもので、パラノイア性を感じる。それはフロイトの無意識理論も同じである。「無意識」というものは、本来カオスである。ところが、その「無意識」というブラックボックスの中に、何か「人格」というものを感じて、「無意識の意図」を想定するのは、パラノイア的である。ヘーゲルもフロイトも同じような「陰謀論」の思考パターンなのである。

さらに、ヘーゲルは、「歴史の目的論的解釈」へと進んでいく。これは、歴史とは「神」という絶対者がその本質をしだいに実現する過程であるとするものである。こうした考え方こそがヘーゲルの根本思想であり、これがフランクフルト時代に確立されていたのである。

「神は遍在する」という汎神論であるが、歴史が神に支配されており、人間の力ではどうしようもないというのは、人間は操り人形にすぎないということである。せっかくカントが神学（形而上学）を哲学から排除したのに、ヘーゲルはまた神学（形而上学）に逆戻りしてしまった。現代からみると、とうていついていけない。

すべてが覆ったフランクフルト時代

さらに、思想は変化する。振り返ってみると、テュービンゲン時代にはギリシャ宗教こそが理想であり、キリスト教は悪玉であった。しかし、歴史が神によって支配されていると考えれば、ギリシャ宗教がキリスト教に変わったのも歴史の法則である。とすれば、キリスト教がギリシャ宗教に勝った以上、キリスト教にはギリシャ宗教以上の良いところがあるに違いない。キリスト教こそ正しい考えで、ギリシャ宗教は何らかの欠陥があったことになる。こうしてヘーゲルは、キリスト教を再評価する。こうした論理は、現代からみると本末転倒の論理にしか見えない。とはいえ、ここにきてベルン時代の善玉と悪玉は完全に入れかわってしまったことに気がつくのである。こんなに入れ替わってよいものなのだろうか。驚くべき大ドンデン返しである。

また、ヘーゲルはフランス革命にあこがれ「共和制」を支持していた。しかし、前述のように国家の役割が強調されると、上と同じ理屈で、共和制よりも「君主制」を優れたものとするようになったという。これも驚くべき大ドンデン返しである。

カント・フィヒテ・シェリングとの格闘

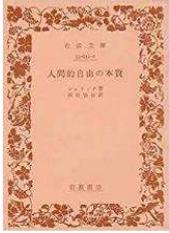



カント



フィヒテ






シェリング



ヘーゲル



出典：Wikipedia

ヘーゲルが、こうした目的論的解釈に行き着いたのは、フィヒテの絶対自我説と、シェリングの同一哲学と格闘して、それらを批判的に取り入れたからである。

ここでカント・フィヒテ・シェリング・ヘーゲルというドイツ観念論の主張をまとめてみよう。

◆ドイツ観念論 カント・フィヒテ・シェリング・ヘーゲルの主張

哲学者	主張	共通点
カント	形而上学の否定 （神学は学問ではない。神の存在は理論的に証明できない） 普遍的道德 （理性にもとづいた普遍的な道德があり、この道德を実現することが人間の使命である）	カントとフィヒテの共通点は、人間の理性的な実践を重んじるという啓蒙主義的な立場
フィヒテ	絶対自我説 （人間のうちに存する理性的本質を「絶対自我」とよび、これこそが「神」である。神は自我である。形而上学（神学）への逆戻り。人間は絶対自我に到達するべく行為すべき）	
シェリング	汎神論 （神は「自我」だけにあるものではなく、あらゆるものに遍在する） 同一哲学 （神はあらゆるものの根底に常に変化せずに、同一的に存在する）	フィヒテとシェリングの共通点は、形而上学的な「神」の哲学的考察
ヘーゲル	歴史の目的論的解釈 （歴史とは神という絶対者がその本質をだいに実現する過程である。これは人間の力でどうすることもできない法則である） 神の自己実現 （神は人間という有限者を使って徐々に自己実現をはかる。これによって神の存在は少しずつ変化する）	シェリングとヘーゲルの共通点は、 汎神論 （神は「自我」だけにあるものではなく、あらゆるものに遍在する）

岩崎（1967）にもとづく

カント哲学が出発点

カントは、前述のように、1781年に『純粋理性批判』を発表して、形而上学を批判した。つまり「神は存在するか」といった形而上学（神学）の問いは、答えの出ない問題であり、学問としては成立しないことを明らかにした。また、1788年の『実践理性批判』において、理性にもとづいた普遍的な道德があり、この道德を実現することが人間の義務であるとした。1793年には、『単なる理性の限界内における宗教』を発表し、宗教の理性的な側面に注目した。宗教の諸側面から、非合理的なもの（例えば、奇蹟や予言）を取り除いて、理性的な側面だけを考え、これを「理性宗教」とした。カントによると、宗教から非合理的なものを取り除いて、理性的な側面だけを考えると、「道德」が残る。理性宗教は、単に「道德」から要請される実践的・社会的なものにすぎない。これは「啓蒙主義」と呼ばれる立場である。

カント哲学は哲学に大きな影響を与えた。フィヒテ・シェリング・ヘーゲルは、カント哲学を出発点としているし、それ以外の当時の哲学者・神学者の多くはカントから出発している。

フィヒテの絶対自我

フィヒテは、カント哲学に傾倒し、直接ケーニヒスベルクのカントに会いに行き、論文『あらゆる啓示の批判の試み』をカントに読んでもらった。これはカントの理性宗教に影響を受けたものであり、カントは賞賛し、フィヒテの論文を出版することに力を貸してくれた。出版された本には、著者名が書かれていなかったため、カントの宗教哲学だと誤解された。批評家もだまされて、この本を賛辞した。それだけフィヒテの宗教論はカント的であった。

カントは、人間の認識の限界を述べて、「物自体」は認識できないとしたが、フィヒテはそれを否定する。フィヒテの哲学は、絶対自我説と呼ばれる。人間のうちにある理性的本質を「絶対自我」とよび、人間は絶対自我に到達するべく行為するべきであるとする。こうした理性的な考え方はカントと同じである。つまり、カントとフィヒテの共通点は、人間の理性的な実践を重んじるという啓蒙主義的な立場である。

しかし、フィヒテは、この「絶対自我」こそが「神」であるとする。神は自我である。ここがカントとの違いである。せっかくカントが神学（形而上学）を哲学から排除したのに、フィヒテはまた神学（形而上学）に逆戻りしてしまった。

シェリングとヘーゲルは、はじめフィヒテの影響を受けたが、しだいに違うようになり、イェナでは共同でフィヒテ批判の雑誌を出した（後述）。

シェリングの汎神論

フィヒテとシェリングの共通点は、形而上学的な「神」の哲学的考察である。

フィヒテは、神は自我であるとして、絶対自我の実現をめざして主体的に行うべきだとした。

これに対し、シェリングは、神は「自我」だけにあるものではなく、あらゆるものに遍在すると考える。つまり、汎神論の立場である。神は、フィヒテのように到達すべき目標というわけではない。

シェリングによると、神はあらゆるものの根底に存在する。神は常に変化せず、自己同一的に存在する。このために同一哲学と呼ばれる。

ヘーゲルは、はじめシェリングの影響を受けて、シェリングに同調し、イェナでは共同で雑誌も出した。シェリングとヘーゲルの共通点は、汎神論（神は「自我」だけにあるものではなく、あらゆるものに遍在する）である。

しかし、イェナ時代にヘーゲルはシェリングとの違いに気がつくようになった。前述のように、ヘーゲルの「歴史の目的論的解釈」では、歴史とは「神」がその本質をしだいに実現する過程である。神はしだいに自己を展開していくものである。ヘーゲルの神は、シェリングの神のように常に変化せず自己同一的に存在するのではない。ヘーゲルの神は、歴史を通じて、動的にみずから展開していくものである。

ヘーゲルの最初の主著『精神現象学』では、序文においてシェリングの哲学を罵倒した（後述）。これによって2人の関係は断たれた。

しかし、現代からみると、シェリングのフィヒテ批判や、ヘーゲルのシェリング批判について、あまり大した対立ではないように感じる。「神」とはどういうものかという点にかかわるので、言葉の違いにすぎず、どちらが正しいか決着がつくわけではない。フィヒテは神は自我であるといい、シェリングは神はあらゆるものに存在するといい、ヘーゲルは神は人間を使って自己実現するという。それぞれ言い方が違うだけで、結局は同じく「神」のスペキュレーションをしているにすぎない。ちょうどSFとかファンタジーのようなものである。誰が正しくとも、実生活上では何の違いもない。誰が正しいかは決められないので、何もお互いを批判する必要もない。誰が正しいか決められないので、互いに「自分が正しい、相手が間違い」と罵り合うしかないのかもしれない。互いに傷つけ合うだけの結果となる。

しかし、フィヒテが無神論者としてイェナを追われたように、神のことで大学の職を追われる時代においては、神を「どうでもよいこと」などとは言っていられなかったのだろう。

以上のように、ヘーゲルは、フィヒテの絶対自我説と、シェリングの同一哲学と格闘して、それらを乗り越え、神の自己実現という目的論的解釈に行き着いた。ヘーゲルがドイツ観念論の道筋（ストーリー）を作った。

⑤イェナ大学教員時代

父の死で遺産が手に入り経済的自立

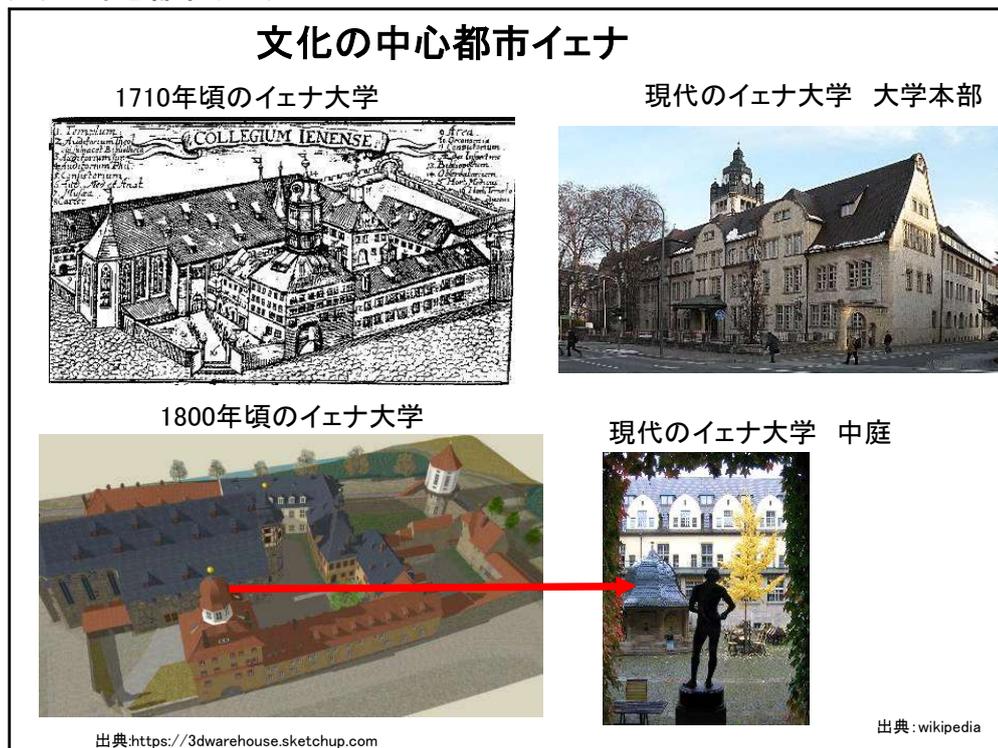
フランクフルトにいた1799年に、ヘーゲルの父が亡くなった。

遺産の分配で、ヘーゲルは3154グルデンを相続した。これはどのくらいの価値だろうか。後に、ヘーゲルはニュルンベルクの校長をつとめるが、その年収は1560グルデンだった、また、ハイデルベルク教授としての年収は1500グルデンだった。つまり、3154グルデンとは、当時の大学教授の年収の2年分くらいの価値であろう。29歳の家庭教師にとっては、かなり経済的に余裕ができたことになる。「これだけあれば、2度と家庭教師をしなくてもよい」。

ヘーゲルは哲学者への道に専念しようと決め、イェナ大学に行くことにした。当時のイェナ大学には、親友のシェリングが助教授をつとめていたし、フィヒテやシュレーゲル兄弟、シラーなどの有名な学者が集まっていたからである。そうした学者をイェナに集めたのは、ワイマールの宰相だったゲーテであった。

ヘーゲルは、イェナにいたシェリングに手紙を書いて、学者として立つ決意を伝えた。シェリングもイェナ行きを勧めてくれた。1801年、31歳のヘーゲルはイェナに引っ越した。それから6年間イェナに住むことになり、ヘーゲルを大きく羽ばたかせていくことになる。哲学者ヘーゲルの誕生である。

文化の中心都市イェナ



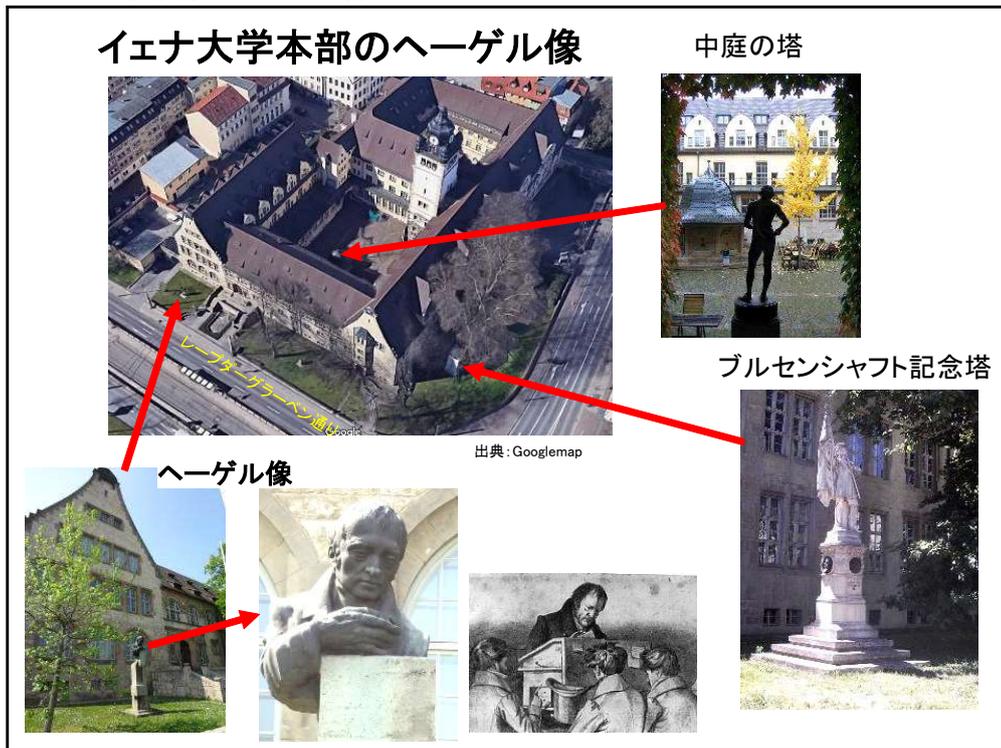
イェナという街は、日本人にはあまりなじみがないが、ドイツでは大学町として有名である。イェナの街には「哲学者の道 Philosophenweg」がある。哲学者の道といえば、ハイデルベルクや京都が有名だが、イェナも有名である。イェナ大学は、ドイツ観念論哲学のビッグスリー（フィヒテ・シェリング・ヘーゲル）をはじめ、シュライアマハー、シュレーゲル兄弟、フリースなど、多くの哲学者を輩出した。当時の文化の中心都市であった。

昔のイェナ大学の様子は、左上の版画と左下の模型に示されている。建物の正面に塔が立っていて、特徴的なトンガリ屋根がついている。

右上は、現代のイェナ大学の本部である。建物の中央に時計台が立っている。

右下は中庭の写真であるが、昔の塔のトンガリ屋根が保存されている。

イエナ大学本部のヘーゲル像



現在のイエナ大学は、正式名にはフリードリッヒ・シラー大学イエナ Friedrich-Schiller-Universität Jena である。この大学で活躍した詩人のシラーの名前をとったものである。現在のイエナは人口10万人の小都市である。

イエナ大学の本部の前には、ヘーゲルの像が建っている。

左上の写真のように、本部の建物は、「日」の字のような形をしている。中庭には、前の写真で示したような昔の塔のトンガリ屋根が保存されている（右上の写真、再掲）。

東側のレープダーグラベン通りの側に、ヘーゲルの上半身の像が立っている（左下の写真）。

この像は31歳でイエナにやってきた若きヘーゲルが大学で講義をする絵（下の真ん中の写真）をもとにしたものであろう。

また、大学本部の北東の角には、ブルセンシャフトの記念碑が建っている（右下の写真）。ブルセンシャフトとは、1815年にイエナ大学ではじめて作られた学生組合のことで、ドイツ統一を訴える政治運動となり、ドイツ中の大学に広がった。この運動に対抗するために、後にヘーゲルはベルリン大学に呼ばれることになる。

シェリングはヘーゲルをイエナに呼んで援護させた

フィヒテとシェリングが対立しはじめた1801年に、ヘーゲルがイエナ大学にやってきた。シェリングが、フィヒテとの対立の応援をさせるために、ヘーゲルを呼んだのである。

ヘーゲルは論文を発表していたわけではないし、大学教員としての経験もなかった。そんな若者がすぐに大学教員になれるわけではない。そこで頼った友人がシェリングであった。当時シェリングは、23歳でイエナ大学の助教授となっていた。そのシェリングのコネを利用して、イエナ大学にもぐりこもうとした。

1801年に、イエナに来たその年に、ヘーゲルは論文を書いて教授資格を取った。ヘーゲルの教授資格論文は『遊星の軌道についての哲学的論文』というものである（邦訳：ヘーゲル『惑星軌道論』村上恭一訳、法政大学出版局 叢書ユニベルシタス、1991）。これは自然科学の論文ではなく、天文学に材料を取った形而上論文だという。ピタゴラスのような数の神秘主義にもとづいて、火星と木星の間には惑星は存在しないと予言したものである。しかし、実際の天文学的観測では、この年に火星と木星の間の小惑星が見つかった。このような間違いは、現代だと科学界のスキャンダルとなりうるが、当時は全く問題にされるどころか、ヘーゲルは教授資格 Habilitation を得て大学講師となった。ちなみにヘーゲルはダーウィンの進化論を認めなかったという。

研究業績のないヘーゲルに教授資格を取ることを勧めたのはシェリングだったであろう。そもそも、ヘーゲルは自然哲学にはあまり興味がない。当時、自然哲学で売り出していたのはシェリングであった。ヘーゲルに「遊星の軌道」についての論文を書かせたのはシェリングかもしれない。ひょっとすると、論文のネタを与えたのはシェリングだったかもしれない。だとすれば、シェリングはよほどヘーゲルを大学のポストにつかせたかったということになる。

実際、1801年の秋に、無名だったヘーゲルは、イエナ大学の私講師となることができた。これは幸運であったが、やはり当時助教授だったシェリングの強い推薦があったことは間違いがないだろう。

ただ、私講師（無俸給教師）とは、大学からの給料が出るのではなく、学生の聴講料だけから収入を得る不安定な身分である。学生からの人気があれば収入はゼロである。当時のイエナ大学には哲学の教員がたくさんおり、教授3名、助教授（員外教授）2名、私講師7名という構成だった。学生は30名ほどであり、私講師は聴講生を奪い合った。ヘーゲルはかなりお金に困ったようだ。

ヘーゲルが担当したのは論理学、形而上学、自然法、数学などであった。1801～1803年の間は、シェリングといっしょに教えていて、はじめは「哲学演習」もシェリングと共同でおこなった。これもシェリングがいかにヘーゲルに思い入れていたかを示すエピソードである。

イエナ時代のヘーゲルは、自分の講義に使うための教科書の準備をはじめた。その一部は『精神現象学』として結実したが、もっと体系的な教科書が完成するのはニュルンベルク時代やハイデルベルク時代になってからであった。

ヘーゲルもシェリングに尽くした

ヘーゲルは、イエナに着くと、さっそく論文『フィヒテとシェリングの哲学大系の相違』（1801年）を書いて、フィヒテを批判し、それによってシェリングに同調した。当時は、シェリングが無名の若者（ヘーゲル）を故郷から連れてきて、シェリングはすでにフィヒテを超えていることを宣伝させたといわれた。

1802年に、シェリングとヘーゲルは「哲学批判雑誌」という雑誌を出す。この雑誌は、シェリングとヘーゲルだけが執筆者であり、同人誌のようなものである。発表された論文には、署名がなかった。ヘーゲルはここに5本の論文を発表し、ここから学問的活動を始めた。この雑誌はフィヒテを批判したもので、フィヒテに送りつけられた。もちろん、シェリングにとっても、自説を肯定してくれるヘーゲルの存在は快かったであろうが、徳したのは、すでに有名だったシェリングよりも、無名だったヘーゲルのほうである。

1805年には、あのゲーテの推薦により、ヘーゲルは助教授（員外教授）となった。ヘーゲルはゲーテに連絡し、それによってゲーテの推薦書を得ることができた。

当時のヘーゲルは、いつもビールやワインを飲み、ロンブル (l'hombre) というトランプゲームを好んだ。

シェリングへの恩

このように、ヘーゲルはシェリングに大きな恩がある。第1に、「哲学批判雑誌」という雑誌してもらって、5本の論文を発表し、業績を作ることができたこと。第2に、イェナ大学でシェリングと共同で演習を出させてもらったこと（無名だったヘーゲルがイェナ大学で教員としてのキャリアをはじめられたのはシェリングのおかげである）。第3に、ヘーゲルをイェナの学芸サークルに紹介したのはシェリングだった。第4に、助教授に推薦してくれたゲーテにヘーゲルを紹介したのもシェリングであった。第5に、イェナに来たばかりの時は、シェリングは家にヘーゲルを同居させた。

ヘーゲルがイェナ大学の教員となれたのはシェリングのコネのおかげであり、シェリングは恩人であったが、その数年後にヘーゲルは一方向的にシェリングを批判した。

無名のヘーゲルがイェナへ行ったときは、哲学教授シェリングのゴマをすり、その力を借りて、イェナ大学にもぐりこもうとした。シェリングを踏み台にして出世しようとする打算的な行為である。とはいえ、ヘーゲルは自分のことを「シェリングの弟子」と呼んでいた時期もあり、当時は本当にシェリングを尊敬していたのかもしれない。

シェリングにとっても、ヘーゲルは、自説を宣伝してくれて、フィヒテを批判してくれる役に立つ存在だった。ここまではふたりとも得をした。

シェリングへの批判

しかし、前述のように、すでにフランクフルト時代には、ヘーゲルの内心ではシェリング哲学を乗り越えていた。したがって、イェナ大学の教員になるという目的を果たした後は、シェリングに媚びる必要もなくなった。何しろヘーゲルはシェリングより5歳年上である。年下のシェリングに弟子扱いされるのはプライドが許さない。

1803年にシェリングがイェナを去った。後述のように、シェリングはシュレーゲル（兄）の妻カロリーネと恋愛し、ふたりを離婚に追い込んだ。このスキャンダルにより、シェリングはヴェルツブルク大学へと去った。ヘーゲルはこのカロリーネをよく思わなかったという。そして、1805年にヘーゲルはイェナ大学の助教授となった。もうシェリングに頼る必要はない。こうして、手のひらを返したように、ヘーゲルはシェリングを批判するようになった。

1807年に発表した『精神現象学』において、ヘーゲルは、カント、フィヒテ、シェリングらを批判したが、最も強い批判を加えて当てこすったのはシェリングに対してであった。ヘーゲルは平然とシェリングにこの本を送った。シェリングはこの本の序文を読んで、目を疑った。飼い犬に手を咬まれるようなショックだったろう。彼は序文だけしか読まなかった（といっても、シェリングだけのことではなく、『精神現象学』は難解すぎて、専門家ですら序文から先に進んだ人はほとんどいないという）。

半年後に、シェリングはヘーゲルに不満の手紙を書き、それによって2人の友情は終わった。一方のヘーゲルは、シェリングを傷つけるなどとは夢にも思わなかったという。

2人はのちに2回出会った。1812年にニュルンベルクで、1829年にカルルスバートで、ヘーゲルはシェリングと偶然に出会ったが、ふたりとも冷たく分かれた。

フィヒテ→シェリング→ヘーゲルの悪の連鎖

フィヒテ→シェリング→ヘーゲルの悪の連鎖



◆イエナ大学 フィヒテ→シェリング→ヘーゲルのバトンタッチ

年	フィヒテ	シェリング	ヘーゲル
1794	イエナ大学助教授		
95			
96			
97			
98	無神論論争	10月イエナ大学助教授	
99	7月ベルリンへ		
1800		(バンベルクで医学研修)	
01			8月イエナ大学私講師
02			シェリングに同調しフィヒテを批判 「哲学批判雑誌」
03		ヴェルツブルク大学へ	
04			
05			イエナ大学助教授
06		ミュンヘンへ	
07			イエナを去り、バンベルクへ 『精神現象学』でシェリング批判

←→ は協調 ← は批判

ドイツ観念論哲学の3巨頭フィヒテ・シェリング・ヘーゲルは、同じイエナ大学の教員をつとめた。しかし、それはイエナ大学にとっては、誇るべきことなのだろうか。というのは、3人の関係には、腹黒い打算がかいま見られるからである。

フィヒテ、シェリング、ヘーゲルのイエナ大学での関係を示したのが下の表である。色を塗ったところがイエナにいた時期である。

◆イエナ大学 フィヒテ→シェリング→ヘーゲルの悪のバトンタッチ

年	フィヒテ	シェリング	ヘーゲル
1794	イエナ大学助教授		
95			
96			
97			
98	無神論論争	10月イエナ大学助教授	
99	7月ベルリンへ		
1800		(バンベルクで医学研修)	
01			8月イエナ大学私講師
02			シェリングに同調しフィヒテを批判 「哲学批判雑誌」
03		ヴェルツブルク大学へ去る	
04			
05			イエナ大学助教授
06		ミュンヘンへ	
07			イエナを去り、バンベルクへ 『精神現象学』でシェリング批判

←→ は協調 ← は批判

打算と裏切りの連鎖

興味深いのは、3人が同じパターンを繰り返していることである。

フィヒテ→シェリング

フィヒテはシェリングを後継者と見込んでイエナに呼んだ。はじめは蜜月状態だった。シェリングはイエナ大学のポストを得るためにフィヒテを踏み台にした。しかし、1799年にフィヒテがイエナを去ると、手のひらを返したように、シェリングはフィヒテを批判するようになる。1801年頃からそれが明らかになり、シェリングはヘーゲルとともにフィヒテを批判した。

シェリング→ヘーゲル

また、シェリングも、はじめはヘーゲルが味方であり、ヘーゲルをイエナ大学に呼んだ。ヘーゲルはイエ

ナ大学のポストを得るためにシェリングを踏み台にした。しかし、1803年にシェリングがイエナを去ると、手のひらを返したように、ヘーゲルはシェリングを批判した。無名の若者が名を売るために、大御所を批判するというのはよくあるが、少し度を超えている。

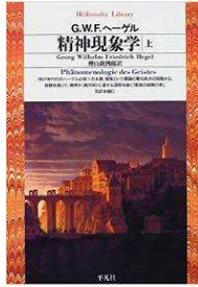
これについては、第5部「大学論としてのドイツ観念論哲学」で詳しく述べることにする。

『精神現象学』ができるまで

『精神現象学』執筆中のヘーゲル



澤田章『ヘーゲル 人と思想』清水書院



ドイツに進軍するナポレオン



ヘーゲルの最初の主著である『精神現象学』を出版するまでのヘーゲルの苦勞は有名である。ヘーゲルは、原稿の半分を渡したら、原稿料の半分を受け取るという契約を出版社と結んだ。しかし、ヘーゲルの筆はなかなか進まず、少しずつ原稿を送って印刷するというスローペースだった。出版社はしびれを切らして、出版をやめようとした。そこに友人のニートハンマーが間に入ってくれた。そして「1806年10月18日までにすべての原稿を入れれば原稿料を払う」という約束をとりつけてくれた。ヘーゲルは急いで原稿を仕上げなければならなくなった。

立ち机で『精神現象学』を書くヘーゲルの有名な肖像画がある（左の絵）。

ところが、ナポレオン軍がドイツを侵略し、1806年10月13日にイエナを占領した。ナポレオン軍は街を略奪し、ヘーゲルの家も被害を受けた。

ヘーゲルは、フランス軍のかがり火が燃えているのを部屋の窓から見下ろしながら、原稿を仕上げていた。この原稿を身につけながら、戦火を逃れて避難していた。そして、やっと1806年10月20日に、最後の原稿を送ることができた。原稿を運ぶ郵便馬車は、馬でフランス軍の前線を突破して、バンベルクの出版社まで届けたという。原稿のコピーもない。もし、捕まっていたら、ヘーゲルの大著は闇の中に消えていただろう。とはいえ、メ切を少し過ぎたものの、原稿は無事に届き、原稿料を手に入れることができた。

ちなみに、この時、ナポレオンその人がイエナに入場した（右下の絵）。彼の姿を見て、ヘーゲルは感動したと書いている。「私は、皇帝、この世界精神が街を通過して馬を進めるのを目撃した。この人を驚歎しないというのは不可能だ」と述べている。これは、ナポレオンがフランス革命のような自由な国家を実現してくれることへの期待であると解釈されている。しかし、これには異論がある（後述）。

哲学旅行ガイドブックとしての『精神現象学』

こうした危険な状況で書かれた原稿のため、『精神現象学』はよく整理された内容ではなく、きわめて読みにくい本となった。

この本の序文において、前述のように、シュリングを痛烈に批判したことは有名である。

本文は、意識・自己意識・理性という3段階の構成をとる。

◆『精神現象学』の構成 14のステップ

意識	感覺的確信		①
	知覚		②
	悟性		③
自己意識	自己確信		④
理性	理性	観察する理性	⑤
		理性的な自己意識	⑥
		自体的かつ対自的に実在する個	⑦
	精神	人倫（真実な精神）	⑧
		教養（疎外された精神）	⑨
		道徳性（自己を確信した精神）	⑩
	宗教	自然的宗教	⑪
		芸術宗教	⑫
		揭示宗教（キリスト教）	⑬
	絶対知		⑭

絶対知への14ステップ

これは、人間が「意識」から始まって、挫折を通して、自己意識、理性という高い段階に進んでいく過程を示している。この間に、主観と客観、個別と普遍、自己と他者といったさまざまな対立を止揚して、統一していく過程を明らかにする。「理性」については「理性」→「精神」→「宗教」をへて、最終段階である「絶対知」へと至る。

「意識」や「自己意識」の内容は心理学でもある。「精神」の部分は倫理学でもあり、最終の「宗教」や「絶対知」は神学・宗教学である。さまざまな学問分野の思索をまとめている。

全体としては14ステップに分かれており、14ステップの学問的遍歴、ないし修行にもたとえられる。また、14段階の「旅」と捉えて、ダンテの『神曲』にたとえる人もいる。

先に、「せつかくカントが神学（形而上学）を哲学から排除したのに、ヘーゲルはまた神学（形而上学）に逆戻りしてしまった」と書いたが、この本のうち、神学・宗教学の部分は、⑪～⑭の部分だけであって、①～⑩は神学ではなく、心理学や倫理学である。その意味では、ヘーゲルは神学に逆戻りしたというのは言いすぎかもしれない。

日本でも、この本の解説書がたくさん出版されている（西、1995；竹田・西、2007、など）。

ヘーゲルはなぜイエナを出たのか

ヘーゲルは1807年3月にイエナを出て、バンベルクへ行った。この理由は、表向きは、ナポレオン軍の侵略によって、イエナ大学が封鎖されたからだとされる。しかし、ヘーゲルがイエナを出たのは別の理由があった。ナポレオン軍による大学封鎖は、その口実にすぎなかった。ヘーゲルはやむをえずイエナを去ったのではなくて、みずから進んでバンベルクへ行ったのである。

このことについて1章をさいて最も詳しく述べているドント（1998）や、中埜（1968）などを参考にすると、以下のような事情が明らかになる。

この話は私も本論を書こうして本を読み今回初めて知った。ヘーゲルの伝記は触れられないことも多く、触れていたとしても、片隅に目立たない形で少しだけ触れてあるだけである。一般にはほとんど知られていない。Wikipediaにも載っていない。

愛人との性的関係、結婚の約束、出産

1801年にイエナに来たヘーゲルは、下宿先のブルクハルト夫人と性的な関係を持った。

彼女の名前はクリスティアーネ・シャルロッテ・ブルクハルトである（1778～1817年）。結婚前の旧姓はフィッシャーである。夫ブルクハルトは伯爵家の執事をしていて、当時、彼女は夫に捨てられていたが、離婚していたわけではないようだ。当時すでに2人の私生児（夫以外の子）を産んでいた。

ヘーゲルは、夫が死んだら正式に結婚しようと約束していた。

1807年に、ブルクハルト夫人はヘーゲルの子を産んだ。ルートヴィヒ（1807～1831年）と名付けられた。ルートヴィヒは、はじめはヘーゲル姓を名乗っていたので、ヘーゲルは自分の子だと認めたようである。はじめはヘーゲルは母子とともに住んでいた。このスキャンダルがイエナで噂になった。

ヘーゲルの逃亡

ヘーゲルは、スキャンダルに困り、イエナを出ようとして、別の大学のポストを探した。しかし、うまくいかなかった。

1806年10月に、ナポレオン軍がイエナを占領し、街はナポレオン軍の略奪を受けた。ヘーゲルは母子をつれてイエナ市内を逃げ回った。イエナ大学は機能低下に陥った。

翌1807年3月に、ヘーゲルは、イエナを出て、バンベルクに新しい職を見つけた。この時に、母子をつれていかなかった。もし母子を養う気があれば、同行したはずである。ヘーゲルは、母子を危険なイエナに置き去りにしたまま、バンベルクに逃げ出した。母子への無視・虐待と言えよう。

ナポレオン軍によりイエナ大学が機能低下に陥ったことは、ヘーゲルが逃亡する良い口実となった。

ふたりを天秤にかけて結婚したヘーゲル

バンベルクに2年ほどいた後、ヘーゲルはニュルンベルクでギムナジウムの校長になる。そこで、ほとぼりが冷めるのを待った。

ほとぼりが冷めたので、1811年に、ニュルンベルクにおいて、名門の出で20歳も年下のメアリーと結婚した。

この結婚のことをブルクハルト夫人に隠そうとして画策した。したがって、ヘーゲルには、婚約したブルクハルト夫人がいながら、これを無視して、別の女性と結婚したことになる。婚約不履行である。

33歳で貧乏なブルクハルト夫人と、名家の娘で20歳の若いメアリーとを天秤にかけて、ヘーゲルは前者を無視して後者を選んだ。

それを知ったブルクハルト夫人はヘーゲルの婚約不履行を責める。ヘーゲルに結婚を迫ったかどうかはわからない。ヘーゲルは何とか乗り切ったようだ。あるいは養育費を払うということで、金で解決したのかもわからない。

まるでベタなテレビドラマのようである。ドラマならここで殺人事件がおこるところ。あるいは『赤と黒』のジュリアン・ソレルのようだといいてもよい。ソレルは後に死刑に処せられたが、ヘーゲルはごまかして生き延びた。

ルートヴィヒの人生

息子ルートヴィヒは、ヘーゲル姓を名乗り、ブルクハルト夫人のもとで育てられた。1811年4歳の時に、ヘーゲルの知人（イエナの書店主F・フロムマン）に里子に出された。

1817年にブルクハルト夫人は亡くなった。39歳での死であるから、若死である。この時、ヘーゲルは友人の手紙に、これで重荷を降ろしたように感じたと言っている（ドント、1968）。

これを機に、1817年、10歳のルートヴィヒはヘーゲルに引き取られた。ヘーゲルがハイデルベルク大学教授となっていた時期である。ヘーゲル夫人にしてみれば、夫の結婚前の不義の子の面倒をみななければならなくなったわけで、青天の霹靂だったろう。

ルートヴィヒは、ヘーゲル家で、嫡子（1813年生まれの長男カールと、1814年生まれの次男イマヌエル）といっしょに5年間育てられた。この間、決して嫡子と平等に育てられたわけではない。ルートヴィヒは、義母からも義理の兄弟たちからもひどい扱いを受けた。嫡子たちにしてみれば、ルートヴィヒはヘーゲル家の財産を相続できる権利を持つ邪魔者であった。

ルートヴィヒは、ヘーゲル家を出て、ギムナジウムに入り、そこを卒業した。ルートヴィヒは、医学の道を進みたかったが、お金がかかるために（加藤、1972）、ヘーゲルに断られた。

ヘーゲルは、ルートヴィヒをシュトゥットガルトの書籍商に奉公に出した。ルートヴィヒはわずかな金額を横領し、書籍商をやめさせられた。ヘーゲルは怒って、ルートヴィヒのヘーゲル姓を取り上げたため、ここからフィッシャー姓となった（フィッシャーとは母親の旧姓である）。ルートヴィヒは父ヘーゲルをずっと恨んでいた。

ヘーゲルは、お金でオランダ植民地軍の将校の地位を買ってやった。ルートヴィヒは、この軍隊に入り、外地へ出征した。そして、1831年、ジョグジャカルタ（インドネシア、当時のバタヴィア）で炎症性熱病のため死亡した。24歳の短い不幸な生涯であった。

その3ヶ月後にヘーゲル自身も亡くなった。しかし、ヘーゲルの生前は、息子の死の報が届くことがなかった。もしヘーゲルが生前に息子の死を知ったならば、ヘーゲルは悲しんだらうか。それとも、ルートヴィヒの母親が亡くなった時のように、悩みの種がなくなって安心したらうか。

以上、少しヘーゲルを悪役に描きすぎたかもしれない。とはいえ、以上のようなことがあったのは事実のようである。マジメ派の代表であるヘーゲルにもこんな面があったかと驚く。ちょっとヘーゲル観が一変するようなエピソードではなからうか。ヘーゲルを悪役に描けるのは、若い頃に似たような体験をしたので、ヘーゲルの気持ちがよくわかるからである。

組織的な隠蔽

ベルリン時代のヘーゲルは、非嫡出子ルートヴィヒのことを隠し続けた。プロイセン公認の哲学者で学生の鑑であるべきヘーゲルに、そんな下半身スキャンダルがあってはまずい。

ヘーゲルの死後も、家族はルートヴィヒの存在を隠し続けた。のちにエアランゲン大学の歴史学の教授となった長男のカールは、ヘーゲルの歴史からルートヴィヒのことを抹消した。1887年に父親の『書簡集』を出版するさいには、カールは、少しでもルートヴィヒが問題となる手紙はすべて削除した。

ヘーゲルの友人たちもこの問題については共同で沈黙した。したがって、ヘーゲルの初期の伝記であるローゼンクランツ（1844）や、フィッシャー（1901）や、ディルタイ（1921）の伝記では、ブルクハルト夫人やルートヴィヒのことは一言も語っていない。本当に知らなかったのか、知っていてもあえて沈黙したのかはよくわからない。ルートヴィヒの存在が周囲の人に簡単に明らかにされたのは、ヘーゲルの死後60年たった1894年のことである。

ただ、あのゲーテは、不憫に思ったのか、ルートヴィヒに関心を持ってくれて、彼を「小ヘーゲル」と呼んだ。彼に詩を送り、慰めたという記録が残っている。

イエナ大学は封鎖されたわけではない

ヘーゲルがイエナを出た理由は、日本で書かれたヘーゲル伝では、「イエナ大学が封鎖」されて、そのため大学で教えられなくなったからとしている。しかし、それは本当だろうか。

ドイツで書かれたヘーゲル伝の多くでは、大学の「機能が低下した」とは書かれているが、「封鎖」されたなどは書かれていない（例えば、ローゼンクランツ、フィッシャー、ビーダーマン、フルダ、ドント、イエシュケなど）。

ナポレオン軍の侵略によって、確かにイエナ大学の機能は低下した。イエナの街は略奪され、大学も略奪を受けて混乱し、学生たちも落ち着いて講義を聴くような状態ではなくなり、故郷に帰った者も多かったらう。しかし、イエナ大学は「封鎖」されたわけではなかった。フィッシャー（1901）は戦争でイエナ大学の学問は衰退したと述べているが、閉鎖されたとは書いていない。

前述のように、「ハレ大学」のはナポレオン軍によって確かに「封鎖」された。ハレ大学では学生たちが反抗したので、ナポレオン軍から大学封鎖を命令された。しかし、前述のように、すぐに大学は再開され、教員は元に戻った。

しかし、イエナ大学は封鎖されたわけではない。ナポレオンが去った後、大学は再開され、教員も大学に戻ったはずである。当時、イエナ大学には多くの教員がいたが、彼らが全員クビになったという話はない。これが原因でイエナを去った教員はごく少数だったのではなからうか。ヘーゲルも、少し待っていればイエナ大学に戻れたであろう。

ヘーゲルと同時代のローゼンクランツ（1844）の伝記では、ヘーゲルがイエナを去った理由はイエナ大学の学問的雰囲気「修道院」のように偏狭だったからとしており、ナポレオン軍の侵入によってイエナ大学の機能が低下したとも書いていないほどである。

もし、ナポレオン軍が侵入しなければ、ヘーゲルはずっとイエナ大学で教えていただらうか？ おそらくそんなことはなかつたらう。遅かれ早かれ、ヘーゲルはイエナを出たいと思っていた。実際、すでにイエナ時代の1802年頃から、ヘーゲルはハイデルベルク大学に移れないかと模索していたという。

このような状況からも、ヘーゲルがイエナを出た直接の理由が大学封鎖によるとは考えにくい。むしろ収入が減ったという経済的な理由のほうが大きいようだ。大学が「機能低下」したことで受講生が減少し、ヘーゲルの収入は断たれてしまった。ヘーゲルは内縁の妻とその子を養うお金を稼がなくてはならなかつたらう。ヘーゲルがイエナを出るきっかけは内縁の妻の存在が大きかった。

日本の伝記が「大学封鎖によりイエナを出た」としているのは、ヘーゲルを「被害者」の位置に置いて、残念ながらイエナ大学を去らざるをえなかつたという「悲劇性」を高めるためであろう。ところがヘーゲルはそんなひ弱なマジメ人間ではなかつた。ヘーゲルはイエナでの追い詰められた生活を何とか変えようと、

あらゆる手段を使った。それによって、イエナを出ることができ、結局は母子を見捨てしまった。ヘーゲルはひ弱な「被害者」どころではなく、残酷な「加害者」であった。

ナポレオン侵入はイエナ逃亡の口実

前述のように、ナポレオンがイエナの街に進軍してきた姿を見て、ヘーゲルは「私は、皇帝、この時代精神が街を通過して馬を進めるのを目撃した」と書いている。これはナポレオンがフランス革命のような自由な国家を実現してくれることへの期待であると解釈されている。しかし、こうした美談は本当だろうか。

ナポレオンの侵略でドイツの大学は衰退に追い込まれたし、ヘーゲルがイエナを離れざるを得なくなったのもそのせいであった。しかも、その後弟のルートヴィヒは、ナポレオンのロシア遠征に従軍し、若くして戦死している。そうした憎い敵であるナポレオンに対して、感動するなどということがあるだろうか。

もしヘーゲルがナポレオンに恩を感じるとしたら、ヘーゲルにとって、イエナ逃亡の良い「口実」を与えてくれたことであろう。伝記では、大学機能低下は、ヘーゲルにとって不運な出来事とされているが、実は幸運な出来事だったのだろう。ヘーゲルはナポレオンを見て、「これでイエナを脱出する口実ができた」と安堵し、それで感動したのではないだろうか。

『精神現象学』の美談はカモフラージュ？

また、ナポレオン侵略の戦火の中、『精神現象学』の原稿を持ち歩いて完成させたということは、伝記では、立派な学者が学問に精進する美談として語られている。しかし、これはヘーゲルの醜い逃亡願望をうまくカモフラージュするためのものではなからうか。学術的な美談にばかり目が行き、その背後にあったヘーゲルの醜い行為を隠してしまっているのではないか。

実際には、『精神現象学』の草稿の大部分は、ナポレオン軍が侵入する数日前に出版社に送っていた。ナポレオン軍が侵入したときに未完成だったのはごく一部の草稿だけだった。

ほとぼりが冷めるのを待つためのイエナ脱出

そもそもヘーゲルがイエナを脱出した経過は唐突すぎる。大学で静かに哲学の研究をしていた助教授が、喧噪な社会の第一線に出て、何の経験もない新聞の仕事をした。こうした転職はふつうのことではない。実際に2年もしないうちにヘーゲルはこの仕事をやめている。イエナ脱出はよほどの事情があったに違いない。しかも、彼は『精神現象学』を完成させて、哲学者として最も脂がのっていた時期である。そうしたキャリアを投げ出してしまうというのは、切羽つまった事情があったと考えるのが自然である。

ヘーゲルはほとぼりが冷めるのを待ったのだろう。バンベルクで、イエナでのスキャンダルの噂が消えるのを待った。

しかし、そんなに容易なことではなかった。前述のように、婚約不履行についてブルクハルト夫人は忘れてはおらず、ヘーゲルが結婚した時に、ブルクハルト夫人はヘーゲルに迫った。

伝記でのスキャンダルの扱い方 ヘーゲル業界のタブー？

このスキャンダルについて、ヘーゲルの伝記ではどのように扱っているかを見てみよう。ヘーゲル業界（ヘーゲルで飯を食っている学者や伝記作者など）において、悪いヘーゲル像を暴露することはタブーである。それを何とかごまかそうといろいろと工夫しているのは面白い。

①●中絶肇『ヘーゲル—理性と現実』中公新書、1968.

中絶はこのスキャンダルについて最も詳しく述べている。その部分を丸ごと引用してみよう。ヘーゲル業界のタブーを犯す後ろめたさが正直に表現されていて面白い。

以下、青字は引用文である。

イエナ大学は閉鎖され、ヘーゲルは職を失ってしまった・・・というのがいわば定説であった。この間の経緯を詳細に研究したバイヤーは、この定説は訂正を要するという。つまり、ヘーゲルはやむを得ずイエナを去ったのではなくて、みずからすすんでバンベルクへ行ったというわけである。

はっきり言えば、この年の二月に、彼に部屋を貸し、彼の家政を見ていたブルクハルト夫人と彼との間に、正式の結婚によらない子が生まれたのである。この子の名はルートヴィヒ、初めはヘーゲル姓を名乗っていたが、後には母の実家の姓フィッシャーを名乗ることになる。ところでこういう、いわば不義の子を持ったということは、小さなイエナの町ではすぐに知れわたることであるし、大学の教授としての人格にもかかわることであった。現にすでにそのことは町の噂にのぼりつつあった。そこでヘーゲルは蒼惶として、むしろ政治的・社会的な理由を絶好の口実として、イエナを去ったというわけである。

なおヘーゲルはこのルートヴィヒという子について長く苦しむことになる。私たちは『ヘーゲル書簡集』のところどころに、そういう人知れぬ苦しみを見てとることができる。ヘーゲルはこの子の母親に、その夫が死んだら正式に結婚しようと約束してあったというので、彼が後にニュルンベルクで名門のマリー・トゥヘルと結婚した時、ルートヴィヒの母親はヘーゲルの口約束をため、何か企んだらしい。またルートヴィヒは四歳以後、ある夫人の養育所で育てられたが、ヘーゲルがハイデルベルクの教授になった後、実母の死を機に、ヘーゲル家に引きとられた。しかしヘーゲル夫人のルートヴィヒに対する態度は温かいものではなかったらしく、彼はやがてヘーゲル家を出る。その後ベルリンでギムナジウムを終え、医学を志望したが、

父に許されず、シュトゥットガルトで書籍商になる修業をしたが、やめてしまう。結局彼はオランダの植民地軍に入った。そしてバタヴィアに渡ったが、その地で父の亡くなるのと同じ年に熱病で死んだ。ルートヴィヒがバタヴィアに発つ前にアムステルダムからある人に宛てた手紙の中には、彼の庶子としての不幸な生涯が綿々と綴られている。またヘーゲルのことをもう今では父と呼びたくないと言い、「ヘーゲル氏は私の主人（書店主）を通して正式に私と手を切り、直接に手紙をくれたことは一度もありません。」と訴えている。いずれにせよルートヴィヒは不幸な星の下に生まれた人間であった。

このルートヴィヒのことは、隆々たる上昇の気運に向かいつつあった哲学者ヘーゲルの日の当らない裏側にある人間ヘーゲルの、あまりにも人間的な一面である。多くのヘーゲル伝が触れようとしないこのことをあえて記した私の眼が、英雄を見る下僕のそれになっていないことを私は切に願うものである。

(81～83ページ)

下線部にヘーゲル業界のタブーを犯す後ろめたさが表現されている。下線部は明らかに同業のヘーゲル研究者に向かって言い分けしている文章であり、一般読者に向けて書かれたものではない。ヘーゲルの偶像を壊すと、ヘーゲル業界では食っていけないという恐怖があるのだろう。「私は英雄ヘーゲルを仰ぎ見る下僕だ」とへりくだって、ごまかしているのは興味深い。

②●澤田章『ヘーゲル 人と思想』清水書院CenturyBooks、2015.

この本では、短く目立たないように触れている。

ヘーゲルが寄宿していたブルクハルト家の夫人（夫に去られて一女を抱えていた）との間に男子が出生する（一八〇七年二月五日）というできごとがあった・・・。

この男子はルートヴィヒ・ヘーゲル（一八〇七～一八三一）と名づけられ、長くヘーゲルにとっては心の痛む存在となったようである。しかも、この夫人とは、その夫の死後、ヘーゲルと結婚するという最初の話とは食い違っていて、正式な結婚に至らなかったのである。（197ページ）

ルートヴィヒ 不幸な親子

ところで、ヘーゲルは、ブルクハルト夫人との間に一子ルートヴィヒをもうけていた（一八〇七年）が、この男子は四歳まで実母のもとで過ごし、その後、養育所に移され、一八一七年実母の死を機に、ヘーゲル家に引き取られた。

マリー夫人の手紙から、かの女は扱いにくい子供のために骨を折り、かれと嫡出の異母兄弟とのあいだの争いの調停をすることに努めたことが知られる。しかし、ヘーゲル家の家計簿から、ルートヴィヒの一二歳の誕生日には、わずか二～三グルデンしか支出しなかったのに、末息子のイマヌエルの五歳の誕生日には、かなり大きな支出がされていることも知る事ができる。

ルートヴィヒは、かなり大きくなったときに、ヘーゲル家に自分のいることの不都合に悩み、口数少なく、内気で、ずるくなった。ルートヴィヒの手紙を読むと、かれは義母に冷遇されていると感じ、つねに両親にたいして、決して愛情ではなく、恐怖の気持ちをもって生活していたようである。かれはやがてヘーゲル家を出、ベルリンでギムナジウムを終えたが、学校では、言語にたいする才能を伸ばし、ラテン語やギリシア語では、時にクラスの首席となることもあった。できたら医学の道に進みたかったが、父に容れられず、シュトゥットガルトの書籍商に奉公に出された。しかし、金銭のことで気まずいことがあり、（八グルデンの金額を横領したことが原因で、「破廉恥」と宣告された）やめることになった。しかも、このあと、ヘーゲル姓ではなく、母の実家のフィッシャー姓を名乗らなければならなかった。ヘーゲルはかれのために、オランダの植民事業の士官の辞令を買ってやった。オランダ東印度の陸軍に登録されたルートヴィヒは、一九三一年八月二八日「炎症熱」のため二四歳でジャカルタで亡くなった。同じ年の一月一四日、父ヘーゲルもこの世を去ったのだった。（ホフマイスター編『ヘーゲル書簡集第三巻および第四巻』所収）

ヘーゲルは父として、どんなにかルートヴィヒを不憫に思い、かれとしてはなすべきことはなしたのであるが、書籍商をやめたころ、ルートヴィヒは、ヘーゲルをもう父とは呼びたくないともらすほど、この親子は不幸な肉親であった。

ゲーテはイェナで、この「小ヘーゲル」にたいして関心をもち、一〇歳の子の記念帳につぎのように書いている。

小さな子供としてお前が最高の自信をもって

世間に立ちむかってゆくのを私は見た

そしてお前が将来世間に接するとき

友のまなざしに祝福されて 元気を出せ

(209～210ページ)

ここでは、父ヘーゲルが息子のために「オランダの植民事業の士官の辞令を買ってやった」りした善行を強調している。しかし、そうすると、ベルン時代に市の貴族たちが官職を独占していたことを批判した正義の士ヘーゲル像を否定することになってしまう。そうした矛盾を犯しても、ヘーゲルの父親としての優しさを示したかったのだろう。

③●フィッシャー（玉井茂・磯江景孜訳）『ヘーゲルの生涯：著作と学説第1巻 ヘーゲルの生涯』勁草書房、1971。（原書は1901年刊）

フィッシャーはハイデルベルク大学の有名な哲学者であるが、やはり同じ大学の先輩でもあった大哲学者ヘーゲルの下半身スキャンダルについて、正面から暴露するのははばかられたのだろう。

フィッシャーのヘーゲル伝では、本文においては、ヘーゲルの婚約不履行と婚外子のことを一切触れていない。ただし、巻末にある注釈において、少しだけ触れているにすぎない。しかも、イエナ時代の章ではなく、ゲーテのことを扱った章の注釈に紛れ込ませているので、わざと目立たないようにしている。こんな形でも、このことに触れないのはフェアではないかと思っていたのだろう。

ハイデルベルク時代におけるゲーテとの交友

『ゲーテアルヒーフ』中に保存されているゲーテ自筆の原稿には「ヘーゲルの庶子に」とあて名されている。
*シュロッサーの招待した「小ヘーゲル」とは、イエナでわが哲学者のもうけた庶子ルートヴィヒのことである。ヘーゲルはこの婚外の子を一八一七年夏以来自分の家庭に引き取り、五年間他の嫡子たちといっしょに育てた。ルートヴィヒはイエナで幼少時代を送ったが、ゲーテはイエナでこの子に関心を示し、別離のとき記念帳の詩を贈ったのである。このヘーゲルの長子は、のちに母方の姓フィッシャーを名のり、一八歳でオランダの軍務につきバタヴィアに赴いた。これらの材料はゲオルク・ラッソンによってほとんど完全に蒐集されたが、かれはそれらの公表を時宜をえぬこととして留保した。ただ指摘しておきたい点は、ヘーゲルがこの息子にたいして常に配慮の十分な義務に忠実な父親であったということ、かれの妻もこの子を進んで自分の家庭に迎え入れて愛情深くその世話をしたということである。（318～319ページ）

ここでは、ヘーゲルの婚約不履行については触れず、庶子ルートヴィヒについて事実だけを触れるにとどまっている。「ついでにいえば、こんなこともあった」といったふうな姑息な書き方をしている。また、この記述では、「ヘーゲル夫妻は庶子ルートヴィヒを引き取り、実子と同じようにやさしく扱った」という美談仕立てになっているのも興味深い。しかし、他の伝記では、ヘーゲルやヘーゲル夫人は、ルートヴィヒに対しては決してやさしいわけではなく、むしろ実子との間に差をつけて育てたことが明らかにされている。以上のようにきわめて不自然に慎重な扱いをしているので、逆にヘーゲル業界のタブーを浮き彫りにしてしまっている。

さすがに、この本の訳者（玉井茂氏と磯江景孜氏）は、以下のような婚約不履行についての注釈を載せている。

訳者注） この子の母はクリスティアーナ・シャルロッテ・ブルックハルトといい、旧姓がフィッシャーである。この女性はイエナでのヘーゲルの下宿の主婦であり、その主人の死後、一度は結婚の約束をしながらそれを忘れてしまったヘーゲルとの間に、多少のごたごたはあったようである。（ヴィードマン『ヘーゲル』四五ページ）（319ページ）

④●スペンサー（棕田直子訳）『FOR BEGINNERS ヘーゲル』現代書館、1996.

この本では、以下の2カ所で触れている。

ヘーゲルにはナポレオンの進撃や出版社とのごたごた以外にも、切迫した事情があった。ヘーゲルに部屋を貸していた人物の妻を妊娠させてしまったのだ。不義の息子ルートヴィヒは1807年2月5日に誕生する。ヘーゲルはイエナが陥落する以前から、別のアカデミックな職を探していた。（55ページ）

結婚と婚外の息子

1811年、41歳にしてヘーゲルは結婚した。花嫁のマリー・フォン・トゥヘルはニュルベルクの名家の娘である。マリーの年齢はヘーゲルの半分をкаろうじて上回っていた。

ヘーゲルの婚外子ルートヴィヒ（1807年生）の母、クリスチアナ・ブルックハルト（旧姓フィッシャー）は、ヘーゲルが結婚すると聞いて騒ぎを起こそうとした。ヘーゲルが以前から養育費を送っていたためもあってか、この件は落ち着いたようである。

ヘーゲルは、1816年について哲学教授の地位を得たのを機会に、ルートヴィヒを引き取ることにした。ヘーゲル夫妻は息子2人に恵まれ、2人はすでに3歳と4歳になっていた。ルートヴィヒは引き取られたおかげで高等教育を受けることができたが、医学志望をかなえられなかったために父を恨むようになった。一時は急進的な学生の活動家グループに近づいていたが、結局、父が探してくれた職を捨てて軍隊に入った。ルートヴィヒはオランダ領東インドに送られるが、熱病にかかって配属先で死ぬことになる。（72～73ページ）

下線部のように、クリスチアナ・ブルックハルトがヘーゲルの婚約不履行を責めたことを、「騒ぎをおこそうとした」と、悪役として表現しているのも面白い。

⑤●城塚登『人類の知的遺産 46 ヘーゲル』講談社、1980.

城塚氏は東京大学教養学部の社会学の教授で、私も学生時代に氏の「社会思想史」の講義を聞き、とても勉強になったものである。城塚氏のヘーゲル論は、とても誠実にヘーゲルの思想を辿った本であり、今回とても役に立った。

その城塚氏は、ヘーゲルの婚約不履行に触れているのは、以下の2行（下線部）だけである。しかも、ヘーゲルの結婚の記述の中に紛れ込ませてしまっている。明らかにヘーゲルの恥部をさらすことに尻込みしている。

一八一一年、四十一歳の誕生日の直前に、ヘーゲルはニュールンベルクの古い都市貴族の家柄であるトゥヒャー家の長女マリーと結婚した。一八〇七年に生れた庶子ゲオルク・ルートヴィヒ・フリードリヒは、イエナの書店主F・フロムマンに預けられていた。ヘーゲルはこの問題に悩まされたと思われるが、新たな結婚によって、誕生後すぐ死んだ一女のほかに、長男カール（一八一三～一九〇一年）、次男イマヌエル（一八一四～一八九一年）をもうけた。（163～164ページ）

この文章には、ヘーゲルの婚約不履行のことは書いておらず、庶子ルートヴィヒの預け先といったどうでもよい情報だけが書かれている。しかも、2つの文章にまたがって、きわめて不自然な文章になっており、まるで暗号のようになっており、日本語として意味が通らない。この箇所の文章を読んで意味がわかる人はいないだろう。ところが、本書の他の部分は理路整然としていて、このような意味不明の文章は他にはないのである。こうした不自然な扱いが、逆にヘーゲル業界のタブーを浮き彫りにしてしまっている。

⑥●岩崎武雄「ヘーゲルの生涯と思想」 『世界の名著 35 ヘーゲル』中央公論社、1967.

岩崎武雄氏の解説は、本論を書くうえで最も参考にした文献である。しかし、この事件について全く触れていない。

次のような幻聴が聞こえてきそう。「ヘーゲルは思想で勝負しているのだから、思想だけを評価すべきだ。私生活のことなどは全く本質的なことではない。大ヘーゲルの私生活のスキャンダルなどは、学問的にはどうでもよいことだ。そうした下世話なことは学者が関心を持つようなことではなく、ジャーナリストに任せてまかせておけばよい」

⑦●増淵幸男『シュライアマッハーの思想と生涯：遠くて近いヘーゲルとの関係』玉川大学出版部、2000.

増淵幸男氏のこの本は、ヘーゲルの事件について全く触れていない。本書の主人公はシュライアマッハーであり、ヘーゲルは脇役だからなのかもしれない。

⑧●権左武志『ヘーゲルとその時代』岩波新書、2013.

この本も、ヘーゲルの事件については触れていない。

⑨●ローゼンクランツ『ヘーゲル伝』

ヘーゲルと同時代人であったローゼンクランツもこの事件については触れていない。

⑩●シンガー（島崎隆訳）『ヘーゲル入門』青木書店、1995.

ヘーゲルだけでなく、マルクスにも隠し子がいたと書いて、ヘーゲルを擁護している。マルクスはエンゲルスに隠し子を引き取らせたと対し、ヘーゲルは隠し子を引き取った。だからヘーゲルの法哲学は一夫一婦制を原則に書かれている気がする、と訳のわからない言い訳を述べている。

⑪●フルダ（海老澤善一訳）『ヘーゲル 生涯と著作』梓出版社、2013.

ナポレオン軍が侵入したとき、ヘーゲルはブルクハルト夫人とその子どもたちを連れて避難していた。ルートヴィヒはまだ母の胎内にいた。「当時の法律によれば、ヘーゲルはこの子を認知と扶養する義務はなかった。しかし、ルソーとは違って、彼は父親であることを認めた」ここでもさりげなくヘーゲルを擁護している。また、ここでもルソーも同じようなことをしたといった弁解がある。ヘーゲルを擁護するあまり、マルクスやルソーのスキャンダルを暴露することは、哲学界全体の評判を落としてしまうことに哲学者は気がつかないのだろうか。

⑫●アルトハウス（山本尤訳）『ヘーゲル伝—哲学の英雄時代』法政大学出版局、1999.

「ヘーゲルはイエーナで仕立屋の家に部屋を借りて住んでいて、その女将と関係をもっていた。彼との間に男の子が生まれた後しばらくして、仕立屋の亭主は死んで、ヘーゲルはその後家に結婚の約束をした…彼はイエーナを去ってからは、このいきさつを思い出さないようにしていたのだが、マリー・フォン・ツューヒャーと結婚するとき、突然、仕立屋の後家が結婚の約束を言い立てて姿を現わした……後家はなだめすかされて結局引き下がることになった。」

ヘーゲル研究者にとっての不都合な真実

ヘーゲル研究者にとって、学者のカガミであるヘーゲルの下半身スキャンダルは、できれば隠しておきたい不都合な真実である。とくに、ヘーゲルの伝記を書くときなどは、ヘーゲルが婚約不履行をしたり、婚外

子がいたことは、隠しておきたい。子どもには絶対に読ませたくない。

伝記作家は、ブラックなヘーゲルを何とか隠そうとして、苦勞した表現をしている。これを表にまとめてみよう。

◆伝記作者の苦肉の表現とブラックな悪いヘーゲルをくらべてみよう

	伝記作者の苦肉の表現	ブラックなヘーゲル
ブルクハルト夫人との関係	③一度は結婚の約束をしたが、ヘーゲルはそれを忘れてしまった。当時の法律では結婚する義務はなかった。夫人は身持ちの固い女性ではなかった	①ヘーゲルは彼女と結婚しようと約束した。
母子への態度	②ヘーゲルはルートヴィヒのことで胸をいため。④養育費を払った。隠し子がいたのはヘーゲルだけではなく、マルクスもルソーもそうだった。ヘーゲルは誠実な対応をした方だ。	④養子に出したり、何とか逃げようとした。
1807年のイエナ脱出	②⑥ナポレオンによりイエナ大学が閉鎖されたので、仕方なくイエナを出た。	①母子のことで噂になったため、母子を置いて、イエナを出て、バンベルクに逃げた。ナポレオンのイエナ侵略は良い口実になった。
ブルクハルト夫人の行動	①④ヘーゲルの結婚を知ったブルクハルト夫人は、ヘーゲルを脅すために、騒ぎをおこした。	①ヘーゲルに捨てられ、良家の娘と結婚したことを知ったブルクハルト夫人は、ヘーゲルの婚約不履行を責めた。
子ルートヴィヒへの態度	②③ヘーゲル夫妻はルートヴィヒにはやさしく接した。	②ルートヴィヒは、ヘーゲル夫妻から冷遇されていると感じ、愛情ではなく、恐怖の気持ちで毎日をすごした。
子ルートヴィヒの人生	②ルートヴィヒは扱いにくい子だった。②ずるい子に育った。②書籍商のもとで横領をした。反抗してグレた。自暴自棄になって軍隊に入り、早死にした。①ルートヴィヒは不幸な星のもとに生まれた子だった。①②同じ年に父ヘーゲルも死んだ。	①②④ルートヴィヒは、医学の道を進みたかったのに、ヘーゲルに断られ、書籍商の奉公に出された。ルートヴィヒはヘーゲルを恨んでいた。
一言で言うと	ヘーゲルは被害者	ヘーゲルは加害者

丸数字は、以下の文献番号を示す。

- ①中埜肇『ヘーゲル—理性と現実』中公新書、1968。
- ②澤田章『ヘーゲル 人と思想』清水書院CenturyBooks、2015。
- ③フィッシャー（玉井茂・磯江景孜訳）『ヘーゲルの生涯：著作と学説第1巻 ヘーゲルの生涯』勁草書房、1971。（原書は1901年刊）
- ④スペンサー（椋田直子訳）『FOR BEGINNERS ヘーゲル』現代書館、1996。
- ⑤城塚登『人類の知的遺産 46 ヘーゲル』講談社、1980。
- ⑥岩崎武雄「ヘーゲルの生涯と思想」『世界の名著 35 ヘーゲル』中央公論社、1967。
- ⑦増渕幸男『シュライアーマッハーの思想と生涯：遠くて近いヘーゲルとの関係』玉川大学出版部、2000。
- ⑧権左武志『ヘーゲルとその時代』岩波新書、2013。

ヘーゲルのスキャンダルは、本当は「加害者」としての悪いことである。しかし、伝記作者の手にかかると、ヘーゲルは「被害者」の立場になり、ヘーゲルの行動は美談のように語られる。ヘーゲルは悪くないのに、ブルクハルト夫人と子のルートヴィヒが悪いために、ヘーゲルは苦勞させられたが、ヘーゲルは誠実に対応した、というストーリーに書き換えられてしまう。

メディアでも、記者が肯定したいものは被害者として語られ、記者が否定したいものは加害者として語られるのは常套手段である。書き方によって、善玉・悪玉どうにでも表現できる。

こういうハラスメントの事例では、たいてい男性側の言い分は無視される。ヘーゲル側から言わせれば、「ブルクハルト夫人から誘われた」とか「ルートヴィヒは本当に自分の子かわからない」といった言い分もあるのかもしれない。例えば、ブルクハルト夫人は「他の愛人たちとの間にすでに2人の私生児を設けていたという記録がある」（シンガー、1983）という。

しかし、そうした男性側の言い分は無視されるのがふつうである。男性は強い立場にあるという理由で。

ヘーゲルのブラック度

ヘーゲルの行為は非倫理的である。本論で登場した哲学者や文学者の不倫についてまとめたのが下の表である。いくつかの判定基準を設けて、非倫理的な行為は「×」と判定した。

「ワル度」というのは、「×」を20点、「△」を10点、「○」を0点として、単純加算した値である。

◆哲学者・文学者のブラック度 ヘーゲルが一番のワル

	本人	相手女性	交際後	婚約	子	子への扱い	ワル度
(判定基準)	○未婚 ×既婚	○未婚者 △未亡人 ×既婚者	○結婚 ×結婚せず	×婚約不履行	○嫡子 ×婚外子 ーなし	○良好 △微妙 ×無視・虐待	×20点
ヘーゲル	○独身	×ブルクハルト夫人(夫が別居)	×婚約したが逃げて不履行	×良家の娘と結婚するため	×ルートヴィヒが生まれた	×母子を置いて別の地に逃げ出す	100点
ヘルダリン	○独身	×ズゼッテ夫人	×夫にバレて出入り禁止	ー	ー	ー	40点
シュライアマハー	○独身	×エレオノーレ・グルノウ	×結婚を望むも諦めた	ー	ー	ー	40点
シュレーゲル	○独身	×ドロテア・ファイト	○前夫と離婚して再婚	ー	ー	ー	20点
シェリング	○独身	×カロリーネ・シュレーゲル	○前夫と離婚して再婚	ー	ー	ー	20点
森鷗外	○独身	○エリーゼ・ヴィーゲルト	×日本に逃げ帰って婚約不履行	×日本で良家の娘と結婚した	ー	ー	40点

この表をみると、ヘルダリンは、前述のように、既婚者のズゼッテ夫人と不倫関係になるが、夫にバレて出入り禁止となる。それで恋愛をあきらめた。ワル度は40点である。失恋によって発狂した繊細なヘルダリンに較べて、鉄面皮なヘーゲルの行動はいかに違うことだろうか。

シュライアマハーは、前述のように、既婚者のエレオノーレ・グルノウと不倫関係になり、夫との離婚を勧め、結婚を望んだが、結局は諦めた。ワル度は40点である。

シュレーゲル(弟)は、前述のように、既婚者のドロテア・ファイトと不倫関係となった。結局、ドロテアは前夫と離婚して、シュレーゲルと再婚した。ワル度は20点である。

シェリングは、前述のように、既婚者のカロリーネ・シュレーゲルと不倫関係となり、カロリーネは前夫と離婚して、シェリングと再婚した。ワル度は20点である。

ちなみに、森鷗外は、ベルリン時代に、結婚をちらつかせてエリーゼ・ヴィーゲルトとつきあい、婚約不履行のまま日本に逃げ帰った。そして日本で良家の娘と結婚した。それでもエリーゼは未婚者なので通常の恋愛と同じことだし(それ自体は非倫理的ではない)、子どもが生まれたわけではない。ワル度は40点である。

シュレーゲルやシュライアマハーなどのロマン主義者は、前述のように、人妻との恋愛を勧めていた。しかし、相手と結婚したいという情熱からこうしたのであり、結局はあきらめるか、前夫と離婚後に責任を取って相手と結婚した。しかも婚外子を作ったわけではない。

本当のワルはヘーゲル

一方、ヘーゲルは、他の人たちとは次元が違う残酷さである。婚約不履行(結婚するといって性的関係を結んだ)、婚外子を出産、婚外子への無視・虐待といったずさである。ヘーゲルのワル度は100点であり、最高得点(最悪得点?)である。結局ヘーゲルが一番悪いことをしている。

さらには、この表には出していないが、内縁の妻と子を危険なイェナに置き去りにして自分だけ逃げたこと、ほとぼりが冷めた頃に若い妻と結婚したこと、そのことを内縁の妻には知らせなかったことなど、多くの非倫理的行為をしている。

さすがのロマン主義ですらしなかった罪をヘーゲルは平気で犯している。ヘーゲルは頭ではロマン主義者を嫌っていたのだが、彼の下半身は、ロマン主義以上のロマン主義者だった。

結局、ヘーゲルこそ本当の「ワル」である。

彼は、ニュルンベルクのギムナジウムで校長となったのだが、よく子どもたちを相手に教えられたものだ。

以上は、現代の倫理観（とくに「週間文春」的スキャンダル倫理）でヘーゲルを切ったものである。当時は、こうしたことはそれほど非難されるような社会ではなかった。

ヘーゲルの伝記作者たちは、こうしたブラック・ヘーゲルを隠蔽してきた。むしろブルクハルト夫人や子のルートヴィヒを悪役に仕立てて、ヘーゲルを守ってきた。むしろ美談に仕立て上げるという欺瞞も辞さなかった。とはいえ、こうしたことは事実であるから、これを隠すことはせずに、少なくとも、ヘーゲルの非倫理的態度はきちんと糾弾すべきだろう。そのうえで、それとは別次元の話として、哲学者としての業績を讃えればよいのである。

私が本論のような大学論・学者論を書く目的は、若い人たちに「学者をめざしたい」と感じてほしいからである。研究とはこんなに面白い、学問はこんなにすばらしいということを伝えたいからだ。その学者がなぜその学問に一生をかけたのかという根源を調べて、若い人に伝えたい。だから、私もヘーゲルの伝記作者のように、ヘーゲルを賛美したいし、美談として伝えたいと思う。ヘーゲルの下半身のスキャンダルばかり強調するのは本末転倒だ。こんな学者になりたいという若者は出てこなくなるかもしれない。学者の人間性を面白がるあまり、スキャンダルばかり狙うゲス・ジャーナリズムに成り下がってしまっているのではないか。ヘーゲル業界を気にするヘーゲル研究者とは違うが、私のめざす大学論・学者論から遠ざかるのではないかと不安になる。

しかし、学者の美談や賛美できる面と同時に、学者の人間的な側面のありのままを伝えることも大切であろう。その方が若い人に訴える力があるではなかろうか。そのように考えて、あえてこのような文章を発表する。

ブラック・ヘーゲル

ヘーゲルと聞くと、カントと並んで、「まじめな堅物で、とても悪いことをするような人ではない」という先入観がある。いわばホワイト・ヘーゲルである。

しかし、一度悪いヘーゲルを知ってしまうと、それまで美談とされてきたことも、全く逆の様相を帯びてくる。それらはむしろ彼のブラックな側面をあらわしているように見えてくる。こちらはいわば「ブラック・ヘーゲル」である。

A) フランクフルト時代：ヘルダリンへの冷たい態度

ヘルダリンとはテュービンゲン時代からの親友で、思想的な影響も受けた。フランクフルトの家庭教師先を斡旋してくれたのもヘルダリンであり、フランクフルトでは仲がよかった。そのヘルダリンが、精神病になると、無視をして面倒をみななかった。シェリングはヘーゲルに手紙を書いて、気の毒なヘルダリンを預かってくれないかと頼んだが、ヘーゲルはそれを断り、その後二度とヘルダリンのことを話題にしなかったという。一見すると、あれだけ仲が良かったヘルダリンに冷たい仕打ちである。前述のように、いろいろな言い訳はあるのかもしれないが、結局は冷たい人だったのではなかろうか。

B) イェナ時代：シェリングとの決別

前述のように、イェナに来た無名のヘーゲルを引き立てて、イェナ大学の教員に引き立ててくれたのはシェリングである。また、思想的にもはじめはヘーゲルはシェリングの弟子と称していた。シェリングには強い恩があるはずである。ところが、シェリングがイェナを去り、自分が助教授になると、恩を忘れて、シェリングを批判し始めた。この行為は、ヘーゲルの学問的な良心として高く評価されることもある。つまり、「学問というものは、自分の感情を切り捨てて、師を乗り越える命がけの真剣勝負なのだ」というように。しかし、ヘーゲルの場合は、手のひらを返したような行動である。シェリングに近づいたのは大学のポストを得るための打算であり、使えなくなったら裏切るというブラック・ヘーゲルのあらわれではなかろうか。とはいえ、シェリングもフィヒテに同じような裏切りをしたのではあるが。

C) イェナ時代：ナポレオンへの賛美

前述のように、イェナに入るナポレオンを見て、ヘーゲルは感動したという。これはヘーゲルがフランス革命の精神を賛美するという政治的な美談として語られている。しかし、考えてみれば、この解釈はありえないのではないか。勤める大学を機能低下に追い込み、ヘーゲルを浪人させることになったナポレオンを賛美するだろうか。しかも、ヘーゲルの弟はナポレオンのロシア遠征で戦死している。ブラック・ヘーゲルという視点から見ると、これはナポレオンの侵入によって、イェナから逃げ出せる良い口実が見つかったという喜びだったかもしれない。これでブルクハルト夫人とのゴタゴタから逃げ出せる良い口実が見つかったという安堵だったかもしれない。

D) ベルリン時代：学生運動の火消し役として

後述のように、ヘーゲルがベルリン大学教授として呼ばれたのは、ブルセンシャフト運動で荒れる学生運動の火消し役として期待されたからという側面がある。これについてのヘーゲルの立場については、賛否両論がある。一方では、ヘーゲルの哲学者としての業績が認められてベルリン大学に呼ばれたのであり、ヘーゲルはフランス革命の自由な政治の実現をプロイセン政府に期待してベルリンに行ったという擁護論がある（ホワイト・ヘーゲル）。その反対に、ヘーゲルは権力に迎合してプロイセン国家の御用学者に成り下がり、学生たちの運動を抑圧した（ブラック・ヘーゲル）と批判する人もいる。

また、ドントの『ベルリンのヘーゲル』（1968）によると、ベルリン時代は影でいろいろと政治的な運動もしていたことが明らかにされている。

ホワイト・ヘーゲルとブラック・ヘーゲルとどちらが正しいヘーゲル像なのかはわからない。ヘーゲルの伝記ではホワイト・ヘーゲルの美談だけが強調される。しかし、ヘーゲルは一筋縄ではいかない人格だったのだらう。

⑥バンベルク新聞編集者時代

1807年に、37歳のヘーゲルは、バンベルクへ行き、日刊「バンベルク新聞 Bamberger Zeit」の編集者となった。この仕事を斡旋してくれたのは、前述の友人ニートハンマーである（彼は当時バンベルクにいた）。ヘーゲルはバンベルクの地に1年半ほどとどまった。形式的には、まだイェナ大学の助教授で休職中という身分だった。

バンベルクのヘーゲル

バンベルクのヘーゲル

バンベルク新聞のあった建物



ヘーゲルのプレート



ガレー船（奴隷船）のような仕事



バンベルク新聞

Bamberger Zeitung.
Mit Sonntags- und Feiertagsbeilagen
Dienstag, No. 194. 22. Juli 1808.

出典: wikipedia

バンベルクは、イェナとニュルンベルクの間にある小さな古い街で（現在の人口は20万人）、「古城街道」の街として知られている。

市の中心部に、バンベルク新聞のあった建物がある（住所はPfahlplätzchen 1）。左上の写真である。建物の壁には、ヘーゲルのプレートが貼ってある。プレートには次のように彫ってある。

IN DIESEM HAUSE WOHNTE 1807-1808 DER PHILOSOPH GEORG FRIEDRICH WILHELM HEGEL ALS REDAKTEUR DER BAMBERGER ZEITUNG UND VOLLENDETE HIER SEIN ERSTES HAUPTWERK DIE PHAENOMENOLOGIE DES GEISTES

機密漏洩の嫌疑 新聞ガレー船

ヘーゲルは政治にも興味があったので、新聞編集の仕事は性に合っていたという。「毎日新聞に目を通すことは、一種の現実的な朝の祈りである」と手紙に書いている。収入もそれなりにあった。

しかし、占領下で、フランス軍による厳しい検閲があり、ヘーゲルが書いた記事が、軍事機密を漏洩したという嫌疑がかけられた。この新聞は当局から目をつけられ、ヘーゲルが去った直後には廃刊させられることになる。

ヘーゲルはこうした仕事がすぐいやになった。まるで「新聞ガレー船」（新聞奴隷船）に乗っているようなものだと、グチをこぼすようになる（右下の写真）。

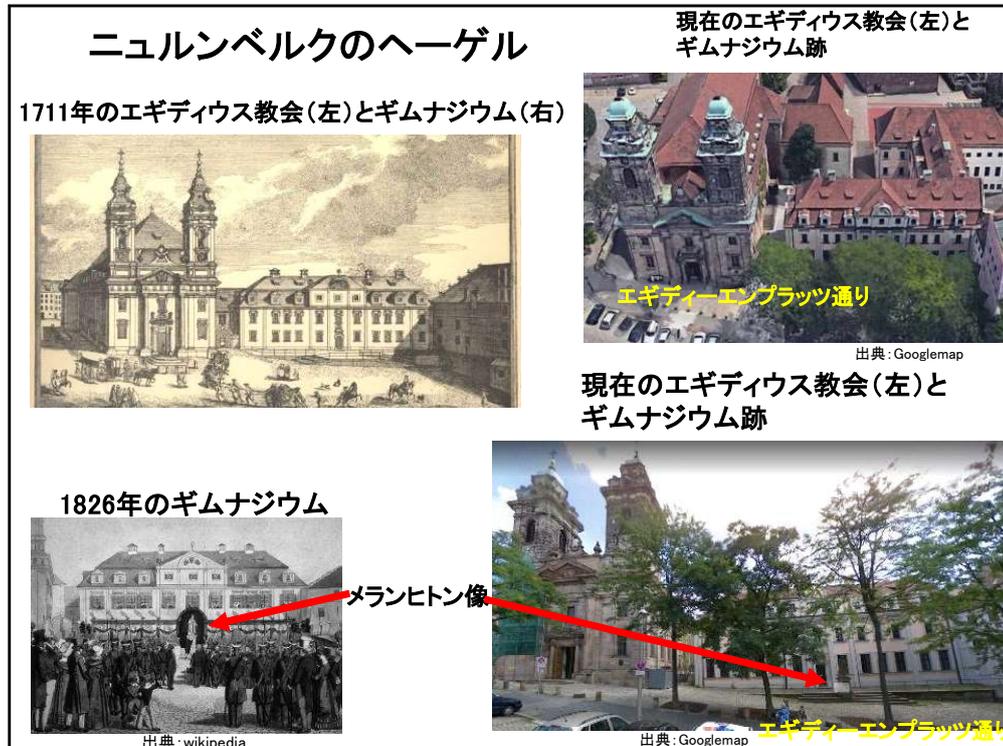
ヘーゲルは再び大学教員のポストを探そうとして、今度はエアランゲン大学を狙っていたという。そこに三たび助け船を出してくれたのがニートハンマーであった。

⑦ニュルンベルクのギムナジウム校長時代

ギムナジウムの校長として

ニートハンマーは、イエナ大学の神学の教授であった人だが、1799年にフィヒテが無神論論争でイエナ大学をやめた時にいっしょに大学をやめた。その後、バイエルン地方の教育顧問になり、教育制度の改革に取り組んでいた。ニートハンマーは、フランスの制度をモデルとして、人文主義的カリキュラムを強化しようとした。このためにギムナジウム（大学進学学校）の強化をはかった。そこで、ギムナジウムの校長としてヘーゲルを呼んだ。ヘーゲルはまたしても飛びついた。

ニュルンベルクのヘーゲル



ニュルンベルクは、ナチスの戦争犯罪を裁いたニュルンベルク裁判の地として知られている。

1808年、38歳のヘーゲルは、ニュルンベルクへ行き、エギディウス・ギムナジウム Egidien-gymnasium の校長兼哲学教授となった。

このギムナジウム（高校）は、1524年に宗教改革者のメランヒトンらによって創設された学校がもとなっている。あちこち移動したあと、1633年にニュルンベルクの地に戻り、エギディウス修道院の建物を利用して、エギディウス・ギムナジウムが創設された。場所はニュルンベルクの中心部にあった（住所はInner Laufer Platz 11）。

左上の写真は、1711年の写真である。エギディウス教会（左）とギムナジウム（右）が並んで建っている。左下の写真は、1826年のギムナジウムである。建物の前に、メランヒトン像が建てられた時の絵である。この絵は、ヘーゲルがニュルンベルクを去った1816年から10年後のものなので、ほぼヘーゲル当時の建物をあらわしていると考えられる。

ヘーゲルがいた時代の建物は今もそのまま残っている。右下の写真は、エギディーエン・プラッツ通りからみた建物であるが、左上の写真と全く変わっていない。左側のエギディウス教会の2本の塔はそのままである。右側のギムナジウムの建物もそのままである。

木が邪魔なので、グーグルストリートで見たのが右下の写真であるが、1826年に建てられたメランヒトン像もそのままであることがわかる。この建物は、現在はヴィルシュテッター・ギムナジウム Willstätter-Gymnasiumsの校舎となっている。

このギムナジウムでは、哲学の教授が校長をつとめる決まりになっていた。校長に赴任した最初の年は苦労の連続だった。文房具のためのお金もなかった。学校の設備が整っておらず、窓には日よけもなく、はじめはトイレもなかった。ヘーゲルは生徒を受け入れるに当たって、生徒の親に次のように尋ねなければならなかった。「あなたのお子さんは、トイレのないところでも自由に大小便ができるだけの器用さを持っていますか」と。

また、ヘーゲルの収入は、バンベルク新聞時代の3分の2ほどに減った。給料の欠配もふつうのことだった。とはいえ状況はしだいに改善された。この仕事をヘーゲルは8年続けることになる。

哲学教授としての仕事

ギムナジウムの生徒は、週4時間の哲学が必修だった。4学年あったので、週16時間をヘーゲルは教えなければならなかった。彼は14～19歳の少年に、ヘーゲル哲学の大系を教えようとした。大学とは違って、哲学などには興味のない少年たちが相手なので、ヘーゲルは厳格で厳しく指導した。

いろいろと工夫もした。学年を初級・中級・上級と分けて、次のように段階的に教えるようになった。

◆ヘーゲルの哲学カリキュラム

上級	哲学のエンチクロペディ
中級	現象学、論理学
初級	法理論、義務論

フィッシャー (1912) 107頁

この区分は当時のギムナジウムでの哲学のカリキュラムに合わせたものである。初級と中級では基礎的な内容を扱い、上級は「哲学のエンチクロペディ」である。エンチクロペディ Enzyklopädieとは、「百科事典」のことであるが、ヘーゲルはこれをヘーゲル哲学体系の簡略版という意味で使った。これが後のハイデルベルク大学時代には、大学での講義題目となり、教科書として出版された。

ギムナジウム時代の講義ノートは、彼の死後に、ローゼンクランツ編『哲学予備学』として出版された。この邦訳は『哲学入門』（岩波文庫）である。

年度末には、校長訓辞もおこなった。その訓示内容が残っている。それをみると、明らかに古代ギリシャ時代の文化がギムナジウムの基礎であることを宣言している。

哲学も神学も

ニートハンマーは、ギムナジウムで「哲学」とともに「神学」も教えるように命じたが、ヘーゲルは次のように言って断った。つまり、神学を教えながら論理学を教えるということは「白い左官であると同時に黒い煙突掃除人であるようなもの」であり、「薬を飲みながらワインを飲むようなもの」であって両立はできない、と。大学でなら私は喜んで神学を教えましょう、と。

とはいえ、実際にヘーゲルは、週4時間の哲学の講義のうち、1時間は宗教学に当てたという。ヘーゲルはそもそも神学者であり、哲学と神学は不可分であった。

20歳年下の娘と結婚

ニュルンベルクに来て3年、校長生活に慣れてきた1811年、41歳のヘーゲルは結婚した。相手はニュルンベルクの市長をつとめたトゥヘルトウヘルの長女マリー・トゥヘルであった。彼女はまだ20歳になったばかりであり、ヘーゲルより20歳も年下であった。婚約した直後に、ヘーゲルは若々しい恋愛の詩を書いてマリーに送っている。これもヘーゲルの意外な側面である。

意外というのは、真面目なヘーゲルにもこんな純情な側面があったのかという意外性ではない。ベルン時代にあれほど市の特権階級を嫌悪したヘーゲルなのに、ニュルンベルク時代になると、特権階級に媚びてそこから嫁をもらおうと必死になる。こうした変節が意外なのである。伝記作者も、このような変節には目をつぶり、41歳にして結婚し、幸せな夫婦生活を送ったとしてヘーゲルをただ祝福するだけである。

とはいえ、一度ブラック・ヘーゲルを見てしまうと、そうした腹黒さや打算は当然という気にもなる。内縁の妻と子がありながら、若い女性を手に入れようとする腹黒さ。若くて金持ちの女性を何とか自分のものにしようとして必死になり、恥ずかしげもなく純情な詩を送る面の皮。

ギムナジウムの校長でも収入が少なかったのか、ヘーゲルは結婚式の費用を作るのに苦労した。このため、マリーの親は、ヘーゲルの収入の少なさを心配し、「ヘーゲルが大学の教授になったら娘をやる」と言われたという。そこで、ヘーゲルは一計を案じ、ニートハンマーに頼んで、「ヘーゲルはエルランゲン大学の教授に任命されるのは確実だ」というウソの手紙をヘーゲル宛に書かせた。その手紙を見せて安心させたという。ブラック・ヘーゲルらしいエピソードである。これで通算4度ニートハンマーに助けられたことになる。

ヘーゲルの家庭

ヘーゲル夫妻の間には3人の子が生まれた。最初の子は生まれてすぐに亡くなったが、長男カールと次男イマヌエルは元気に育った。のちに長男カール (1813～1901年) は、歴史学の学者となり、エルランゲン大学の教授をつとめた。次男イマヌエル (1814～1891年) は神父になった。

また、前述のように、この時代にヘーゲル一家は、私生児のルートヴィヒを引き取って5年間育てたが、ルートヴィヒは外に出て、外国で早死にした。ヘーゲルの死後、一家はルートヴィヒのことを隠し通した。とくに歴史学者となったカールは、父の書簡集からルートヴィヒに関係した書簡を注意深く削除した。これによってルートヴィヒは歴史の闇に葬られてしまった。

第2の名著『大論理学』

高校生に哲学を教えることは、ヘーゲルの哲学にとっても良い影響を与えた。教育のかたわら哲学書を執筆した。『精神現象学』に続く第2の著書として『論理学』を出版した。いわゆる『大論理学』と呼ばれる本で、3冊に分けて出版した (1812, 13, 16年)。

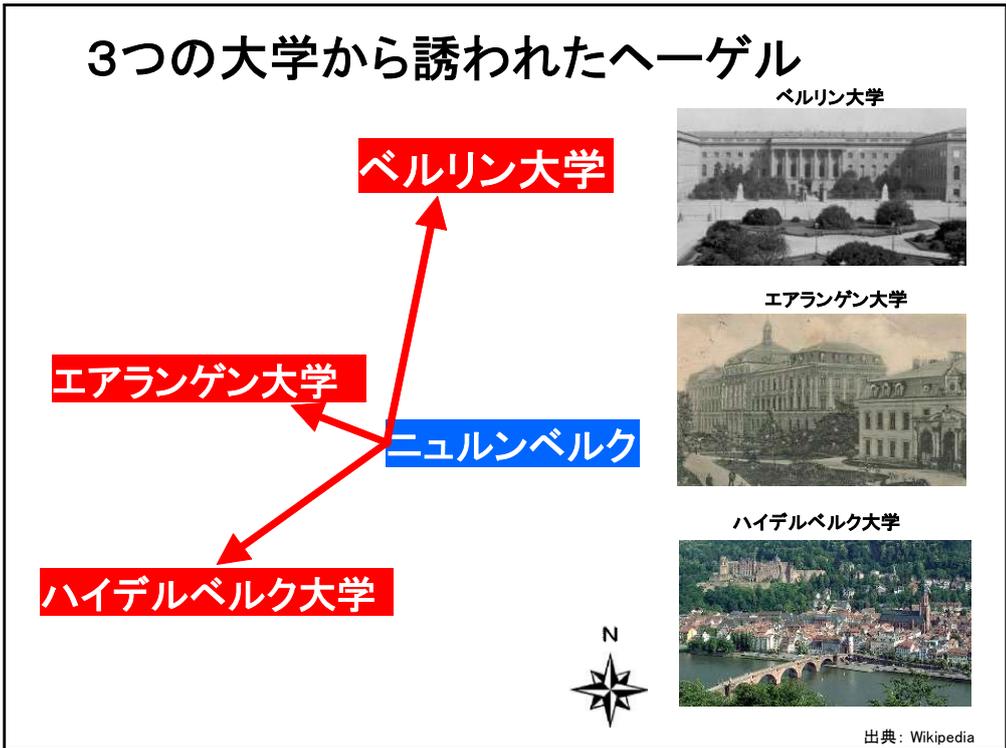
『大論理学』は、ヘーゲル独自の論理学であり、古典的な形式論理学とは異なる。アリストテレス以来の古典的論理学は、もし「AならばB」と「BならばC」が成り立つのであれば、必ず「AならばC」が成り立つ、といった形式を考えるものである。これは「AならばB」といった命題の真偽は問わず、「形式」だけを扱っているので、命題の真偽という「内容」には触れない。ヘーゲルの論理学は、この真偽の「内容」に触れようというのである。

ここでヘーゲルが出してくるのが、正—反—合という3段階の「弁証法」である。あるいは、定立（テーゼ）—反定立（アンチテーゼ）—総合（ジンテーゼ）という弁証法である。テーゼの中の矛盾こそが原動力となる。

ヘーゲルの弁証法といえば、この正—反—合という3段階のことを指すのだと思っていたら、岩崎（1967）によると、こうした理解は皮相だというから、シロウトにはわからないものである。

⑧ハイデルベルク大学教授時代

3つの大学から誘われたヘーゲル

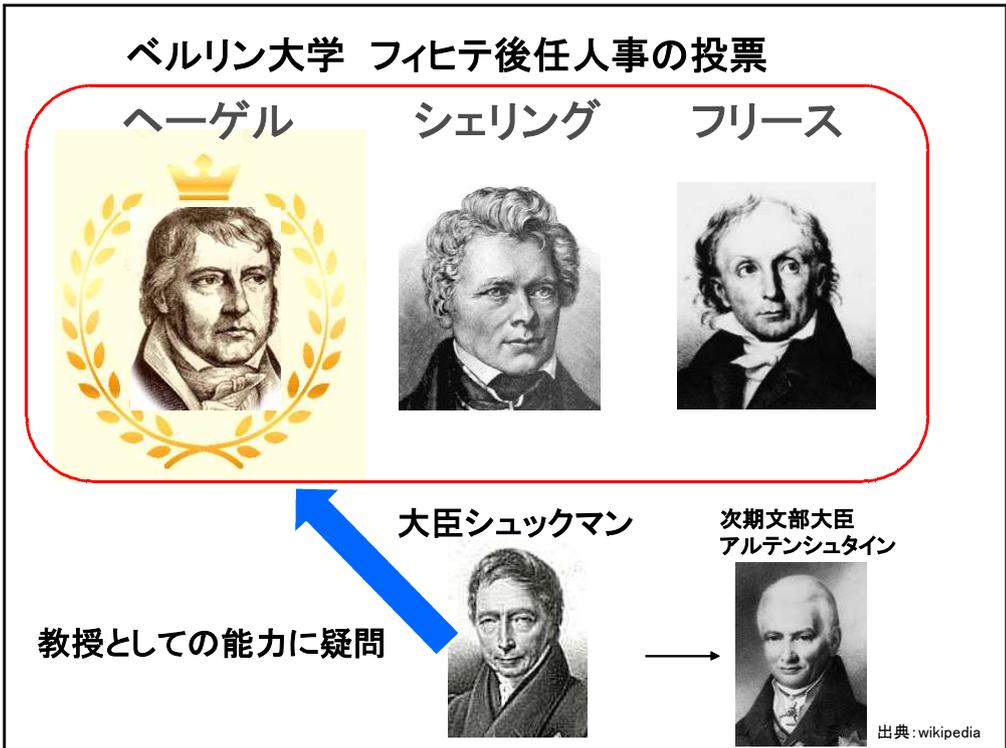


1816年に『大論理学』が完結すると、たちまちヘーゲルの学者としての評価は上がった。そして、エルランゲン大学、ベルリン大学、ハイデルベルク大学の3つからほぼ同時に教授の声がかかった。

エルランゲン大学招聘はヘーゲルのちゃっかり

前述のように、ヘーゲルは、許嫁の家族を安心させて結婚を早めるために、ニートハンマーを利用して、ハッターリをかました。ローゼン克蘭ツ (1844) によると、その後、ニュルンベルクの校長会に、エルランゲン大学の哲学教授を推薦してほしいという連絡があり、その候補は別にいたのだが、ヘーゲルはちゃっかり自分の名前も書き込んで提出した。後にそれが受け入れられたという。

ベルリン大学招聘のゴタゴタ



ベルリン大学からの招聘はゴタゴタした。1810年にベルリン大学が創設され、1814年に哲学部の教授だったフィヒテが病死すると、そのポストは空席のままだった。1816年に後任として、ヘーゲル、シェリング、フリースが候補となり、教授会での投票が

おこなわれ、その結果ヘーゲルが選ばれた。

ところが、大臣のシュックマン（Friedrich von Schuckmann; 1755～1834年）は躊躇した。ヘーゲルは大学の教壇を離れて10年以上たつので、その教授としての能力に確信が持てないからだ。ライマーをはじめ、いろいろな人を介して、ヘーゲルの評判を調べた。あげくの果てに、シュックマンはヘーゲルに手紙を出した。「あなたはベルリン大学教授として名前があがっているが、しかし、大学の教壇を離れて10年以上たっている。そこであなたが大学教授としてふさわしい能力があるか説明してほしい」と。

このようなゴタゴタがあったため、ヘーゲルは、面倒なベルリン大学よりも、ハイデルベルク大学を選んだ。

ハイデルベルク大学からは三顧の礼



ベルリン大学がヘーゲルを上から扱ったのに対し、ハイデルベルク大学は下からヘーゲルを持ち上げた。

学長だった神学教授カール・ダウブは、ヘーゲルに傾倒し、ぜひともハイデルベルクに来てくれとラブコールを送ったのである。ダウブが出した手紙には次のように書かれている。「もしあなたが来てくれれば、ハイデルベルク大学は、創設以来初めて本当の哲学者を迎えることになる。それはスピノザの招待が実現しなかった時以来のことである」。尊敬するスピノザに匹敵する「本当の哲学者」と讃えられれば、ヘーゲルでなくとも心を動かされるだろう。誘いを受けたのはベルリン大学のほうが早かったが、ヘーゲルはハイデルベルク大学を選んだ。

収入は少し下がった。ニュルンベルク校長時代の収入は1560グルデンだったが、ハイデルベルクでは1500グルデンだった。ヘーゲルはお金にうるさい人だが、それでもハイデルベルクに来たということは、それだけダウブの言葉がヘーゲルの心をつかんだからだろう。また、ダウブ以外にも何人も友人がハイデルベルク大学を勧めてくれたのである。

ハイデルベルク大学教授として

1816年に46歳のヘーゲルは、ハイデルベルク大学の教授となった。

彼は、大学近くにあるプレック Plöck という通りの50番地に住んだ。

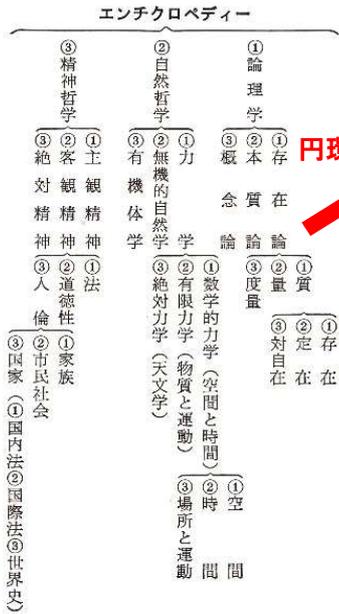
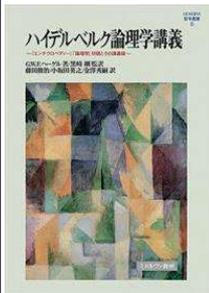
この場所には、今でもプレートが貼ってあり、そこには以下のように書かれている（下の真ん中の写真）。
「ここに1817年から1818年までゲオルグ・ヴィルヘルム・フリードリッヒ・ヘーゲルが住んだ [Hier wohnte von Januar 1817 bis September 1818 Georg Wilhelm Friedrich Hegel](#)」

ヘーゲルはハイデルベルクの自然に魅了されたという（右上の写真）。ハイデルベルクは世界で最も美しい大学町といってよい。彼は2年間この町に住んだ。

ヘーゲルは週に16時間も講義をした。はじめのうち、ある講義では学生が4人しかいなくてがっかりしたが、次第に増えて後には20～30人になった。

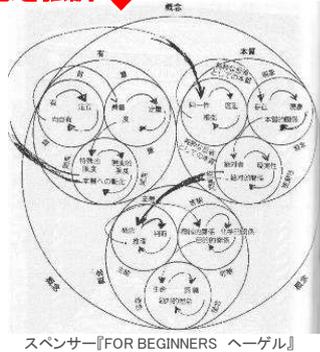
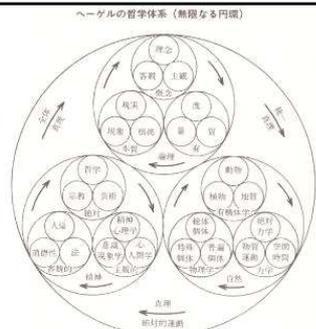
哲学のエンチクロペディ（百科事典）

哲学のエンクロペディ(百科事典)



円環を強調

動態を強調



澤田章『ヘーゲル 人と思想』清水書院

スペンサー『FOR BEGINNERS ヘーゲル』

ハイデルベルク時代の1817年に、ヘーゲルは3冊目の主書の『哲学のエンクロペディ』を出版した。これはニュルンベルクのギムナジウムでの講義を出版したものである。

邦訳は『ハイデルベルク論理学講義：エンクロペディ』(黒崎剛監訳、ミネルヴァ書房、2017年)である(左の写真)。

この本は、ヘーゲルの哲学の全体系を圧縮したものであり、真ん中の図のような3部からなる。これは目次をツリー状にあらわしたものである。

- 第1部 論理学 (前著の『大論理学』を要約したもので、こちらを読む人も多い)
- 第2部 自然哲学
- 第3部 精神哲学

真ん中の図のように、部・章・節に至るまですべて3つからなっている。3へのこだわりはヘーゲルの強迫性を感じさせる。

本の構成としては、真ん中の図のようなツリー状をしているが、これらの3組の要素は単なる羅列なのではなくて、円環をなしている。あらゆる3組は円環をなしているの、右上の図のようにあらわされる。これだと静的で、これで完結して動かないような印象を与える。

しかし、ヘーゲルの意図するところは、これらの要素が互いに関係して動的な関係を持つということである。そこで、右下の図のように、それぞれが動いているというイメージで捉えた方がよい。

⑨ベルリン大学教授時代

ベルリン大学に呼ばれたヘーゲル

1818年に、48歳のヘーゲルは、ベルリン大学の哲学部教授として呼ばれた。

ヘーゲルが呼ばれた理由は、哲学者としての業績が認められたという単純なものではない。その裏には政治的な背景があった。つまり、学生の過激な政治運動をヘーゲルの理性の哲学で鎮めようというコンタンである。

ナポレオンからの祖国解放戦争と大学生



ヘーゲルがベルリン大学に呼ばれた背景を探ることはなかなか面白い。少し長いですが、ドイツの歴史の根本を示すことなので、少し紹介しておきたい。話はナポレオンの侵略にさかのぼる。

1806年のナポレオン軍の侵入により、ドイツのプロイセンでは、国王フリードリヒ・ヴィルヘルム3世のもと、宰相シュタインやハルデンベルクらの官僚によって、国の大改革がおこなわれた（プロイセン改革）。日本でいえば明治維新のような大改革である。上からの改革だけでなく、下からの改革運動もおこった。国民レベルでナポレオン支配からの解放運動がおこり、その代表がフィヒテの1807年の『ドイツ国民に告ぐ』である。こうした改革によって、プロイセンはやっとナポレオン軍を追い出した（1813年の諸国民の戦いすなわちライプチヒの戦い）。

この戦争には学生たちがこぞって参加した。その学生を描いた有名な絵がある。ホドラーの「1813年の解放戦争に出陣するドイツ学生 Auszug deutscher Studenten in den Freiheitskrieg von 1813」である（右下の絵）。これはスイスの画家ホドラー（左下の絵）が、1909年に描いたものである。この絵の下段は、軍服を着て、馬にまたがろうとしている学生である。上の段は、銃をかついで4列横隊で戦場に向かう学生たちが描かれている。つまり、ナポレオンの侵略から祖国を守ろうとして戦場に赴いた愛国的な学生の姿である。

この絵が描かれた1909年は、このシーンから100年たった頃にあたる。そしてこの絵が描かれた5年後の1914年には、第一次大戦がおこり、ドイツの学生は対フランス戦争にかり出されることになる。この絵は第一次大戦の学生の愛国心をかき立てたといわれる（潮木、1992）。

この絵は、現在でもイエナ大学（現シラー大学）の講堂に掛けられている（左上の写真）。

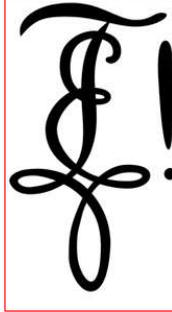
ブルセンシャフト運動

ブルセンシャフト運動

学生組合



ブルセンシャフトのマーク EFVの組み合わせ



イエナ大学
ブルセンシャフト記念碑

ブルセンシャフトの帽子



現代でも



出典: Wikipedia



この対ナポレオン戦争から帰ってきた学生たちは、意気が上がり、ドイツの統一と自由な政治を期待した。自分たちの命をかけて勝ちとった勝利であるから、当然である。

ところが、1814年のウィーン会議が決めたのはドイツの分断であった。「ドイツ連邦」を作って、これをプロイセンとオーストリアが守護するというものである。これを巧みに操ったのがオーストリアの宰相メッテルニヒである。ドイツを統一させない保守的な政治体制であり、学生たちの期待を裏切るものだった。

これに反発した学生たちは「ブルセンシャフト」という学生組合を作り、政治的な運動を始めた（左上の絵）。1815年にイエナ大学ではじめて作られたブルセンシャフトは、すぐにドイツ中の大学に広まった。1818年には、全ドイツブルセンシャフト（全ドイツ学生連盟、略して全学連）が作られた。

ブルセンシャフトに所属した学生は、決まった色の帽子をかぶった（左下の絵）。ブルセンシャフトは今でもノスタルジーとともに語られており、中高年の男たちがこうした帽子をかぶって集会を開いている。日本でいうと、旧制高校へのノスタルジーだろうか。

ブルセンシャフトの紋章（右上の絵）は、アルファベットのEとFとVの字を組み合わせたものである。これらはそれぞれ名誉、自由、祖国とをあらわしている。

この運動が始まったイエナ大学の本部には、ブルセンシャフト記念塔がたっている（右下の写真）。

ヴァルトブルク祭



ブルセンシャフト運動は、1817年10月18日の「ヴァルトブルク祭」で頂点に達した。この祭りは、宗教改革300年と、1813年10月18日のライプチヒの戦いの戦勝から4年目を記念しておこなわれた。

会場となったのは、アイゼナハ近郊にあるヴァルトブルク城である（左上の写真）。この城は、1517年に、宗教改革をおこして法王から破門されて命を狙われたルターが、匿名で逃げ込んだところである。ルターはこの城にこもって聖書を初めてドイツ語訳し、それが宗教改革がドイツに広まるきっかけとなった。ルターが聖書を訳した部屋は、今でも「ルターの部屋」として保存されている（左下の写真）。「ヴァルトブルク祭」は、ルターが宗教改革をおこした1517年からちょうど300年たった記念として開かれた。

こうした名目に隠れていたが、この祭りはブルセンシャフトの政治集会であった。全国から500名の学生が集まった（右上の絵）。500名とは、当時のドイツの総学生数の3パーセントに当たる。この絵で、学生が持っている旗は、黒と赤と金の三色旗であるが、この時以来、この旗がドイツの統一と自由のシンボルとなった。そして、これが現在のドイツ国旗となっている。この事件がドイツの歴史においていかに大きな意味があるかがわかる。

学生たちは、この集会で、ルターのような「思想の自由」と、ライプチヒ戦のような「祖国の解放」を訴えた。式典は平穏におわったが、この時に、学生たちをアジる演説をしたのがイエナ大学教授のフリースであった。

また、一部の学生は式後に残り、1517年にルターが法王からの破門状を焼いたことにならって、「反ドイツ的」な書物を焼いた（右下の絵）。この焚書事件は、後の学生に大きな影響を与えた。この祭り以後、ブルセンシャフトの学生の一部は、「目的が正しければどんな手段をとっても許される」という過激な思想を持つようになった。

このブルセンシャフト運動は、100年後にナチスによって利用された。1933年のナチスによる焚書は、このヴァルトブルクの焚書を手本にしたものである。つまり、

1517年ルターの破門状焼却 → 1817年ヴァルトブルク祭での焚書 → 1933年ナチスによる焚書

と歴史的につながる。また、イエナ大学教授フリースは、このアジ演説のために大学を退職させられたが、後に彼は反ユダヤ主義を主張するようになった。その100年後、ナチスの時代になると、フリースは愛国者の模範として祭り上げられることになる。

ベルリン大学時代のヘーゲル

ベルリン時代のヘーゲル

文部大臣 アルテンシュタイン



出典: Wikipedia

対立者

シュライアマハー



ショーペンハウアー



ヘーゲル人事の背景には、こうした思想的状況があった。文部大臣アルテンシュタイン (Karl vom Stein zum Altenstein; 1770~1840年) は、学生のブルセンシャフト運動に手を焼き、権力で学生たちを弾圧するのではなく、冷静な哲学を身につけさせることで、この運動を沈静化しようとした。そのために最もふさわしいのが、理性を重視するヘーゲルの哲学だと考えたのである。

前回1816年のヘーゲル招聘では、大臣のシュックマンが躊躇したために、ハイデルベルク大学に先を越されてしまった。翌1817年には、プロイセンに宗教・教育・医務省が作られ、シュックマンにかわって、初代文部大臣に任命されたアルテンシュタインが大学の人事を担当することになった。これも幸いだった。彼は「哲学する大臣」と呼ばれるほどの人物で、フィヒテの哲学に親しんでいた。アルテンシュタインは、ヘーゲルの哲学を気に入り、ヘーゲルに手紙を書いて、プロイセンの首都であるベルリン大学に来てほしいと頼んだのである。確かに2年前は、ヘーゲルはギムナジウムの校長ではあっても大学教授としての経験がなかったのでシュックマンが躊躇したが、今やハイデルベルク大学教授として哲学者の業績も認められたので、ベルリンに呼ばれたのである。

学生運動の火消し役として

政府はヘーゲルに多額の報酬を用意した。ハイデルベルク大学の年俸が1500ターレルだったのに対して、ベルリン大学は年俸2000ターレルと旅費1000ターレルを出した。アルテンシュタインはぜひともヘーゲルがほしかったのである。

ちなみに、貨幣単位は、文献によって、ターレルだったり、フローリンだったり、グレンデンだったりするが、これは当時のドイツが小さな国に別れていて、貨幣単位も国ごとに違っていたからかもしれない。

ハイデルベルク大学にとっては人気教授のヘーゲルを取られることは悔しかっただろうが、ヘーゲルにとっては、文部大臣から価値を認められたことは、彼の哲学がプロイセン公認の哲学と認められたことであるから、うれしいことであつたらう。48歳のヘーゲルは、やっとここから歴史の表舞台にあらわれたのである。

ヘーゲルは、「学生運動の火消し役」という政治・教育的な自分の役割を理解し、教育・研究に当たった。『法の哲学』を出版し、その内容を学生たちに何回も講義したのは、そのあらわれであろう。この本ではやたら「理性」ということが強調されるのである。

ヘーゲルがベルリン大学でおこなった講義は、自然法と国家学、哲学のエンチクロペディ、論理学、哲学史、自然哲学、人間学と心理学、美学、芸術哲学、宗教哲学など、実に広範囲である。週に10時間は講義をした。

「学生運動の火消し役」というヘーゲルの立場については、賛否両論がある。

ヘーゲルは権力に迎合してプロイセン国家の御用学者に成り下がったと批判する人は多い。その代表は、ハイムの『ヘーゲルとその時代』(1857年)である。また、科学哲学者のカール・ポパーも『開かれた社会とその敵』の中でこの時代のヘーゲルを批判している。

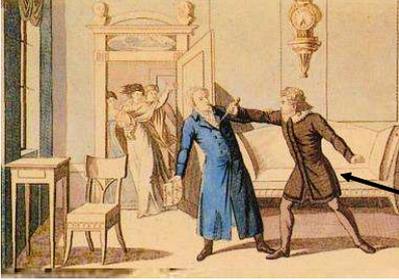
一方で、ヘーゲルの伝記作者によると、ヘーゲルはフランス革命のような自由な政治をプロイセン国家に認めて、積極的に協力したのであり、権力に迎合したのではないという。当時のドイツは小国に別れて対立しており、こうした状況では自由は実現できず、ドイツが統一されて「国家」という形ができてはじめて「自由」が実現される。シュタインやハルデンベルクのプロイセン改革は、そうした自由を実現する国家を作るためであり、ヘーゲルはそれに期待してベルリン大学に行ったのだとする。ヘーゲルは、フィヒテと同

じように、ブルセンシャフトの過激な運動は「自由」とは折り合わない非理性的なものとして批判した。この立場は、『法の哲学』の中のフリースへの罵倒によくあらわれている（後述）。

コッツェブー殺人事件

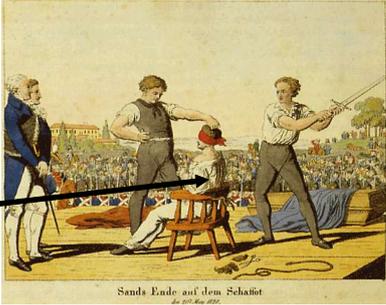
出典: Wikipedia

コッツェブー殺人事件



コッツェブー

ザントの処刑



ザント

ザント **フリース** **オーストリア宰相
メッテルニヒ**



**弾圧
デマゴグ狩り**

以上のような学生の思想状況の中であったため、ヘーゲルがベルリン大学に来てからも、学生側と大学側の対立は激しく、彼は学内の対立に巻き込まれた。

翌1819年には、コッツェブー殺人事件がおこった。ロシアのスパイとみなされた喜劇作家のコッツェブーが、ザントというイエナ大学の学生によって刺殺された（左上の絵）。ザントはすぐにつかまり、死刑となった（右上の絵、左下の写真）。このような過激な事件が頻発した。

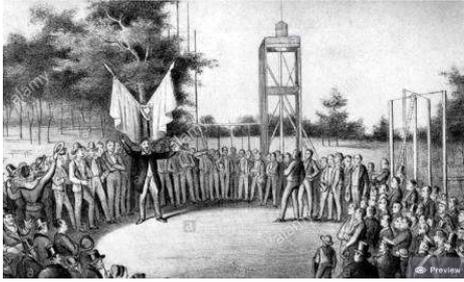
デマゴグ狩りの暗黒時代

この事件を反体制運動として弾圧したのが、オーストリアの宰相メッテルニヒであった（右下の写真）。彼は、ウィーン会議の中心人物であったが、1819年には「カールスバードの決議」を取りつけて、ブルセンシャフト運動を禁止し、言論を統制した。ブルセンシャフトなど反政府運動に参加する学生や知識人を「デマゴグ」と呼んで、デマゴグ狩りがおこなわれた。前述のイエナ大学教授のフリース（中央下の写真）は、ヴァルトブルク祭で学生たちをアジったことで大学を休職させられた（1824年に復職）。

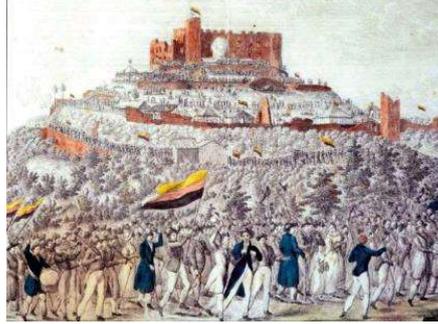
この時期は暗黒時代と呼ばれ、プロイセンが反動的な政治をおこなった時期である。知識人たちはこれに対する批判を強め、そうした状況の中で、プロイセン国家を支持したヘーゲルが後に批判されるようになった。

学生たちの政治運動

ヤーンの体操運動
(1818年ドイツ体操祝祭)



ハンバッハ祭(1832年)



フランクフルト警察襲撃(1833年)



出典: Wikipedia

3月革命(1848年)



学生たちの政治的運動はその後も続き、ヤーンの体操運動（1818年ドイツ体操祝祭）、1832年のハンバッハ祭り、1833年のフランクフルト警察襲撃事件、1848年の3月革命と続いていく。

ベルリン大学の混乱とシュライアマハーとの対立

こうした状況において、ベルリン大学教授だったデ・ヴェッテが、コッツェブー殺人者ザントの母親に慰めの手紙を出したことで逮捕されてしまう。

ヘーゲルは、デ・ヴェッテの免職を受け容れようとする大学側にたった（ちなみにデ・ヴェッテは、1816年のヘーゲル招聘を妨害した教授であった）。ヘーゲルは、フィヒテと同じく、野蛮な学生組合には禁止すべきだという意見だった。

一方、神学の有力教授のシュライアマハーは、デ・ヴェッテを弁護した。シュライアマハーは、前述のように、フィヒテの時代から学生組合には妥協的であり、今回も政府の動きに対抗した。これにより政府から監視されるなど、圧力が加えられた。

こうして、ヘーゲルとシュライアマハーと対立するようになった。デ・ヴェッテのことを議論した場では、ふたりは激昂して、殴り合わんばかりだったという。

さらに、シュライアマハーがベルリン科学アカデミーの改革をおこなうようになると、アカデミーに入れなかったヘーゲルはシュライアマハーと対立するようになる。文部大臣アルテンシュタインは、はじめヘーゲルを科学アカデミーに入れると約束してベルリンに呼んだのだが、シュライアマハーが反対したため、この約束は果たされなかった。

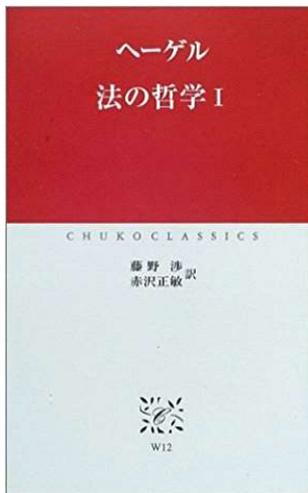
ショーペンハウアーの敵意

ヘーゲルに対して激しい敵意を向けたのが、若きショーペンハウアーであった。彼は、ベルリン大学の教授資格試験でヘーゲルに悪意のある質問を受けたことを恨んだという。ショーペンハウアーは1819年に『意志と表象としての世界』を発表し、1820年にベルリン大学の私講師となったが、ヘーゲルに敵愾心を燃やした。当時ショーペンハウアーは32歳、ヘーゲルは43歳であった。ショーペンハウアーは講義を始めたが、「これから10年間はヘーゲル教授と同じ時間帯に講義する」と宣戦布告した。

ところが、ヘーゲルの講義室は学生が溢れていたが、ショーペンハウアーの講義はごくわずかしかなかった。翌年の講義には受講者ゼロであった。著名なヘーゲルと、無名のショーペンハウアーでは勝負にならなかった。2年後には、彼は失意のうちにイタリア旅行へと旅立った。

ショーペンハウアーは、その後、大学には勤めずに、フランクフルトで在野の哲学者で通し、実存主義の先駆者として多くの哲学者・文学者に影響を与えた。彼は一生ヘーゲル哲学を罵倒し続けた。

『法の哲学』



罵倒されたフリース



ミネルヴァのフクロウ



出典:wikipedia

1821年、51歳のヘーゲルは、第4の主著『法の哲学』を出した。

学生に対して理性を重視した教育をおこなうというアルテンシュタインの要望に答えて、この本では「理性」ということが強調されている。「理性的であるものこそ現実的であり、現実的であるものこそ理性的である」。この本を教科書として、ヘーゲルは何回も講義した。

この本は、前著『エンチクロペディ』の第3部「精神哲学」のうちの「客観的精神」の章を詳しく述べたものである。『エンチクロペディ』の構成のところで述べたように、第1部「法」、第2部「道徳」、第3部「人倫」という3部構成となっている。例によって、各部も3章構成となっていて、例えば、第3部「人倫」は、「家族」「市民社会」「国家」という3章構成になっている。

この第3章では、家族における倫理について述べ、結婚や女性、子どもといったテーマを扱っている。前述のように、結婚を約束しながら母子をおいて逃げ出したヘーゲルが、こうしたことをまじめに述べているのは少し滑稽である。

罵倒されたフリース

『法の哲学』の序文で、ヘーゲルが前述のフリースを罵倒したことは有名である。はじめ原稿段階では、固有名詞は誰もあげられていなかったのだが、印刷されたときには、ヘーゲルはフリースの名前を出した。フリースは「ヴァルトブルク祭」でブルセンシャフトの学生を扇動する演説をした学者であるが、このことをあげて、彼のことを「哲学を自称する浅薄さの将帥」とまで罵倒している。よほどブルセンシャフトに対してしゃくにさわっていたのだろう。

ヘーゲルの人生において、フリースはいろいろな局面で登場する。フリース (Jakob Friedrich Fries; 1773~1843) は、カント哲学を心理学的に基礎づけようとした哲学者で、カント解釈の心理学主義は彼に始まるとされる(フリース主義)。フィヒテやヘーゲルのドイツ観念論に心理学的立場から反対した有力な学者といわれる。一般に、残念ながら(私は心理学者なので)、心理学的解釈は哲学界では嫌われるようである。1816年には、ベルリン大学でフィヒテの後任として、ヘーゲル、シェリング、フリースの3人が候補となり投票の結果ヘーゲルが決まった。このあたりから、ヘーゲルはフリースをライバルとみていたのかもしれない。

フリースは、1806~1816年まで、ハイデルベルク大学の哲学教授をつとめ、1816年からイエナ大学に移った。つまり、1806年にフリースと入れ違いにヘーゲルはハイデルベルク大学に移った。前任者であるフリースに対してヘーゲルはライバル意識を燃やし、ある手紙では、「フリースには5、6人しか聴衆者がいなかった論理学の講義で、私はこの学期で70余人の聴講者を得た」と自慢している。子どものような虚栄心である。

そして、1817年のヴァルトブルク祭では、学生たちをアジッタことでイエナ大学を休職させられた。コッツェブー殺人事件の犯人ザントはフリースの学生だった。休職中の1821年にヘーゲルの『法の哲学』で罵倒されたことになる。1824年には、イエナ大学の数学・物理学の教授として復職したが、哲学の講義は制限された。後にフリースは、反ユダヤ主義を主張するようになった。その100年後、ナチスの時代になると、フリースは愛国者の模範とされたという。

ミネルヴァのフクロウとは

『法の哲学』の序文の終わりに、「ミネルヴァのふくろうは、たそがれがやってくるとはじめて飛びはじめる」という有名な言葉がある。古代ギリシャ時代、ミネルヴァの森では、夜になるとフクロウが飛び立つ

て、道筋を照らしてくれるという。つまり「ミネルヴァのふくろう」とは哲学のことであり、夜に進む道を照らしてくれるという積極的役割を示している。一方、この言葉は、哲学は時代にさきがけて何かを提起するのではなくて、時代の最後にやってきて時代を総括するのが役割だという「歴史主義」を示しているという。つまり、哲学は過去のことを相手にする学問であり、未来のことは関与しないという消極性もあらわしている。こうした消極主義は、マルクスをはじめとして若き哲学者の失望を招いた。

ヘーゲル学派の形成

ベルリン時代の13年間は、ヘーゲルの栄光の時代である。ヘーゲルの哲学は学生の心を引きつけ、彼の講義には学生だけでなく、公務員や政府高官も聴講した。

1823年からは、ヘーゲルの弟子が、ヘーゲルの著作を教科書として、教科書通りにヘーゲル哲学を講義することもおこなわれた。ドイツの各大学では、ヘーゲル的な哲学が講義されるようになり、ドイツだけでなくヨーロッパ各地にも広がった。

ヘーゲルを信奉する哲学者が増えて、1823年頃から、いわゆる「ヘーゲル学派」が形成された。

1827年には、『ベルリン年報』という雑誌を創刊した。これはヘーゲルの論敵（シュライアマハーなど）を批判する論文を書かせて、発表させるためのものであり、「ヘーゲル新聞」と揶揄された（フィッシャー、1901）。以前のイェナ時代に、ヘーゲルはシェリングと『哲学批判雑誌』という同人誌を発行したが、『ベルリン年報』はその規模を拡大したものである。みずからジャーナルを刊行し、それをもって自派の勢力を誇示する方式を最初に発明したのはヘーゲルのこの雑誌だという（潮木、1992）。

ベルリン大学学長へ

1829年には、59歳のヘーゲルは、第18代ベルリン大学学長に選ばれ、1年間つとめた。

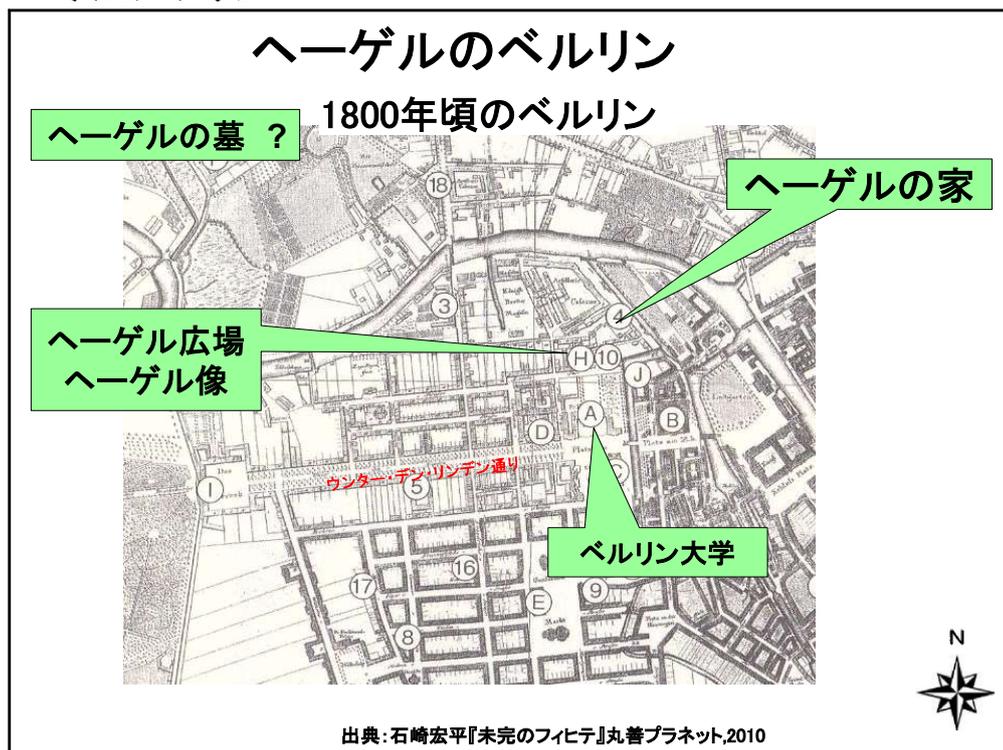
晩年は、ブリュッセル、ウィーン、パリなどヨーロッパ各地を休暇旅行した。1827年には、パリ旅行の帰途、ワイマールのゲーテを訪ねた。1830年にフランスで7月革命がおこり、ドイツにも波及したが、ヘーゲルはあまり関心を持たなかった。

ヘーゲルの死因論争

1831年、アジア・コレラがドイツで流行した。ヘーゲル一家は郊外に避難したが、流行がおさまったので戻ってきた。ヘーゲルは講義を始めたが、急に体調を崩して死亡した。享年61。

死因はコレラだとされてきた。しかし、コレラだと苦悶のうちに死ぬのがふつうなのに、ヘーゲルにはコレラらしい苦悶の症状がなく、穏やかに死んだため、後には、死因は胃病だったという説もある（加藤、1972）。当時コレラで死んだ場合は、すぐに馬車に乗せられ遠くの墓地に運ばれて埋葬されるのがふつうだが、ヘーゲルの遺体は自宅に留められ、すぐ近くの墓地に埋葬された。これも伝記では美談のように語られ、人々がコレラの感染の恐怖にかられなかったのは、それだけ偉大な哲学者を尊敬していたからだと言われてしまう。実際には、コレラが死因ではなかったが、検死医が「コレラなら突然死の理由を説得しやすいから」コレラにしたという人もいる。

ヘーゲルのベルリン



ベルリンに残るヘーゲルゆかりの地が残っている。ヘーゲルが住んだ家、ヘーゲルが教えたベルリン大学、

その北のヘーゲル広場とヘーゲル像、ヘーゲルの墓などである。これらを巡ってみよう。

ヘーゲルの住んだ家



ヘーゲルの住んだアパートが残っている。

アム・クプファーグラウベンという通りの4番地 Am Kupfergraben 4 である。この家でヘーゲルは最期を迎えた。

地図に示すように、シュプレー河の支流に面していて、対岸は博物館島である。博物館島に行ったらぜひここに寄ってみたい。

アパートの壁に、プレートが貼られている。そこには次のように彫られている。

In dem im Zweiten Weltkrieg zerstörten Nebenhaus, Am Kupfergraben 4a,
wohnte von 1828 - 1831

GEORG WILHELM FRIEDRICH HEGEL

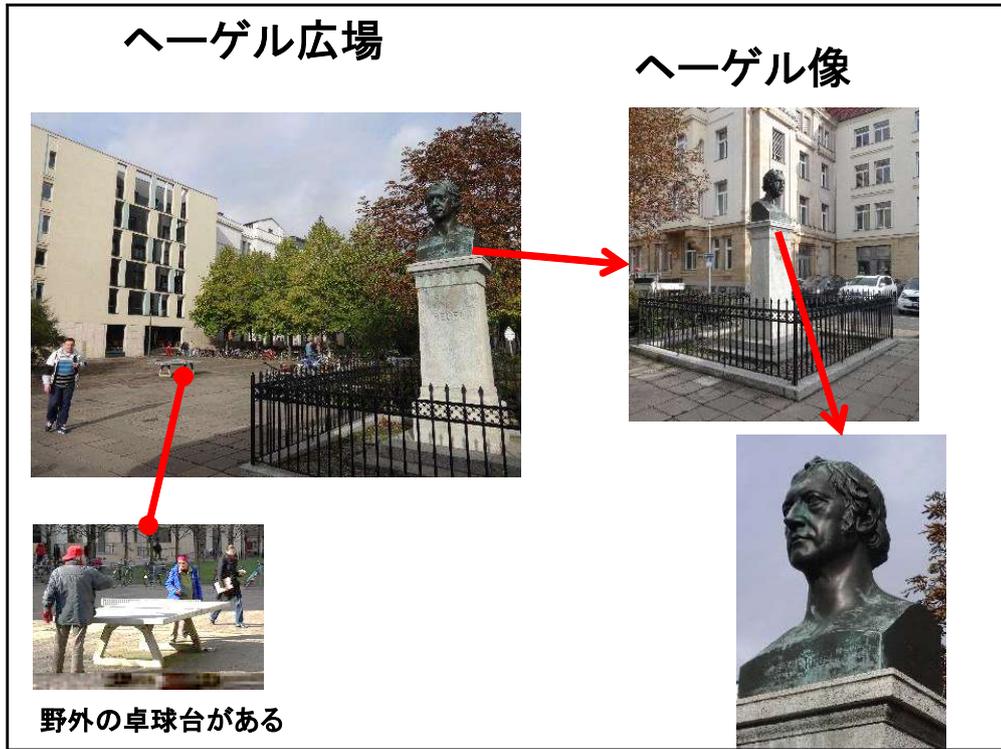
27. August 1770 - 14. November 1831

Hauptvertreter des deutschen Idealismus

seit 1818 Professor für Philosophie

an der Berliner Universität

ヘーゲル広場とヘーゲル像

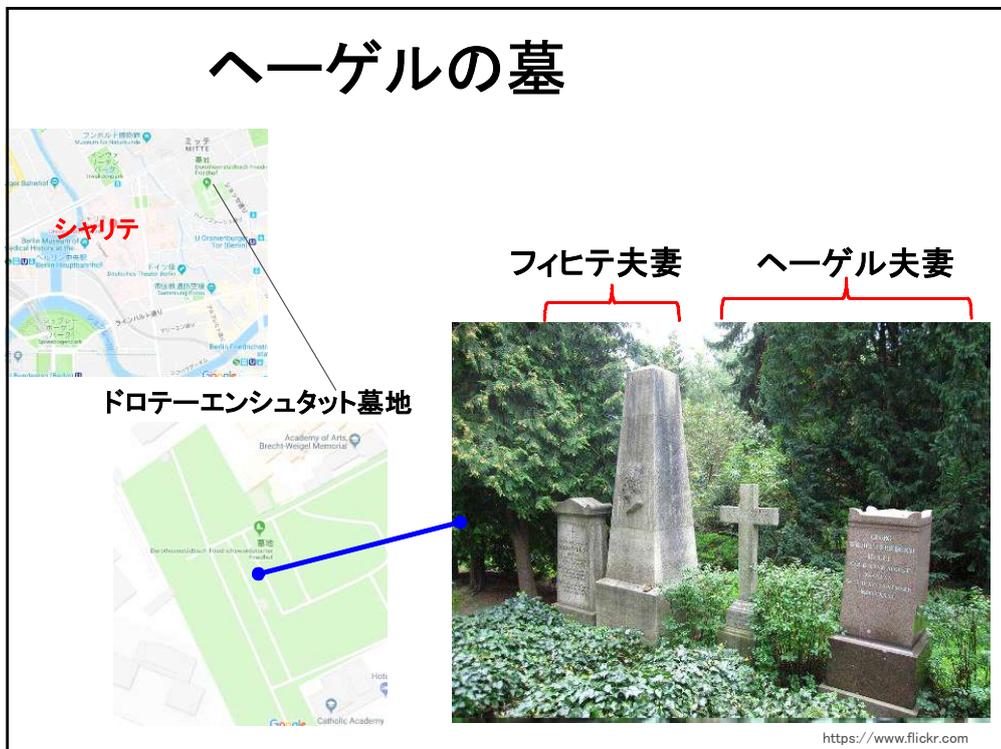


ヘーゲルが勤めたベルリン大学の北側に、ヘーゲル広場がある。公園のような広場になっている。石の卓球台が置かれていて、学生が卓球をしたりしているが、上に座って何かを食べていたりもする。

その横に、ヘーゲルの像がある。鉄柵で囲まれている。以前に行ったときは、この鉄柵がなくて、像には落書きがたくさんあったので、落書きを避けるために鉄柵を作ったのだろう。

中年期のヘーゲル像である。この肖像画は、ヤコブ・シュレシンジャーが描いたもので、ベルリンの旧ナショナル・ギャラリーに展示されている。

ヘーゲルの墓



ヘーゲルは、ドロテーエンシュタット墓地に埋葬された。

この墓地には多くの著名人の墓がある。宇佐美『ベルリン文学地図』250頁には、有名人の墓の位置が解説されている。

写真に示すように、ヘーゲル夫妻の墓石とフィヒテ夫妻の墓石が隣り合っている。

ヘーゲル学派

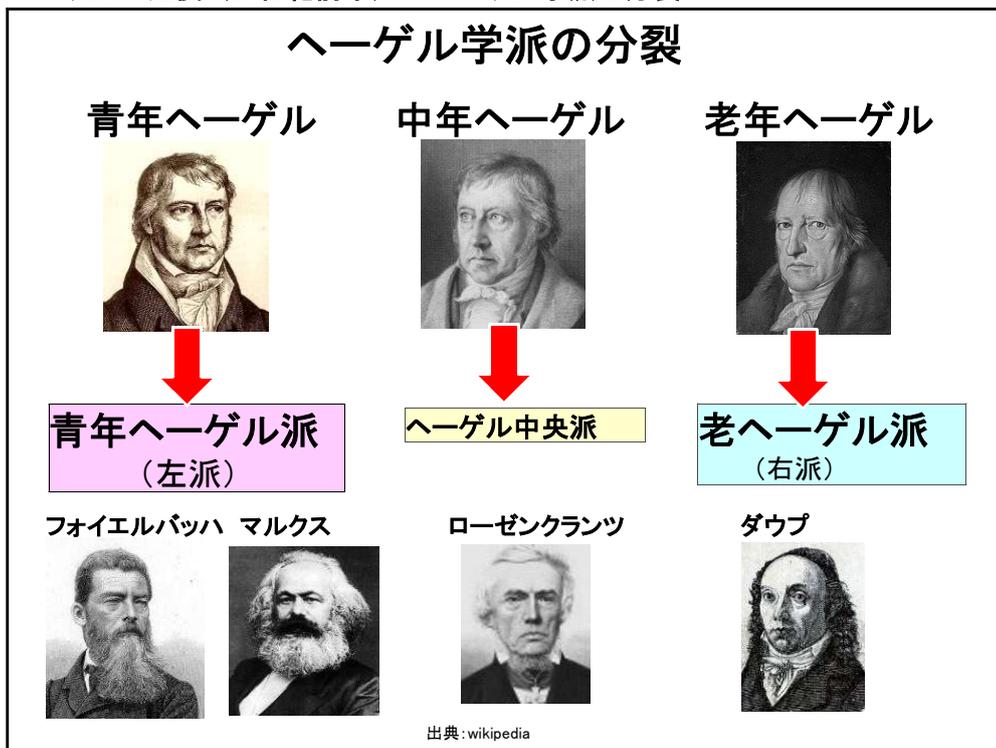
ヘーゲルが影響を与えた思想家はきわめて多く、まとめてヘーゲル学派と呼ばれる。下の表は、平凡社『哲学事典』を参考にして、4つの時期に分けて、ヘーゲル学派の代表的な思想家をまとめたものである。

◆ヘーゲル学派

時期	派閥名	代表的思想家
ヘーゲルの死後 (19世紀前半)	ヘーゲル右派 (老ヘーゲル派)	ゲッセル、ガブラー、ヘニング、ホートー、 ヒンリンクス、ダウプ
	ヘーゲル中央派	ローゼン克蘭ツ、エルトマン、ミヘレット、 マールハイネケ、ガンズ、シャラー、ファトケ、 シャスラー
	ヘーゲル左派 (青年ヘーゲル派)	シュトラウス、フォイエルバッハ、ルーゲ、 バウアー、ラッサール、マルクス、 (ハイネ、シュティルナー、キルケゴール)
19世紀後半		ディルタイ、ラッソ、ハイム、フィッシャー
20世紀前半	新ヘーゲル学派	ディルタイ、フィッシャー、ヴィンデルバント、 クローナー、シュタインテール、ラツァルス、 オイケン、ラッソ、グロックナー
第二次大戦後		ルカーチ、レヴィト、イポリット、ニエル

平凡社『哲学事典』より作成

ヘーゲルの死後（19世紀前半） ヘーゲル学派の分裂



ヘーゲルは生前からドイツの哲学を支配していたが、1831年に亡くなると、彼の弟子たちは、3つの派閥に分かれた。①ヘーゲル右派、②ヘーゲル中央派、③ヘーゲル左派である。これは弟子のシュトラウスが、政治的な右左にもとづいて命名したものである。

ヘーゲルが創始した学派という本来の意味では、ヘーゲル学派は「右派」に受け継がれている。ただし、論争の主導権は「左派」にあった。

前述のように、ヘーゲルの思想は、フランクフルト時代を境にして、大転回する。青年ヘーゲルと老ヘーゲルでは思想が全く違う。そこで、ヘーゲル右派は老ヘーゲル派、ヘーゲル左派は青年ヘーゲル派と呼ばれる。

ヘーゲル右派（老ヘーゲル派）

ヘーゲル右派は、ヘーゲルの主張をそのまま肯定し、哲学と宗教とを区別しない。彼らは、ヘーゲル哲学をそのまま保存すべく、彼の著作の刊行・解説につとめた。「老ヘーゲル派」「正統派」「保守的ヘーゲル主義者」「Hegeliter」とも呼ばれる。代表的な学者は表に示すとおりである。ダウプはヘーゲルをハイデルベルク大学に呼んだ学長である。

ヘーゲル中央派

ヘーゲル中央派は、哲学と宗教とを区別して扱った。自由主義的ヘーゲル主義者である。ローゼンクランツ（『ヘーゲル伝』の作者）、エルトマン、ミヘレット、マールハイネケ、ガンズ、シャラー、ファトケ、シャスラーらがこの派に属した。また、中央派は、教会史のテュービンゲン学派（バウル、ケストリン、ツェラー）に連なる。また、次の世代の歴史主義にもつながる。

ヘーゲル左派（青年ヘーゲル派）

ヘーゲル左派は、キリスト教を否定し、また、ヘーゲル哲学を批判した人たちである。「青年ヘーゲル派」「Hegelinge」とも呼ばれる。ヘーゲル死後の論争の主導権はこの派にあり、社会的にはこの派の動きが有名である。

ヘーゲルのキリスト教の考え方を否定したのが、シュトラウス、フォイエルバッハ、ルーゲ、バウアーらである。また、ヘーゲル哲学の批判から、理性と現実の矛盾を革命で取り除こうとするラサールやマルクスらもこの派に属する。また、「青年ドイツ派」の詩人ハイネも左派につらなる。一方、革命とは逆に、実存主義につながるシュティルナーやキルケゴールも左派につらなる。このように、マルクス主義と実存主義という20世紀の哲学の潮流の出発点にヘーゲル哲学があげられている。「もしヘーゲル哲学が存在しなかったら、マルキシズムも、実存哲学も、分析哲学も生まれてこなかっただろう」（中埜, 1968）という人もいるが、それは少し大げさかもしれない。

フォイエルバッハの「自己疎外」論

ヘーゲル左派においてヘーゲル哲学を最も鋭く批判したのはフォイエルバッハである。ルートヴィヒ・フォイエルバッハ（1804～1872年）は、ベルリン大学で神学を学び、そこでヘーゲルの講義を聴き、ヘーゲルに傾倒した。エルランゲン大学で私講師となるが、キリスト教批判をしたためクビになった。その後、ヘーゲル哲学の批判者となった。1841年『キリスト教の本質』では、キリスト教とヘーゲル哲学は人間を「自己疎外」していると批判した。

「自己疎外」とはもともとヘーゲルの用語であり、自己の本性を外に出すことで、自己にとってよそよそしい存在となってしまうことである。ヘーゲル哲学は、自己の本質を客観化し外側に抽象化するが、それによって本来の自己は見失われてしまう。

フォイエルバッハは、この「自己疎外」という用語を、ヘーゲル哲学やキリスト教そのものを批判する仕組みとして用いた。つまり、ヘーゲル哲学やキリスト教では、歴史には人間の力ではどうすることもできない大きな法則があり、それは絶対者（つまり神）が自己実現していく過程である。したがって、個々の人間は、絶対的な神に支配される道具にすぎない。絶対者（つまり神）とは、もともとは人間が作った概念なのに、人間から離れてしまい、それが逆に人間を支配してしまっている。人間はあるべき本質を見失ってしまっている。

したがって、哲学は、絶対者から始めるのではなく、現実中存在する具体的人間から出発しなければならない。こうヘーゲルを批判した。このことは実存主義の出発点と同じである。

フォイエルバッハのヘーゲル批判は、神学や哲学の専門家の内側でおこなわれたため、社会的な影響力は少なかったが、この論法を利用して、多くの人を巻き込む社会運動に高めたのがマルクスとエンゲルスである。

マルクスとエンゲルスの「自己疎外」論とマルクス主義

フォイエルバッハの自己疎外批判は、ヘーゲルの神学に対する批判であったが、この「自己疎外」論を社会制度に拡張して、ヘーゲルの社会哲学を批判したのがマルクスとエンゲルスである。

ヘーゲルは『精神現象学』の中で、国家権力や富を人間にとって「疎外」されたものであると考えていた。しかしこれは頭の中で考えただけのことで、そこから行動の指針などを得ようというわけではなかった。

マルクスとエンゲルスは、1844年の『経済学・哲学草稿』のなかで、労働というものが、もともとは人間が作り出したものなのに、それが労働者の手を離れて、逆に人間を支配するという「自己疎外」を生み出したという。商品や貨幣といった制度は、もともとは人間が作ったものだったのに、いつのまにか人間自身から離れ、逆に人間を支配するものになっている。ここまではヘーゲル哲学にもとづいており、フォイエルバッハがヘーゲルの神学やキリスト教に加えた批判と同じ論法である。

そして、こうした考え方をもとにして、マルクスとエンゲルスは、労働を資本家から労働者に取り戻すという社会運動の実践指針を見いだしていく。このように実践指針を導き出したところが、フォイエルバッハとは違うところである。

また、岩崎（1967）によると、ヘーゲル哲学は「歴史には人間の力ではどうすることもできない大きな法則がある」という哲学だが、それはマルクス・エンゲルスの科学的唯物史観と同じであると指摘している。つまり、マルクス・エンゲルスも、「歴史には人間の力ではどうすることもできない大きな法則があり、それは資本主義から社会主義への移行だ」と述べた。自分たちの社会主義は、空想的なそれではなく、科学的な法則にしたがったものだとする。こうした歴史主義解釈はまさにヘーゲルの論法である。

1989年以降のソビエト連邦の崩壊によって、こうした「科学」性は否定された。歴史とは、決して人間の力ではどうすることもできないものではなく、歴史の法則などはありえない。逆に、歴史とは人間の力（世界的な集団のパワー）によってどんどん変わっていくものであることが明らかとなった。この点で、マルクス・エンゲルスの魅力がなくなったのはもちろん

んだが、ヘーゲル哲学の魅力もまた失われたというべきであろう。

19世紀後半

ヘーゲルの弟子たちによる哲学的運動は、1848年のドイツ3月革命で終わった。19世紀後半には、ヘーゲル哲学は支配力を失い、かわって「新カント派」が主流となった。しかし、この時期でもヘーゲル哲学は、歴史主義の人々（ディルタイ）によって継承され、ラッソンによって擁護された。

また、ハイム（前述の『ヘーゲルとその時代』の作者）や、フィッシャー（前述の『ヘーゲルの生涯』の作者）は、ヘーゲル中央派につながり、ヘーゲル哲学を中立的に紹介した。

20世紀前半（新ヘーゲル学派）

ヘーゲル学派は1848年に解消したが、20世紀に入って、新たにヘーゲル哲学を復興させようとする動きがあり、これは「新ヘーゲル学派」と呼ばれる。第一次大戦、第二次大戦の時期には、ヘーゲル哲学は、民族哲学、国家哲学として愛国主義に利用された側面もある。それとは別に客観的精神の学としてのヘーゲル哲学が再評価された。19世紀後半から続いたディルタイやフィッシャーをはじめ、ヴィンデルバント、クローナー、シュタインテール、ラツァルス、オイケン、ラッソン、グロックナーなどがあげられる。

第二次大戦後

20世紀後半、第二次大戦後にも、ヘーゲル哲学を歴史的に研究する動きがある。ヘーゲル左派のマルクス主義につらなるルカーチやレヴィット、実存主義に連なるイポリットやニエルがいる。

また、科学哲学者のカール・ポパーは『開かれた社会とその敵』の中でヘーゲルを批判している。この本は、最初『三人の偽予言者 プラトン、ヘーゲル、マルクス』というタイトルで書かれた。プラトンとヘーゲルという形而上学や、マルクスの歴史の法則性などについて、反証できないような学説はエセ科学であると批判する。

日本とヘーゲル

ヘーゲルは明治時代から日本に紹介されていた。夏目漱石の『三四郎』にもヘーゲルは登場する（1908、明治41年）。主人公の三四郎は大学の図書館で借りた本に、ヘーゲルについての落書きを見つける。当時の日本でも、哲学といえばヘーゲルであり、哲学者として尊敬されていたことがわかる。彼がベルリン大学で講義をしていたことは、日本の学生にもよく知られていた。

いっしょに借りた書物のうち、まだあけてみななかった最後の一冊を何気なく引っぺがしてみると、本の見返しのあいた所に、乱暴にも、鉛筆でいっぱい何か書いてある。

「ヘーゲルのベルリン大学に哲学を講じた時、ヘーゲルに毫も哲学を売るの意なし。彼の講義は真を説く
の講義にあらず、真を体せる人の講義なり。舌の講義にあらず、心の講義なり。真と人と合して醇化一致せ
る時、その説くところ、言うところは、講義のための講義にあらずして、道のための講義となる。哲学の講
義はここに至ってはじめて聞くべし。いたずらに真を舌頭に転ずるものは、死したる墨をもって、死したる
紙の上に、むなしき筆記を残すにすぎず。なんの意義かこれあらん。……」

とある。署名はむろんない。三四郎は覚えぬ微笑した。けれどもどこか啓発されたような気がした。哲学ばかりじゃない、文学もこのとおりでろうと考えながら、ページをはぐると、まだある。「ヘーゲルの…」よほどヘーゲルの好きな男とみえる。

「ヘーゲルの講義を聞かんとして、四方よりベルリンに集まれる学生は、この講義を衣食の資に利用せんと
の野心をもって集まれるにあらず。ただ哲人ヘーゲルなるものありて、講壇の上に、無上普遍の真を伝うる
と聞いて、向上求道の念に切なるがため、壇下に、わが不穩底の疑義を解釈せんと欲したる清浄心の発現に
ほかならず。このゆえに彼らはヘーゲルを聞いて、彼らの未来を決定しえたり。自己の運命を改造しえたり。
のっぺらぼうに講義を聞いて、のっぺらぼうに卒業し去る公ら日本の大学生と同じ事と思ふは、天下のうぬ
ぼれなり。公らはタイプ・ライターにすぎず。しかも欲張ったるタイプ・ライターなり。公らのなすところ、
思うところ、言うところ、ついに切実なる社会の活気運に関せず。死に至るまでのっぺらぼうなるかな。死
に至るまでのっぺらぼうなるかな」

与次郎が、例のヘーゲル論をさして、小さな声で、

「だいぶふるってる。昔の卒業生に違いない。昔のやつは乱暴だが、どこかおもしろいところがある。実際このとおりで」とにやにやしている。だいぶ気に入らしい。

出典：夏目漱石『三四郎』青空文庫

このようにヘーゲルは、「普遍の真を伝うる」西洋の哲人として崇められていたが、しかし、ヘーゲルの哲学はキリスト教と不可分であるので、日本人がヘーゲルを本当の意味で理解するのは難しいのではなかろうか。

日本の哲学者としては、西田幾多郎や田辺元が新ヘーゲル主義に近いとされる。彼らはヘーゲル哲学を理解し、そのうえに立って、東洋的・日本的な立場からヘーゲルを超克する独自の体系を築いた（中塾、1968）。

<参考文献>

- 丹野義彦『ロンドンこころの臨床ツアー』星和書店 2008
丹野義彦『イギリスこころの臨床ツアー 大学と精神医学・心理学臨床施設を歩く』星和書店 2012
丹野義彦『アメリカこころの臨床ツアー アメリカ:精神医学・心理学臨床施設の紹介』星和書店 2010
丹野義彦『イタリア・アカデミックな歩きかた』有斐閣、2015年
中埜肇『ヘーゲル—理性と現実』中公新書、1968.
澤田章『ヘーゲル 人と思想』清水書院CenturyBooks、2015.
スペンサー（椋田直子訳）『FOR BEGINNERS ヘーゲル』現代書館、1996.
城塚登『人類の知的遺産 46 ヘーゲル』講談社、1980.
岩崎武雄「ヘーゲルの生涯と思想」 『世界の名著 35 ヘーゲル』中央公論社、1967.
増淵幸男『シュライアーマッハーの思想と生涯：遠くて近いヘーゲルとの関係』玉川大学出版部、2000.
権左武志『ヘーゲルとその時代』岩波新書、2013.
ヘーゲル（藤野渉・赤沢正敏訳）『法の哲学 I・II』中公クラシックス、2011.（原書は1821年）
ヘーゲル（伴博訳）『キリスト教の精神とその運命』平凡社ライブラリー、1997.
ヘーゲル『惑星軌道論』村上恭一訳、法政大学出版局 叢書ユニベルシタス、1991
ローゼンクランツ（中埜肇訳）『ヘーゲル伝』みすず書房、1983（原書は1844年）
フィッシャー（玉井茂・磯江景孜訳）『ヘーゲルの生涯：著作と学説第1巻 ヘーゲルの生涯』勁草書房、1971.（原書は1901年刊）
ディルタイ（久野昭・水野建雄訳）『ヘーゲルの青年時代』以文社、1976.（原書1921年）
ドント（飯塚勝久・飯島勉訳）『知られざるヘーゲル—ヘーゲル思想の源流に関する研究』未来社、1980（原書1968）
ドント（花田圭介監訳、杉山吉弘訳）『ベルリンのヘーゲル』法政大学出版局、1983（原書1968）
ビエダーマン（尼寺義弘訳）『ヘーゲル 伝説と学説』阪南大学翻訳叢書、大月書店、1987.（原書は1981年）
シンガー（島崎隆訳）『ヘーゲル入門 精神の冒険』青木書店、1995.（原書は1983年）
ドント（飯塚勝久訳）『ヘーゲル伝』未来社、2001.（原書は1998）
フルダ（海老澤善一訳）『ヘーゲル 生涯と著作』梓出版社、2013.
イエシュケ（神山伸弘・久保陽一・座小田豊・島崎隆・高山守・山口誠一監訳）『ヘーゲルハンドブック：生涯・作品・学派』知泉書房、2016.
アルトハウス（山本尤訳）『ヘーゲル伝—哲学の英雄時代』叢書ユニベルシタス、法政大学出版局、1999.
ジャン=クレ・マルタン（信友建志訳）『哲学の犯罪計画：ヘーゲル『精神現象学』を読む』法政大学出版局、2013.（原書は2009年）
竹田青嗣・西研『完全解説 ヘーゲル『精神現象学』』講談社選書メチエ、2007.
西研『ヘーゲル・大人のなりかた』NHKブックス、1995.
宇佐美幸彦『ベルリン文学地図』関西大学出版部、2008
潮木守一『ドイツの大学 文化史的考察』講談社学術文庫、1992.
『哲学事典』平凡社、1971.
加藤将之『ハイデルベルクの神話』短歌新聞社、1972
野田又夫「カントの生涯と思想」 『世界の名著 32 カント』中央公論社、1972.
カント（中山元訳）『永遠平和のために／啓蒙とは何か』光文社古典新訳文庫、2006.
クレッチマー（内村祐司訳）『天才の心理学』（岩波文庫）
春原千秋・梶谷哲男「ヘルダーリン」 『精神科医からみた西欧作家』毎日新聞社、1979.
ポパー（小河原誠・内田詔夫）『開かれた社会とその敵 第2部 予言の大潮』未来社、1980.（原書1950）

●元のページに戻る

<http://tannoy.sakura.ne.jp/>